愛媛大学埋蔵文化財調査報告 X

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

―1999・2000年度―

愛媛大学埋蔵文化財調査室

２００３

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

―1999・2000年度―

愛媛大学埋蔵文化財調査室

２００３

序　　文

愛媛大学は、松山市および愛媛県内各所に大小のキャンパスをもち、敷地総面積は464ヘクタールにおよぶ。その中で、本部事務局と４つの学部が所在する城北地区には文京遺跡、農学部と附属高等学校がある樽味地区には樽味遺跡、国際交流会館がある鷹子団地では鷹子遺跡など、数多くの遺跡をかかえている。愛媛大学では、埋蔵文化財調査室を設置し、こうした埋蔵文化財が諸工事で影響を受ける場合、影響度に応じて、本格的な全面調査、試掘調査、立会調査の方法で発掘調査を実施し保護処置を講じている。また、1992年度からは、大学構内における埋蔵文化財の有無や精度の高い分布状況を把握するために確認調査を実施している。

こうした調査成果は、客観的な資料化を進め、調査報告書にまとめて公開する必要がある。この報告書の刊行によって、遺跡の評価が行われる。ところが、本格的な全面調査については、調査報告書刊行には発掘作業と同等の時間を記録類や出土品の整理作業に要する。愛媛大学の場合、出土品の多さと、1995年から続く頻繁な発掘調査によって、速やかな報告書刊行を容易に行えない状況にある。そこで、大学事務局と協議を行い、全面調査の報告書刊行に向けて埋蔵文化財調査室の体制を再整備し整理作業を前進させることとなった。これと同時に、2000年度からは、全面調査の概要報告と試掘・立会・確認調査の小規模調査の報告をあわせた年報を刊行している。本年報は、その1999・2000年度分である。

本書をまとめるにあたり、多くの機関・部局・個人の方々から協力を得た。その労に深く感謝するとともに、本書が大学内外の多くの方々に利用・活用されることを祈念します。

平成15年３月１日

愛媛大学埋蔵文化財調査室
室長　下　條　信　行

例　　言

1．本書は、愛媛大学埋蔵文化財調査室が1999年度と2000年度に愛媛大学構内で実施した大規模全面調査の概要と、試掘・立会・確認形式で行った小規模調査の成果を報告する愛媛大学埋蔵文化財調査室年報であり、愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ｘにあたる。

2．埋蔵文化財調査室では、1975年から始まった大学構内の発掘調査まで遡って調査番号を与えている。調査番号は、西暦の下３桁の後に各年度ごとの調査順に１からの２桁の通し番号を加えた５桁の番号で表示している。また、複数の地点（トレンチ）を調査した場合、以下のように，調査番号の後に－をつけ地点番号を付している。

９９５０１－４
- 調査年度（西暦の下３桁）
- 年度ごとの調査順に付した番号
- 複数の地点を調査した場合の地点（トレンチ）番号

3．城北団地では、1998年、国土基本図における平面直角座標系第Ⅳ系X＝93900、Y＝－66800を基点として、東から西へ向かって、５ｍおきにAA・AB・AC・AD……BA・BB・BC・BD……EM・EN・EO・EP、南から北へ向かって１・２・３・４・５・６……115・116・117・118・119・120に区割りし、両者を組み合わせた５ｍ方眼の調査区画によって調査を進めている。さらに、必要に応じて、この区画内を１ｍ方眼に分け、南東隅から西に１～５、そして北側列を６～10と、北西隅の25区画に細分している。

4．調査データが蓄積された城北団地と樽味団地については、団地全域にわたる基本層序を設定している。個々の調査では、大区分を基本層序に準拠し、それを構成する細かな土層ごとに枝番号を付けて特徴や構成を観察し記録化している。

［城北団地］ 基本層序を上位からⅠ～Ⅴ層に区分している。

Ⅰ層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土部分。
Ⅱ層：造成以前の灰色系の近世～近代の水田層。
Ⅲ層：弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含する黒色～暗褐色系の土層。
Ⅳ層：黄褐色系のシルト～砂質土層で、下部には礫が混じる。縄文時代の遺構・遺物が確認されている。
Ⅴ層：Ⅳ層下の花崗岩を主体とする砂礫ないし礫層である。

［樽味団地］ 基本層序を上位からⅠ～Ⅴ層に区分する。北吉井団地においても同様の層序を用いている。

Ⅰ層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土部分。
Ⅱ層：造成以前の灰色系の近世～近代の水田層。
Ⅲ層：遺物を包含する黒色～黒褐色系の土層。
Ⅳ層：黄褐色系のシルト～砂質土層で、下部には礫が混じる。
Ⅴ層：Ⅳ層下の花崗岩を主体とする砂礫ないし礫層。

5．本書では、遺構番号に冠して、掘立柱建物：SB、竪穴式住居跡：SC、溝：SD、炉跡・竈：SF、柵列：SA、水田：SS、土壙：SK、柱穴・小穴：SP、自然流路：SR、その他の遺構：SXの記号で遺構の種別を表している。

6．本書で表示した方位・標高数値は、全面調査においては平面直角座標系第Ⅳ系にしたがった。ただし、試掘・立会調査・確認調査で座標系が利用できなかった場合は、調査地点周囲の平板測量成果を掲載し、磁北を表示した。

7．土色・遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1967）に準拠しているが、本文中ではマンセル記号は省略した。

8．本書に使用した遺構図は、田崎博之・吉田広・三吉秀充・宮崎直栄が作成し浄写を行った。

9．本書に使用した遺物図は、田崎・吉田・三吉・宮崎に加えて、山村芳貴・上山喜也が作成し浄写を行った。

10．本書で使用した写真は、田崎・吉田・三吉が撮影した。

11．本書は田崎・吉田・三吉・山村が執筆し、編集を下條信行の指導のもとに田崎が行った。

12．本書に報告した調査に係わる記録類・出土遺物は、愛媛大学埋蔵文化財調査室において保管されている。

本文目次

Ⅰ　1999・2000年度の埋蔵文化財調査室の事業
1　埋蔵文化財調査委員会と発掘調査・整理作業　1
2　整理体制の強化　6
3　出土品・調査記録類の活用状況　6

Ⅱ　1999年度の調査
99901　工学部等総合研究実験棟新営電気設備工事に伴う調査（1期）（文京遺跡19次調査Ⅰ区）　9
99902　工学部等総合研究実験棟新営電気設備工事に伴う調査（2期）（文京遺跡19次調査Ⅱ区）　17
99903　農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事に伴う立会調査（1期）　33
99904　農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事に伴う立会調査（2期）　34
99905　農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事に伴う立会調査（3期）　39
99906　農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事に伴う立会調査（4期）　44
99907　「大正天皇お手植えの松」移植に伴う立会調査　45
99908　理工学部等総合実験棟新営電気設備工事（その2）に伴う立会調査　46
99909　総合情報処理センター新営電気設備工事に伴う立会調査　49
99910　愛媛大学サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー（S. B. B. L.）新営工事に伴う調査（文京遺跡20次調査）　50
99911　大学会館改修工事に伴う試掘調査　56
99912　城北団地外灯移設に伴う立会調査　58
99913　農学部生態観察実験のための水田設置に伴う調査　59
99914　埋蔵文化財調査室情報通信設備工事に伴う立会調査　60
99915　法文学部講義棟空調電源工事に伴う立会調査　61
99916　農学部附属農業高等学校校舎新営工事に伴う立会調査　61

Ⅲ　2000年度の調査
00001　大学会館改修工事に伴う立会調査　63
00002　教育学部クレイテニスコート改修工事に伴う試掘調査　66
00003　基礎科学総合研究棟新営工事（Ⅰ期）に伴う調査（文京遺跡21次調査）　68
00004　山越運動場上水管改修工事に伴う立会調査　78
00005　2000年度遺跡範囲確認調査（文京遺跡22次調査）　79
00006　教育学部クレイテニスコート改修工事に伴う立会調査　82
00007　法文学部掲示板設置工事に伴う立会調査　84
00008　御幸寮外灯設備改修その他工事に伴う立会調査　84

挿図目次

図１　1999・2000年度城北団地調査地点位置図
（縮尺 1/3500）……3
図２　1999・2000年度樽味団地調査地点位置図
（縮尺 1/2500）……4
図３　1999・2000年度山越団地調査地点位置図
（縮尺 1/3500）……5
図４　1999・2000年度御幸団地調査地点位置図
（縮尺 1/2500）……5
図５　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）
１～４トレンチ位置図、土層柱状図
（縮尺 1/400、1/40）……10
図６　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）
５・６トレンチ位置図、土層断面図
（縮尺 1/400、1/40）……12
図７　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）
７～10トレンチ位置図、土層断面・柱状図
（縮尺 1/400、1/100、1/40）……13
図８　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）出土遺物
実測図１（縮尺 1/4）……16
図９　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）出土遺物
実測図２（縮尺 1/4）……16
図10　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）出土遺物
実測図３（縮尺 1/2）……16
図11　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
１～３トレンチ位置図、土層断面図
（縮尺 1/500、1/40）……18
図12　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）出土遺物
実測図１（縮尺 1/4）……20
図13　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
１－２－３間トレンチ平面図、土層断面図
（縮尺 1/100、1/40）……21
図14　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）出土遺物
実測図２（縮尺 1/4）……22
図15　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
４・５トレンチ位置図、土層断面図
（縮尺 1/500、1/40）……23
図16　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
６～８トレンチ位置図、土層断面図
（縮尺 1/500、1/40）……25
図17　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
９・10トレンチ位置図、土層断面図
（縮尺 1/500、1/40）……26
図18　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）出土遺物
実測図３（縮尺 1/4、1/2）……27
図19　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
11・12トレンチ位置図、土層断面図
（縮尺 1/500、1/40）……29
図20　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
13・14トレンチ位置図、土層断面図
（縮尺 1/500、1/40）……30
図21　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
15～17トレンチ位置図、土層断面図
（縮尺 1/500、1/40）……31
図22　99903調査位置図および土層柱状図
（縮尺 1/400、1/40）……33
図23　99904調査１～５トレンチ位置図、遺構検出
平面図、土層柱状図（縮尺 1/400、1/40）…35
図24　99904調査６～８トレンチ位置図、遺構検出
平面図、土層柱状図（縮尺 1/400、1/40）…37
図25　99904調査出土遺物実測図（縮尺 1/2）……38
図26　99904調査９・10トレンチ位置図、土層柱状図
（縮尺 1/400、1/40）……38
図27　99905調査１～５トレンチ位置図、土層柱状図、
土層断面図（縮尺 1/400、1/40）……40
図28　99905調査３～５トレンチ平面図、土層断面図
（縮尺 1/100、1/40）……41
図29　99905調査３トレンチ平面図、土層断面図
（縮尺 1/40）……41
図30　99905調査４トレンチ平面図、土層断面図
（縮尺 1/40）……43
図31　99905調査出土遺物実測図１（縮尺 1/4）…43
図32　99905調査出土遺物実測図２（縮尺 1/2）…44
図33　99906調査地点位置図、土層柱状図
（縮尺 1/400、1/40）……44
図34　99907調査土層柱状図（縮尺 1/40）……46
図35　99907調査出土遺物実測図（縮尺 1/4）……46
図36　99908調査遺構配置図、土層断面図
（縮尺 1/40）……47
図37　99908調査出土遺物実測図（縮尺 1/4）……48
図38　99910調査（文京遺跡20次）中世～近世の遺構

配置図（縮尺 1/200）……52
図39　99910調査（文京遺跡20次）弥生時代～古墳時代の遺構配置図（縮尺 1/200）……53
図40　99911調査１～４トレンチ土層断面図（縮尺 1/40）……57
図41　99912調査土層柱状図（縮尺 1/40）……58
図42　99913調査地点位置図、土層柱状図（縮尺 1/500、1/40）……59
図43　99914調査位置図（縮尺 1/500）……60
図44　99916調査土層柱状図（縮尺 1/40）……62
図45　00001調査１・２・３トレンチ土層断面図、土層柱状図（縮尺 1/40）……63
図46　城北団地大学会館周辺の調査地点、地形断面図（縮尺 1/750、1/75）……65
図47　00002調査１～５トレンチ土層柱状図（縮尺 1/40）……66
図48　00003調査（文京遺跡21次）調査区配置図（縮尺 1/2000）……69
図49　00003調査（文京遺跡21次）Ⅲ層～Ⅳ層上面の弥生時代～中世遺構配置図（縮尺 1/250）……70-71（折り込み）
図50　00003調査（文京遺跡21次）土層断面図（縮尺 1/200、 1/20）……70-71（折り込み）
図51　00003調査（文京遺跡21次）Ⅳ層上半部（縄文時代後期？）およびSX-400（縄文時代晩期終末～弥生時代前期初頭）遺構配置図（縮尺 1/250）……76
図52　00003調査（文京遺跡21次）SX-417（縄文時代前期）、Ⅴ層上面測量図（縮尺 1/150）……77
図53　00004調査１トレンチ位置図、土層柱状図（縮尺 1/400、1/40）……78
図54　00004調査２トレンチ位置図、土層柱状図（縮尺 1/400、1/40）……78
図55　00005調査（文京遺跡22次）平面図および土層断面図（縮尺 1/200、1/20）80－81（折り込み）
図56　00005調査（文京遺跡22次）出土遺物実測図（縮尺 1/4）……81
図57　00006調査１・４トレンチ平面図、土層柱状図（縮尺 1/40）……82
図58　00007調査１～３トレンチ位置図、土層柱状図（縮尺 1/400、1/40）……83
図59　00008調査１～４トレンチ位置図、土層柱状図（縮尺 1/500、1/40）……85
図60　00008調査出土遺物実測図（縮尺 1/4）……86

写真目次

写真 1　文京遺跡20次調査現地説明会・文京遺跡解説表示板……7
写真 2　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）１トレンチ（南から）……11
写真 3　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）２トレンチ（西から）……11
写真 4　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）３トレンチ（南から）……11
写真 5　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）４トレンチ（南から）……11
写真 6　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）５トレンチ（西から）……11
写真 7　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）６トレンチ（南から）……11
写真 8　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）７トレンチ（西から）……14
写真 9　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）８トレンチ（南西から）……14
写真 10　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）９トレンチＡ区（西から）……14
写真 11　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）９トレンチＢ区（北東から）……14
写真 12　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）10トレンチＡ区北半部（南から）……14
写真 13　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）10トレンチＤ区（南西から）……14
写真 14　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）１－２－３間トレンチ全景（西から）……19
写真 15　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）１－２－３間トレンチ遺物出土状況（北西から）……19
写真 16　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）１トレンチ南壁土層断面……19

写真 17　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）2トレンチ
南壁土層断面 ……19
写真 18　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）3トレンチ
南壁土層断面 ……19
写真 19　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）4・5
トレンチ全景（南から） ……24
写真 20　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）6・7
トレンチ位置（北東から） ……24
写真 21　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）4トレンチ
北壁土層断面 ……24
写真 22　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）5トレンチ
南壁土層断面 ……24
写真 23　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）6トレンチ
西壁土層断面 ……24
写真 24　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）7トレンチ
北壁土層断面 ……24
写真 25　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）8トレンチ
北壁土層断面 ……24
写真 26　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）9トレンチ
SP-1・SK-2（北西から） ……28
写真 27　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）9トレンチ
東壁土層断面 ……28
写真 28　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）10トレンチ
SK-1（北から） ……28
写真 29　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）10トレンチ
南壁土層断面 ……28
写真 30　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）11トレンチ
北壁土層断面 ……28
写真 31　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）12トレンチ
土層断面 ……28
写真 32　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）13トレンチ
西壁土層断面 ……28
写真 33　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）14トレンチ
北壁土層断面 ……28
写真 34　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）15トレンチ
北壁土層断面 ……32
写真 35　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）16トレンチ
北壁土層断面 ……32
写真 36　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）17トレンチ
北壁土層断面 ……32
写真 37　99903調査地点（南から）……33
写真 38　99904調査1トレンチ（北から）……36
写真 39　99904調査2トレンチ（北から）……36
写真 40　99904調査3・4トレンチ（北西から）…36
写真 41　99904調査3トレンチ中世遺構検出面
（北東から）……36
写真 42　99904調査5トレンチ（西から）……36
写真 43　99904調査6トレンチ（南西から）……36
写真 44　99904調査7トレンチ（西から）……39
写真 45　99904調査8トレンチ（北東から）……39
写真 46　99904調査9トレンチ（南から）……39
写真 47　99904調査10トレンチ（東から）……39
写真 48　99905調査1トレンチ（西から）……42
写真 49　99905調査2トレンチ（北から）……42
写真 50　99905調査3トレンチ（東から）……42
写真 51　99905調査4トレンチ西半部の中世遺構の
完掘状況（西から） ……42
写真 52　99905調査4トレンチ西半部の完掘状況
（東から）……42
写真 53　99905調査5トレンチ（西から）……42
写真 54　99906調査土層断面（東から）……45
写真 55　99908調査状況（西から）……48
写真 56　99908調査北半部の遺構検出状況
（北から）……48
写真 57　99909調査3トレンチ……49
写真 58　99909調査4トレンチ……49
写真 59　99910調査（文京遺跡20次）中世～
近世遺構の完掘状況（南東から） ……51
写真 60　99910調査（文京遺跡20次）弥生時代～
古墳時代遺構の完掘状況（南東から） …51
写真 61　99910調査（文京遺跡20次）SX-13
（北から）…… 54
写真 62　99910調査（文京遺跡20次）SD-1～4
検出状況（北西から） ……54
写真 63　99910調査（文京遺跡20次）SD-2下層獣骨
出土状況（西から） ……54
写真 64　99910調査（文京遺跡20次）SD-1～4
完掘状況（西から） ……54
写真 65　99910調査（文京遺跡20次）鞴羽口
出土状況（南から） ……55
写真 66　99910調査（文京遺跡20次）SX-22
（北西から）……55
写真 67　99910調査（文京遺跡20次）弥生時代～
古墳時代遺構の検出状況（南東から） …55
写真 68　99910調査（文京遺跡20次）SC-27・28
（西から）……55

写真 69　99910調査（文京遺跡20次）SC-35（北から）……55
写真 70　99910調査（文京遺跡20次）SC-35焼土・炭化物出土状況（東から）……55
写真 71　99911調査１トレンチ土層断面……56
写真 72　99911調査４トレンチ土層断面……56
写真 73　99912調査地点（東から）……58
写真 74　99913調査地点（北東から）……59
写真 75　99913調査地点西側溝部分の土層断面……59
写真 76　99915調査地点土層断面……61
写真 77　00001調査全景（北西から）……64
写真 78　00001調査１トレンチ（南東から）……64
写真 79　00001調査２トレンチ西壁土層断面……64
写真 80　00001調査３トレンチ西壁土層断面……64
写真 81　00002調査２トレンチ北壁土層断面……67
写真 82　00002調査３トレンチ北壁土層断面……67
写真 83　00002調査４トレンチ北壁土層断面……67
写真 84　00002調査５トレンチ東壁土層断面……67
写真 85　00003調査（文京遺跡21次）Ⅰ区弥生時代～中世の遺構完掘状況（北西から）……72
写真 86　00003調査（文京遺跡21次）SD-１～４検出状況（西から）……72
写真 87　00003調査（文京遺跡21次）SD-１・２および、合流地点土層断面（西から）……72
写真 88　00003調査（文京遺跡21次）SD-５・６完掘状況（西から）……73
写真 89　00003調査（文京遺跡21次）SD-11完掘状況（西から）……73
写真 90　00003調査（文京遺跡21次）SD-11土層断面……73
写真 91　00003調査（文京遺跡21次）SC-28完掘状況（北から）……73
写真 92　00003調査（文京遺跡21次）SC-30・34、SK-31 完掘状況（西から）……73
写真 93　00003調査（文京遺跡21次）Ⅳ層上半部および下半部の完掘状況（北西から）…74
写真 94　00003調査（文京遺跡21次）Ⅰ区南西部Ⅳ層完掘状況、土層断面（西から）……74
写真 95　00003調査（文京遺跡21次）SK-401・402検出状況（西から）……74
写真 96　00003調査（文京遺跡21次）SK-401（西から）……74
写真 97　00003調査（文京遺跡21次）SK-407、SP-408・409、SX-412検出状況（南から）……74
写真 98　00003調査（文京遺跡21次）SX-414検出状況（東から）……74
写真 99　00003調査（文京遺跡21次）SX-415検出状況（東から）……74
写真100　00005調査（文京遺跡22次）全景（南から）……80
写真101　00005調査（文京遺跡22次）土層断面（南から）……80
写真102　00005調査（文京遺跡22次）西壁土層断面（南から）……81
写真103　00005調査（文京遺跡22次）東壁遺物出土状況（北西から）……81
写真104　00006調査１トレンチ（南から）……83
写真105　00006調査４トレンチ（南から）……83
写真106　00007調査区全景（西から）……83
写真107　00007調査１トレンチ（南から）……83
写真108　00008調査１トレンチ（西から）……86
写真109　00008調査２トレンチ（西から）……86
写真110　00008調査３トレンチ（北から）……86
写真111　00008調査４トレンチ（西から）……86

表　目　次

表１　埋蔵文化財調査委員会の体制（1999・2000年度）……1
表２　1999・2000年度資料利用一覧……8
表３　00003調査（文京遺跡21次）における埋土の類型と遺構一覧……71
表４　愛媛大学構内における調査一覧（2003年３月現在まで）……87-90

Ⅰ　1999・2000年度の埋蔵文化財調査室の事業

1　埋蔵文化財調査委員会と発掘調査・整理作業

1999・2000年度には、1998年度後半から総合情報処理センター新営工事に伴う文京遺跡18次調査、遺伝子実験施設新営工事に伴う樽味遺跡５次調査が継続され、これに加えて、1999年度にはサテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー建物新営工事に伴う文京遺跡20次調査、2000年度には理学部構内における総合研究棟新営Ⅰ期工事に伴う文京遺跡21次調査が実施された。これらは補正予算による建物建設に対応する発掘調査で、年度当初の運営計画を大きく変更せざるを得なくなっている。そうした1999・2000年度に愛媛大学埋蔵文化財調査室が実施した事業を報告する。

なお、2001年３月24日に発生した芸予地震では、出土品を仮収納している統合車庫のシャッターが閉まらなくなるなどの被害が生じたが、幸なことに出土品や記録類には被害はなかった。

（1）　埋蔵文化財調査委員会

愛媛大学では、埋蔵文化財調査委員会を毎年度開催し、埋蔵文化財調査室の運営に関わる事項等を審議している。1999・2000年度の埋蔵文化財調査委員会の体制は、表１の通りである。

1999年度には、４月１日付けの規程改正によって、渡部晴行副学長が埋蔵文化財調査委員長にあたることとなった。埋蔵文化財調査委員会は、７月14日に開かれた。前年度の事業報告と新年度の事業報告が説明され了承されるとともに、前年度に決定された城北団地内の文京遺跡保存（グリーンゾーン化）の経緯説明が行われた。渡部委員長からは、グリーンゾーンでは建物を建てずに、学生・市民の憩いの場とすることが決まっていることの確認があった。

また、下條信行埋蔵文化財調査室長からは、文京遺跡の現段階における評価を周知化するため、手始めとして法文学部本館北西側の古い遺跡案内板を新たなものに設置し直すことへの提案があり、埋蔵文化財調査室と施設部で協議することとなった。

さらに、建物建設に伴う大規模調査が連年続いており、報告書作成のための整理作業や刊行準備を中断せざるを得ず、その結果として1994年度以降の調査分は未刊行となっていることが報告された。これに対して、渡部委員長から、埋蔵文化財調査室の業務には、発掘調査だけでなく報告書作成も含まれており、前向

表１　埋蔵文化財調査委員会の体制（1999・2000年度）

1999年度				2000年度			
委員氏名		所属部局	備　考	委員氏名		所属部局	備　考
委員長	渡部　晴行	副学長	1999. 4. 1新任	委員長	小松　正幸	副学長	2000. 4. 1新任
委　員	藤川　研策	法文学部長	1999. 4. 1新任	委　員	藤川　研策	法文学部長	
委　員	下條　信行	法文学部教授 （埋蔵文化財調査室長）	1999. 4. 1再任	委　員	下條　信行	法文学部教授 （埋蔵文化財調査室長）	
委　員	松原　弘宣	法文学部教授	1999. 4. 1再任	委　員	松原　弘宣	法文学部教授	
委　員	向井　康雄	教育学部長		委　員	金藤　泰伸	教育学部長	2000. 4. 1新任
委　員	川岡　　勉	教育学教授	1999. 4. 1再任	委　員	川岡　　勉	教育学教授	
委　員	小松　正幸	理学部長		委　員	真鍋　　敬	理学部長	2000. 4. 1新任
委　員	前田　信治	医学部長	1999. 3. 1新任	委　員	前田　信治	医学部長	
委　員	有井　清益	工学部長		委　員	清水　　顯	工学部長	2000. 4. 1新任
委　員	白石　雅也	農学部長	1999. 6. 1新任	委　員	白石　雅也	農学部長	
委　員	久保庭伊佐男	事務局長	1999. 4. 1新任	委　員	久保庭伊佐男	事務局長	
委　員	久保　芳廣	総務部長		委　員	久保　芳廣	総務部長	
委　員	野添　文男	経理部長	1999. 5. 1新任	委　員	野添　文男	経理部長	
委　員	鑄物　良雄	施設部長		委　員	土居　昌弘	施設部長	2000. 4. 1新任

きに善処することが求められた。

2000年度からは小松正幸副学長が埋蔵文化財調査委員会委員長にあたることとなった。その2000年度の埋蔵文化財調査委員会は、7月5日に開催され、1999年度事業報告と2000年度事業計画の説明が行われ了承された。

その他、下條埋蔵文化財調査室長から、出土品・発掘記録類の保管状況について説明があり、現在保管場所が満杯で資料の置き場所がないことが報告され、収納場所を確保してもらいたい旨の要望が出された。また、文化財保護法の精神や1997（平成9）年9月に松山市文化財専門委員会から提出された文京遺跡の保存の要望書には、発掘調査成果や出土品の公開・活用が求められており、埋蔵文化財調査室保管の資料を活用してメディアセンターで展示などを考えるべき旨の提案が出された。これに対して、小松委員長からは、すぐに解決できるものではないが、別途学長とも相談していきたいとされた。

（2） 発掘調査（図1～4、表4）

埋蔵文化財調査室が1999年度に実施した発掘調査の中で、本格全面調査は、

①総合情報処理センター新営工事に伴う文京遺跡18次調査
　調査期間：1998年12月10日～1999年8月2日
　調査面積：1,192㎡

②遺伝子実験施設新営工事に伴う樽味遺跡5次調査
　調査期間：1999年3月16日～7月21日
　調査面積：979㎡

③城北団地外灯改修工事に伴う文京遺跡19次調査
　調査期間：1999年9月7日～9月13日、12月1日～17日
　調査面積：94㎡

④サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー建物新営工事に伴う文京遺跡20次調査
　調査期間：2000年2月14日～6月20日
　調査面積：590㎡

で、①・②は前年度からの継続調査である。また、営繕工事等に伴う事前試掘・立会調査などの小規模調査は、計13件（城北団地7件、樽味団地6件、延調査面積：130㎡）である。

このように、多くの発掘調査が重なり、これまで行ってきた大学構内の遺跡範囲や内容の確認を目指した確認調査は、1999年度には実施できなかった。

2000年度には、

①サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー建物新営工事に伴う文京遺跡20次調査
　調査期間：2000年2月14日～6月20日
　調査面積：590㎡

②理学部構内における総合研究棟新営Ⅰ期工事に伴う文京遺跡21次調査
　調査期間：2001年1月15日～9月9日
　調査面積：1,644㎡

の2件の本格全面調査を実施している。①は1999年度からの継続調査で、②も調査面積が大きいことから2001年度までの継続調査となった。この他、営繕工事等に伴う事前試掘・立会調査の小規模調査としては、計6件（城北団地4件、山越団地1件、御幸団地1件、延調査面積：27㎡）を実施した。また、文京遺跡22次（調査期間：2001年1月23・24日、調査面積：33㎡）として確認調査を行った。

（3） 整理作業

埋蔵文化財調査室では、埋蔵文化財調査委員会でも報告された未刊の報告書問題を一歩でも解消するために、出土遺物・調査記録の整理作業の中で、出土遺物の洗浄・分類・選別・復元作業をパート職員を雇用して進めている。

1999年度には、工学部校舎新営Ⅲ期工事に伴う文京遺跡16次調査の出土遺物の分類・復元作業、水洗土壌からの微細遺物（炭化米・ガラス玉等）の選別作業を行った。

2000年度には、工学部校舎新営Ⅰ期工事に伴う文京遺跡12次調査と、地域共同研究センター新営工事に伴う文京遺跡13次調査の水洗土壌からの微細遺物の選別作業を進め、1997年度構内遺跡範囲確認調査である文京遺跡17次調査、総合情報処理センター新営工事に伴う文京遺跡18次調査、附属農業高等学校校舎新営工事に伴う樽味遺跡4次調査、工学部等総合研究実験棟新営電気設備工事に伴う文京遺跡19次調査の出土遺物の洗浄・注記・分類・復元作業を行った。

（4） 発掘調査報告書等の刊行

2000年度に、『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報―1995・1996年度―』を刊行している。

（田崎）

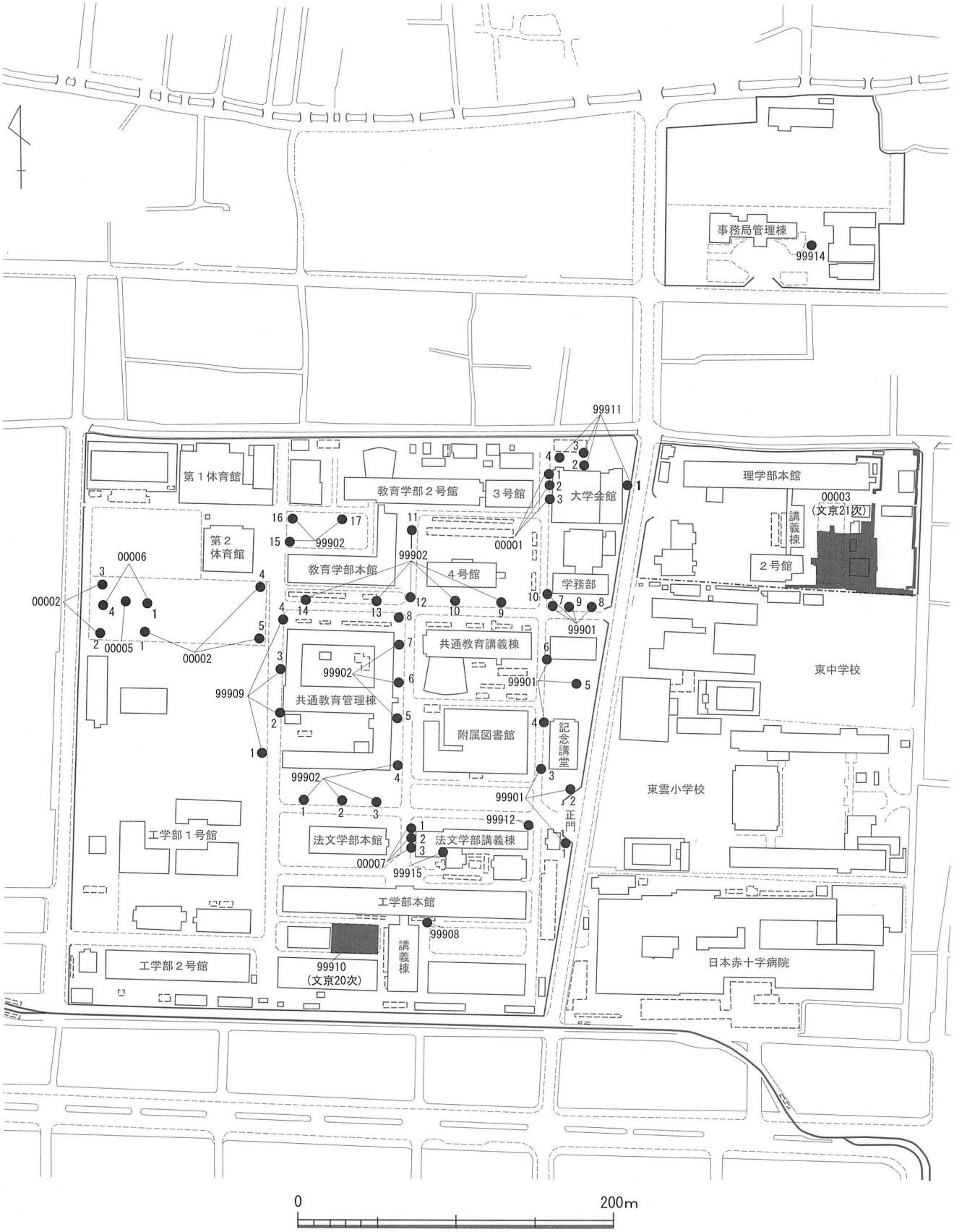


図１　1999・2000年度城北団地調査地点位置図（縮尺 1/3500）

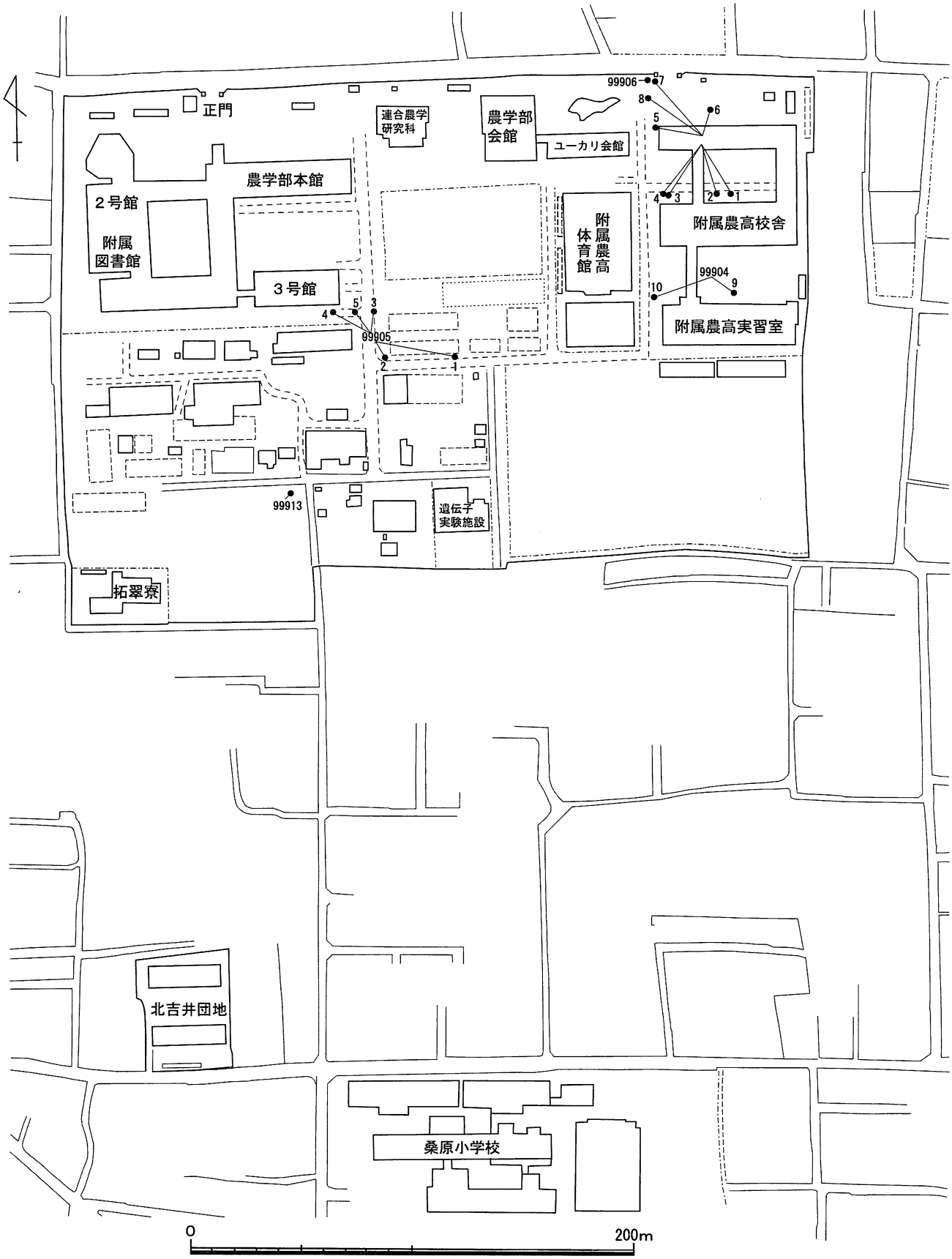


図2　1999・2000年度樽味団地調査地点位置図（縮尺 1/2500）

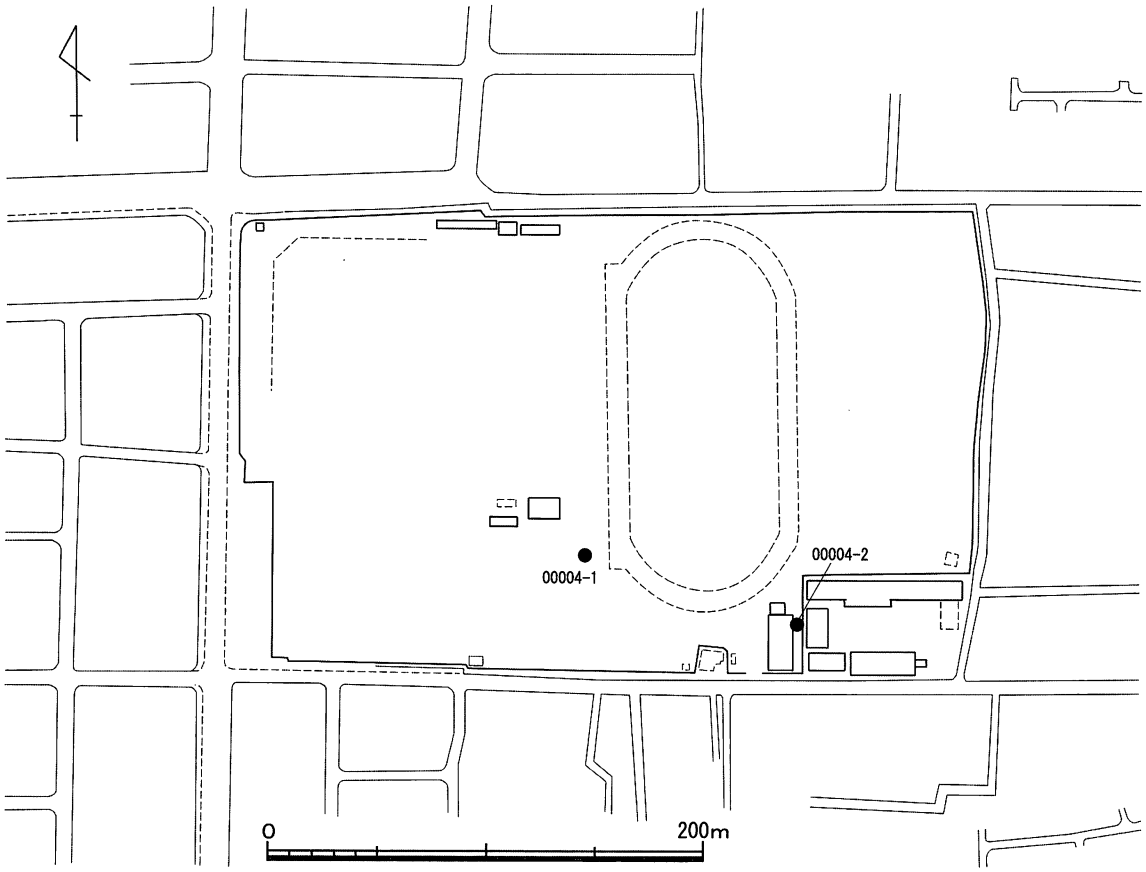


図3　1999・2000年度山越団地調査地点位置図（縮尺 1/3500）

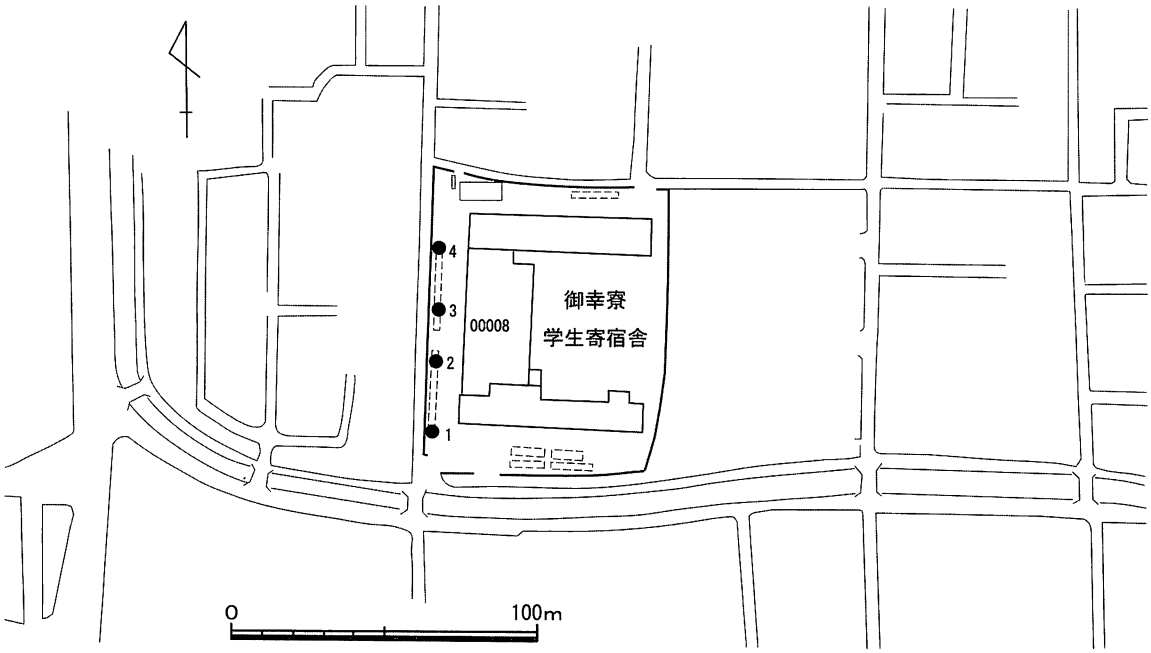


図4　1999・2000年度御幸団地調査地点位置図（縮尺 1/2500）

2　整理体制の強化

2000年11月５日に判明した旧石器捏造事件は、学会だけではなく、文化財行政の各方面に大きな衝撃を与えた。この事件に対応して、文化庁からは、愛媛県教育委員会を通じて、「埋蔵文化財の発掘調査に関する事務の改善について」（庁保記第236号、2000年11月17日）が通知された。その中では、調査の目的、調査主体や調査担当者の責任、検証の必要性などを含めて、適切な発掘調査を実施するとともに、速やかな正式調査報告書の刊行が求められている。

ところが、愛媛大学では、建物建設に伴う大規模調査が連年続き、1994年度以降に実施した調査報告書は未刊行の状態である。この問題については、すでに1999年度の埋蔵文化財調査委員会でも報告され、パート職員を雇用して出土遺物の洗浄・分類・選別・復元作業を可能な限り進め、小規模調査成果の報告書である『愛媛大学構内遺跡調査集報』（1997年度に第Ⅰ集を刊行）で、正式調査報告書刊行までの繋ぎとして全面調査の概要報告を行うこととしてきた。

しかし、調査報告書を刊行するための遺物実測や写真撮影・原稿執筆・割付作業は、調査員が連年続く発掘調査に対応せざるをえず、大幅に遅れている。これをどのように解決していくかについて、埋蔵文化財調査室は2001年１～２月中旬に施設部との協議を重ね、２月19日に埋蔵文化財調査委員会委員長の小松副学長に以下の提案を行った。

①これまで刊行した『集報』に替えて、『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報』を年度ごとに刊行し、大規模調査の概要報告と小規模調査の正式報告を行う。

②累積した実測・製図作業を進行させるため、パート職員を採用し、発掘調査担当の調査員とともに実測作業を進め、速やかな報告書刊行を目指す。

③調査順序にとらわれず、遺物量の少ない調査から実測作業を進め、正式報告書を順次刊行する。

以上の提案は了承され、その実施を進めることで、2002年度に附属農業高等学校校舎建設に伴う樽味遺跡４次調査、遺伝子実験施設新設に伴う樽味遺跡５次調査、2003年度に地域共同研究センター新設工事に伴う文京遺跡13次調査の正式報告書を刊行する見通しが得られることとなった。　（田崎）

3　出土品・調査記録類の活用状況

埋蔵文化財調査室では、発掘調査とともに、出土品や調査記録類の利活用を積極的に進めている。1999・2000年度の利活用状況は以下の通りである。

（１）　普及活動

普及活動としては、毎年４月に埋蔵文化財広報パンフレットの新入学生への配布、『愛媛大学報』への記事掲載、発掘調査に際しての現地説明会の開催などを行っている。

『愛媛大学報』では、2000年３～７月発行の№438・440～442に、文京遺跡20次調査の速報を「埋蔵文化財調査室だより」として掲載した。

1999年５月15日には、文京遺跡18次調査の現地説明会を開催し、150名もの見学者が訪れた。また、2000年６月10日には文京遺跡20次調査の現地説明会を実施した。当日はあいにくの雨天で、見学者は50名ほどと少なかったが、見学者からは文京遺跡に関して多くの質問・意見がよせられた（写真１左）。

さらに、2001年１月に着手した文京遺跡21次調査では、現地説明会に加えて、小学生対象の遺跡見学と体験発掘を実施した。さらに、参加した児童の感想文や、遺跡調査に対する質問への回答などをとりまとめて、『文京遺跡　体験発掘の思い出』の感想文集を作成し、児童と学内に配布した。こうした試みは、埋蔵文化財調査室では初めてで、いろいろ反省点もあるが、小学生児童に地域の文化や歴史に興味をもってもらうためにはよい機会であったと考える。

（２）　文京遺跡解説表示板の設置

1999年度の埋蔵文化財調査委員会で提案された新たな文京遺跡解説表示板については、法文学部・施設部などの関係部局と協議し、法文学部本館西側に遺跡解説表示板を設置することとなった。

文京遺跡に対しては、シンポジウム等、一連の広報

活動を通じて、周知度はかなり高まってきている。文京遺跡現地の見学希望などの声も多い。しかし、現状では、遺跡周知の役割を果たしているのは、工学部２号館北側に文京遺跡１次調査を記念して建てられた標柱と、法文学部本館建物北西側に設置された出土遺構に関する解説板にすぎない。

１次調査の標柱は記念碑的なものとしても、法文学部南側の解説板は、設置から15年以上を経過し、解説文の読み取りすら困難な状況にある。しかも、文京遺跡自体の調査が大幅に進み、解説板の内容自体が既に時代遅れとなってしまっている。たとえば、発掘当時は方形周溝墓と理解された周溝遺構は、埋葬主体がないことや、集落内での位置、そして他の遺跡での類例から、現在では墓とは考えられない。こうした解説内容では、学内外に誤解を生じさせることにもなりかねない。加えて、現在設置されている場所は、決して目立つ場所とは言えない。

そこで、今後のグリーンゾーン地区の整備も見据えて、法文学部本館西側に陶板焼き付けの遺跡解説表示板を設置し、文京遺跡の全体像および評価を解説・紹介することとした。2000年５月29日、この遺跡解説表示板は完成し、鮎川学長ほか多くの参加者を得て、除幕式が開かれた（写真１右）。

（３）　発掘調査記録・出土品の利活用

埋蔵文化財調査室に蓄積されてきた発掘記録・出土品の利活用は、これまで以上に幅広いものとなってきている。学内における授業での活用、学内外の学部生や大学院生の卒業論文や修士論文を作成するための資料調査だけではなく、大学主催のシンポジウム、学部開催の国際交流に際した遺物展示会、大学生協活動での利用が進められている。また、学外の考古学研究者や考古学愛好家の資料収集、カルチャースクールからの遺跡見学の要望などもある（表２）。とくに、1999年９月28日～11月12日には松山市考古館、2000年４月10日～６月19日には滋賀県立安土城考古博物館の特別展開催のため、文京遺跡で出土した弥生土器・石器・鉄器・分銅形土製品・中国鏡・ガラス滓や発掘時の写真などの貸出を行った。

このような資料調査・借用の依頼には、その都度、記録類収納棚から記録類を検索し、収納施設から出土品を搬出して対応している。しかし、今後、さらに資料調査依頼が増えると思われる。幅広い要望や依頼に十分対応するためには、記録類については整理がほぼでき、ある程度の検索が可能な状態にあるが、出土遺物については収納施設の確保が是非とも必要である。

（吉田・田崎）

写真１　文京遺跡20次調査現地説明会・文京遺跡解説表示板

表２　1999・2000年度資料利用一覧

	月　日	利　用　者	目　的	利用資料	内　容
1999年	4月27日	㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター職員（1名）	道後地区遺跡発掘調査のための関連資料調査		資料検索
	6月21日	奈良女子大学学生（1名）	個人研究の資料調査	文京遺跡出土の中世遺物	熟覧
	8月2日	大阪大学文学部大学院生(1名)	修士論文作成のための資料調査	文京遺跡出土の石器	熟覧
	9月13日	愛媛大学総務課研究協力係	ポスター作成	文京遺跡16次調査フイルム	借用
	8月28日	松山市考古館学芸員（1名）	特別展開催のための資料調査		資料検索
	10月21・22日	大阪大学文学部大学院生(1名)	個人研究の資料調査	文京遺跡出土の弥生土器	熟覧・写真撮影
	10月23日	香川県埋蔵文化財調査センター職員（3名）	個人研究の資料調査	文京遺跡出土の石器・弥生土器	熟覧
	10月23日	茨木市教育委員会職員（1名）	個人研究の資料調査	文京遺跡出土の石器・弥生土器	熟覧
	10月23日	寝屋川市教育委員会職員(1名)	個人研究の資料調査	文京遺跡出土の弥生土器	熟覧
	10月23日	堺市立博物館学芸員（1名）	個人研究の資料調査	文京遺跡出土の弥生土器	熟覧
	10月23日	八尾市遺跡調査会職員（1名）	個人研究の資料調査	文京遺跡出土の弥生土器	熟覧
	10月23日	大阪府教育委員会職員（1名）	個人研究の資料調査	文京遺跡出土の石器	熟覧
	10月23日	島根県教育委員会職員（1名）	個人研究の資料調査	文京遺跡出土の弥生土器	熟覧
	10月23日	京都大学文学部大学院生(1名)	修士論文作成のための資料調査	文京遺跡出土の弥生土器	熟覧
2000年	1月13日	滋賀県立安土城考古博物館学芸員（2名）	特別展開催のための資料調査		資料検索
	2月2日	滋賀県立安土城考古博物館	特別展図録作成	文京遺跡12～16次調査フイルム	借用
	2月5日	愛媛大学法文学部教官（1名）	研究会発表資料作成	文京遺跡12～16次調査フイルム	借用
	3月18日	奈良大学文化財学科教官・学生（19名）	研修会	文京遺跡出土の石器・弥生土器・鏡・石製指輪ほか	見学
	3月28日	大阪大学文学部大学院生(1名)	修士論文作成のための資料調査	文京遺跡出土の片刃石斧	実測・写真撮影
	3月30日	愛媛大学総合情報処理センター	資料作成	文京遺跡18次調査写真	借用
	6月13日	愛媛大学法文学部教官（1名）	出版物への掲載	文京遺跡調査写真フイルム	借用
	6月22日	愛媛大学教育学部学生（2名）	授業発表のための資料調査		資料検索
	6月22日	松山市在住個人（1名）	ホームページ作成	文京遺跡写真フイルム	借用
	7月6日	愛媛大学法文学部学生（1名）	卒業論文作成のための資料調査	文京遺跡出土弥生土器	実測
	7月14日	愛媛大学法文学部学生（1名）	卒業論文作成のための資料調査	文京遺跡出土石斧	実測・写真撮影
	8月7日	愛媛大学法文学部学生（1名）	卒業論文作成のための資料調査	文京遺跡出土石斧	実測・写真撮影
	8月18日	㈱ジャパン通信情報センター	出版物への掲載	文京遺跡17次調査現地説明会資料・写真	資料提供
	9月19日	愛媛大学生協学生委員会(2名)	出版物掲載のための資料調査		資料検索
	10月3日	愛媛大学法文学部学生（1名）	卒業論文作成のための資料調査	文京遺跡出土弥生土器	実測
	10月11日	愛媛大学法文学部学生（1名）	卒業論文作成のための資料調査	文京遺跡3次調査出土弥生土器	実測
	10月13日	明治大学工学部教官（1名）	研究のための資料調査	文京遺跡出土ヤリガンナ	熟覧・写真撮影
	10月20日	愛知県在住個人（1名）	個人研究のための資料調査		資料検索
	11月15日	愛媛大学法文学部学生（1名）	卒業論文作成のための資料調査	文京遺跡14・16次調査弥生土器	実測
	11月24日	愛媛大学法文学部学生（1名）	卒業論文作成のための資料調査	文京遺跡11次調査出土縄文土器	実測
	11月26日	愛媛大学法文学部教官（1名）	講演資料作成	文京遺跡写真フイルム	借用
	11月27日	愛媛大学法文学部大学院生(1名)	修士論文作成のための資料調査	文京遺跡14次調査出土鉄器	実測
	12月1日	愛媛大学法文学部学生（1名）	卒業論文作成のための資料調査	文京遺跡出土石鏃	実測
	12月13日	愛媛大学法文学部学生（1名）	卒業論文作成のための資料調査	文京遺跡出土石器	実測・写真撮影
	12月14～22日	愛媛大学法文学部教官（1名）	法文学部での遺物展示のため	文京遺跡出土の弥生土器・石器・鉄器	借用
2001年	1月9日	愛媛大学法文学部学生（1名）	卒業論文作成のための資料調査	文京遺跡出土鉄鏃	実測・借用
	1月24日	㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター職員（1名）	道後地区遺跡発掘調査のための関連資料調査	文京遺跡10次調査出土弥生土偶	熟覧
	2月1日	愛媛大学法文学部学生（1名）	学期末レポート作成の資料調査	文京遺跡出土中世土器	実測
	2月2～6日	愛媛大学法文学部教官（1名）	法文学部での遺物展示のため	文京遺跡出土の弥生土器・石器等	借用
	3月30日	大阪大学文学部大学院生(1名)	個人研究のための資料調査	文京遺跡出土の弥生土器	熟覧・写真撮影

Ⅱ　1999年度の調査

99901　工学部等総合研究実験棟新営電気設備工事に伴う調査（１期）（文京遺跡19次調査Ⅰ区）

調査地点　松山市文京町３番
　　城北団地（図１）
調査面積　31㎡
調査期間　1999年９月７日～９月13日
調査の種別　全面調査
調査担当　吉田広
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　施設部長発事務連絡
　　（平成11年８月５日付）

1　調査にいたる経緯

工学部等総合研究実験棟新営に伴って、電気設備工事が行われることになった。具体的には、老朽化した城北キャンパス内の電灯設備の更新である。既往の調査成果から、基礎が深く設置される電灯部分と、一部地表下浅くで遺跡に達する管路部分について、事前に調査を実施することとした。なお、工程の都合上、工期を２期に分かち、これに対応して埋蔵文化財調査も２期に分けて行い、１期工事に伴う調査分をⅠ区、２期分をⅡ区とした。ここでは、Ⅰ区について調査概要を報告する。また、調査時には、Ⅰ区の調査を19A次としていたが、今回の報告以降、19次調査Ⅰ区する。

2　調査の概要

１期工事においては、当初８基の電灯基礎部分を調査対象としていた。しかし、これらの調査結果から、一部管路についても、埋蔵文化財に影響があると判断されたので、急遽これらを調査対象に加えることとした。都合10ヶ所の調査を行い、南側からトレンチ番号を付した。

（1）　層位と遺構

［1トレンチ］（図５、写真２）

城北キャンパス正門南側の電灯設置のため、東側囲障と守衛室の間に設定されたトレンチである。地表下35cmで近世･近代の耕作土であるⅡ層があらわれ、70cmまで続く。その下に厚さ15cmほどの黒褐色粘質土が堆積する。遺物包含層のⅢ層であるが、この地点では、粘性がやや強く、色調も濃い。遺物はほとんど含まない。以下は、にぶい黄褐色粘質土のⅣ層となる。

［2トレンチ］（図５、写真３）

正門北側の電灯設置のため、自動二輪車駐車場の囲障内壁に沿って設定されたトレンチである。アスファルト舗装された地表から30cmほどが表土で、以下、小石を多く含む灰黄褐色砂質土（①層）と、灰黄褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土とが混じりあう土層（②層）が地表下80cmまで続く。この堆積物は、15次調査１トレンチで確認したSR-01の埋土と共通する。自然流路が今次調査の２トレンチ付近までのびていることになる。なお、下層は、Ⅲ層の２次的堆積とみられる暗褐色ないし黒褐色の粘質土（③～⑤層）を挟んで、地表下約100cm以下はきめ細かな灰黄褐色砂層（⑥層）となる。

［3トレンチ］（図５、写真４）

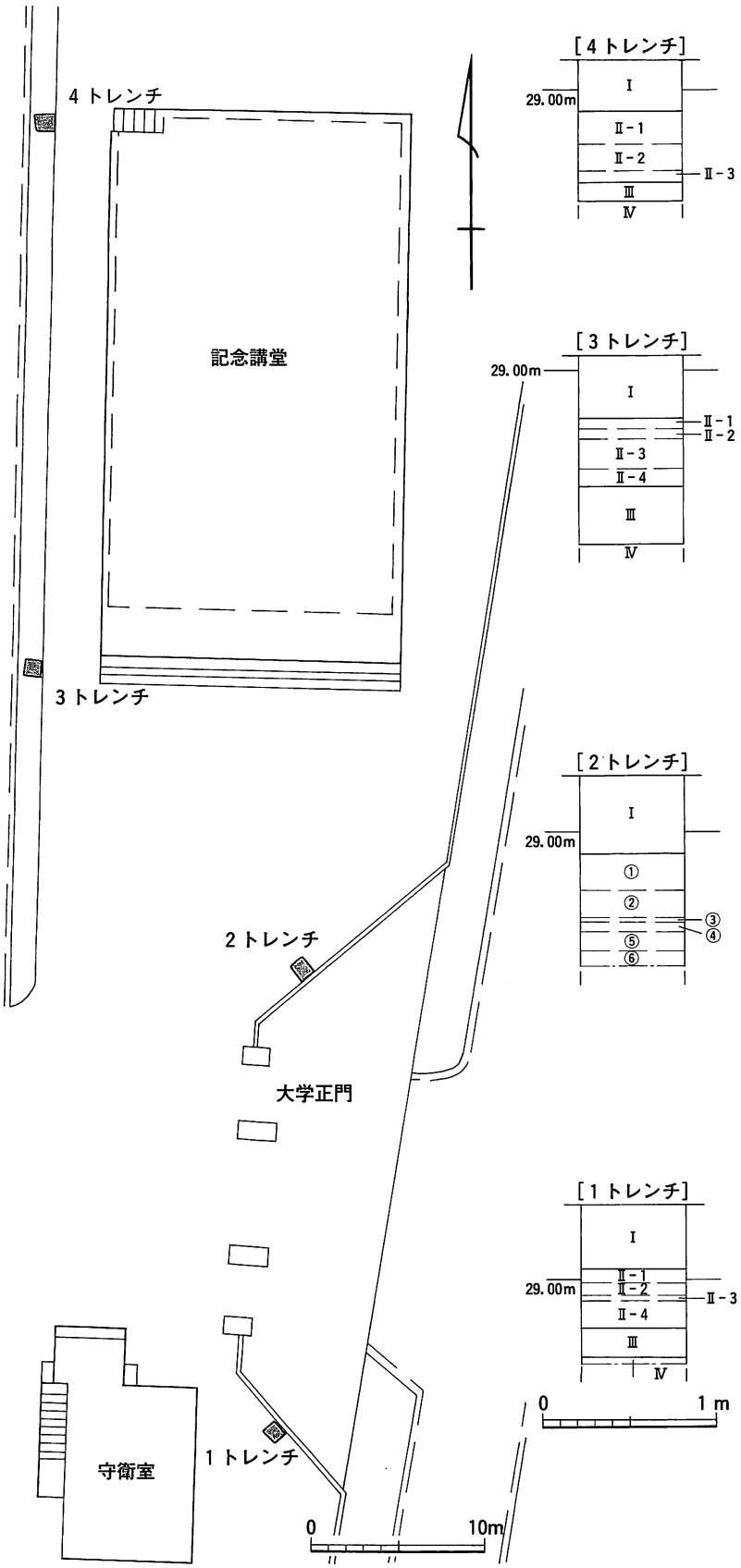
記念講堂南西角付近に設定したトレンチである。地表下35cmほどでⅡ層となり、厚さ40cmほど堆積する。以下、Ⅲ層が30cmほど堆積して、地表下110cmでⅣ層となる。Ⅲ層は、小石を含まず粘性は強いが、パサパサ感がある。遺物はほとんど出土していない。

［4トレンチ］（図５、写真５）

記念講堂北西角付近のトレンチである。地表下30cmでⅡ層があらわれ、70cmでⅢ層となる。Ⅲ層は薄い黒褐色粘質土で、遺物はそれほど多く出土していない。地表下約80cm以下はⅣ層となる。

［5トレンチ］（図６、写真６）

記念講堂北・課外活動第２共用施設南の、自動二輪車駐車場やや北東よりで、既往の電灯を撤去した地点のトレンチである。地表下58cmでⅡ層があらわれ、115cmまで続く。以下は、径１～５cmの角のとれた礫をごく少量含む灰黄褐色砂層（①層）が掘削深度の140cmまで続く。この堆積物は、15次調査の２トレンチのSR



Ⅰ：表土
Ⅱ-1：灰黄褐色（10YR5/2）砂質土。径1～5㎜の砂礫が多く混じる。
Ⅱ-2：灰黄褐色（10YR4/2）砂質土。
Ⅱ-3：にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土。Ⅱ-2層よりやや黄色みを帯びるⅡ-2層の床土層。
Ⅲ：黒褐色（10YR3/2）粘質土。

Ⅰ：表土
Ⅱ-1：灰黄褐色（10YR4/2）砂質土。灰色みが強い。
Ⅱ-2：にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土。上下層が混じりあう。
Ⅱ-3：にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土。径2～5㎜の砂礫が多く混じる。茶色みが強い。
Ⅱ-4：にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土。径3～5㎜の砂礫が多く混じる。上下層が混じり合い、粘性がややある。
Ⅲ：黒褐色(10YR3/2)粘質土。粘性は強いが、シルト質で、砂粒は含まない。パサパサ感がある。

Ⅰ：表土
自然流路埋土
①：灰黄褐色（10YR4/2）砂質土。径5㎜の角ばった礫が多く混じる。土器片出土。
②：灰黄褐色（10YR4/2）砂質土とにぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土が混じりあう。径2～4㎜の砂礫が多く混じる。
③：暗褐色（10YR3/3）粘質土。径1～2㎜の砂礫が多く混じる。
④：黒褐色（10YR3/2）粘質土。径1～3㎜の砂礫が多く混じる。
⑤：黒褐色(10YR3/2)粘質土。きめ細かく、砂粒をあまり含まない。
⑥：灰黄褐色（10YR4/2）砂層。きめ細かい砂層。

Ⅰ：表土
Ⅱ-1：灰黄褐色（10YR4/2）砂質土。3～5㎜大の砂粒を多く含む。パサパサ感がある。
Ⅱ-2：暗褐色（7.5YR3/4）砂質土。砂っぽく、鉄・マンガンが沈着。
Ⅱ-3：にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土。やや粘性がある。
Ⅱ-4：暗褐色（10YR3/3）粘質土。1～3㎜大の砂粒を少量含む。粘性がやや強い。
Ⅲ：黒褐色（10YR3/2）粘質土。砂粒をほとんど含まず、粘性が強い。
Ⅳ：にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土。砂粒を含まず、シルト質が強く、粘性ややあり。

図5　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）1～4トレンチ位置図、土層柱状図（縮尺 1/400、1/40）

写真２　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）１トレンチ（南から）

写真３　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）２トレンチ（西から）

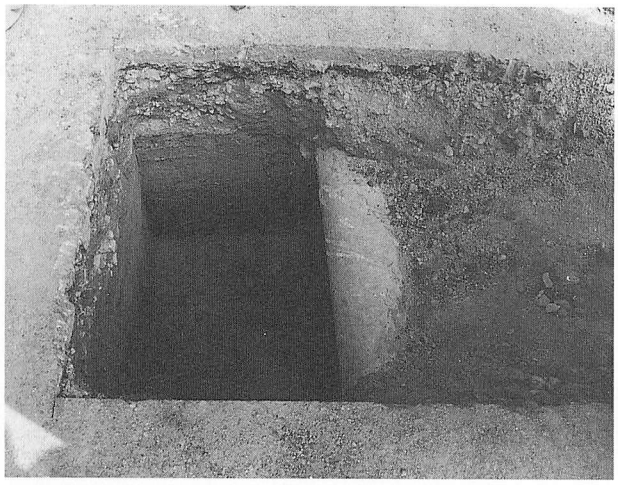


写真４　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）３トレンチ（南から）

写真５　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）４トレンチ（南から）

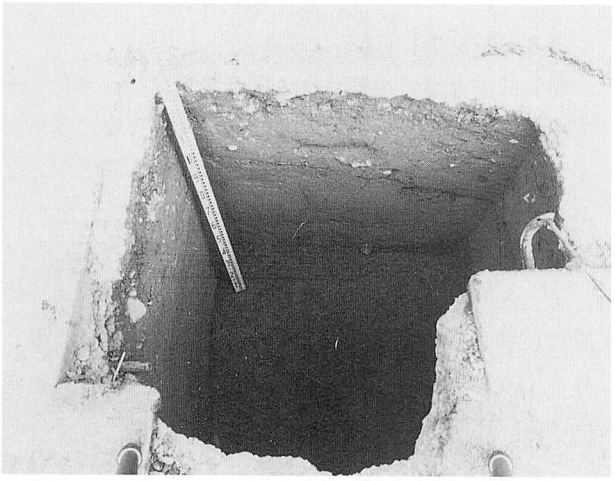


写真６　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）５トレンチ（西から）

写真７　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）６トレンチ（南から）

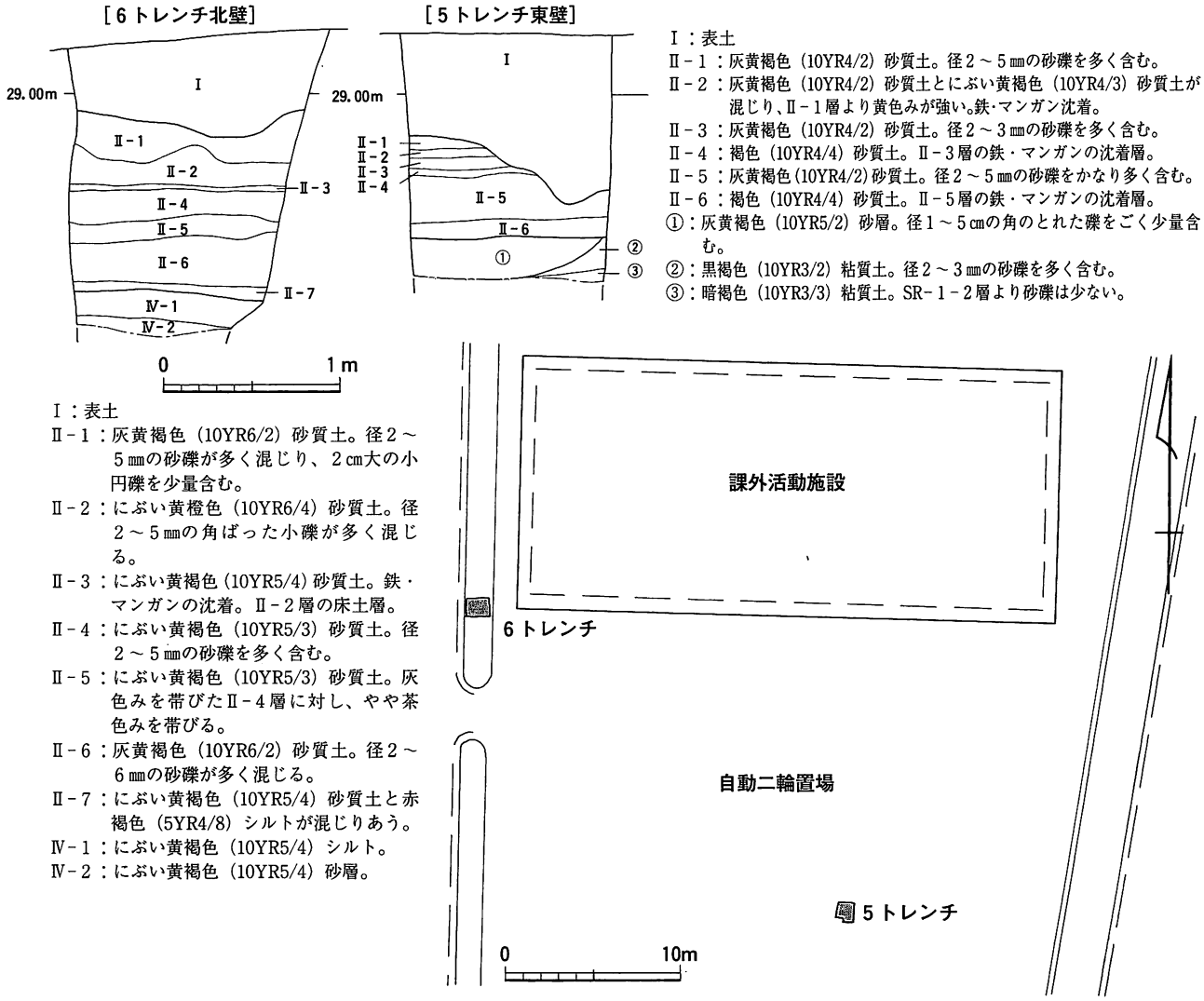


図6　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）5・6トレンチ位置図、土層断面図（縮尺 1/400、1/40）

-07にあたる。なお、①層の一部下層には、黒褐色～暗褐色粘質土の堆積が部分的に認められる（②・③層）。いずれも北に向かって落ち込んでおり、流路南岸近くの溜まりの堆積であると考えられる。

［6トレンチ］（図6、写真7）

課外活動第2共用施設南西角付近に設定されたトレンチである。地表下約40cm以下、140cmまでⅡ層で、下半は小石を多く含みしまりが非常に強い。以下、Ⅳ層となる。Ⅱ層は数枚の水田層の堆積からなるが、それぞれの時期に関しては不明である。

［7トレンチ］（図7、写真8）

学生部前の交差点北東角に設置される電灯基礎に伴うトレンチである。トレンチの大半は、既設管路などによって掘削深度まで攪乱がおよんでいたが、南端部分では、道路舗装面から45cmの深さでⅢ層を確認できた。Ⅲ層は黒褐色砂質土で、径2～3㎝の礫を少量含む。以下80cmの深さまで続く。下層はやや多く砂礫が混じる褐色砂質シルトのⅣ層が掘削深度の120cmまで続く。なお、このトレンチの攪乱土層から、弥生時代後期中葉の複合口縁壺の破片が出土している（図9-7）。

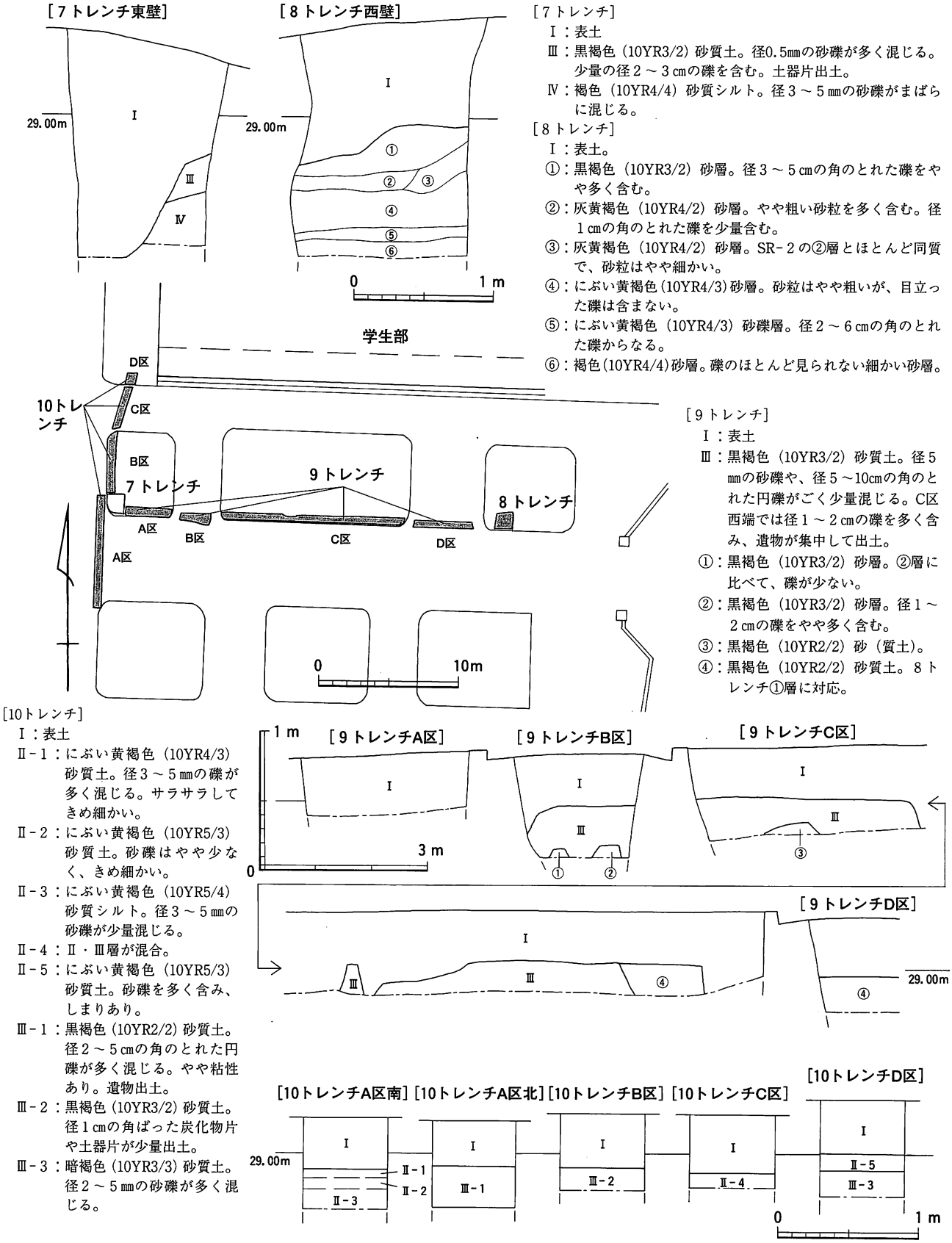
［8トレンチ］（図7、写真9）

学生部前東側に設置される電灯基礎に伴うトレンチである。7トレンチの状況とは異なり、Ⅲ層はみられず、道路舗装面から35cm以下は、砂層・砂礫層からなる流路内堆積があらわれた（①～⑥層）。

［9トレンチ］（図7、写真10・11）

7・8トレンチの状況から、周辺では比較的浅い位置で遺物包含層であるⅢ層に達する可能性が考えられ、一方で7・8トレンチでみられた状況との違いから、その範囲を想定しかねた。

そこで、電線埋設による埋蔵文化財への影響がわずかながらでも想定される区間についても、調査を実施することとした。9トレンチは7－8トレンチ間の管



[7トレンチ]
Ⅰ：表土
Ⅲ：黒褐色（10YR3/2）砂質土。径0.5㎜の砂礫が多く混じる。少量の径２～３㎝の礫を含む。土器片出土。
Ⅳ：褐色（10YR4/4）砂質シルト。径３～５㎜の砂礫がまばらに混じる。

[8トレンチ]
Ⅰ：表土。
①：黒褐色（10YR3/2）砂層。径３～５㎝の角のとれた礫をやや多く含む。
②：灰黄褐色（10YR4/2）砂層。やや粗い砂粒を多く含む。径１㎝の角のとれた礫を少量含む。
③：灰黄褐色（10YR4/2）砂層。SR-２の②層とほとんど同質で、砂粒はやや細かい。
④：にぶい黄褐色(10YR4/3)砂層。砂粒はやや粗いが、目立った礫は含まない。
⑤：にぶい黄褐色（10YR4/3）砂礫層。径２～６㎝の角のとれた礫からなる。
⑥：褐色(10YR4/4)砂層。礫のほとんど見られない細かい砂層。

[9トレンチ]
Ⅰ：表土
Ⅲ：黒褐色（10YR3/2）砂質土。径５㎜の砂礫や、径５～10㎝の角のとれた円礫がごく少量混じる。C区西端では径１～２㎝の礫を多く含み、遺物が集中して出土。
①：黒褐色（10YR3/2）砂層。②層に比べて、礫が少ない。
②：黒褐色（10YR3/2）砂層。径１～２㎝の礫をやや多く含む。
③：黒褐色（10YR2/2）砂（質土）。
④：黒褐色（10YR2/2）砂質土。８トレンチ①層に対応。

[10トレンチ]
Ⅰ：表土
Ⅱ-１：にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土。径３～５㎜の礫が多く混じる。サラサラしてきめ細かい。
Ⅱ-２：にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土。砂礫はやや少なく、きめ細かい。
Ⅱ-３：にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルト。径３～５㎜の砂礫が少量混じる。
Ⅱ-４：Ⅱ・Ⅲ層が混合。
Ⅱ-５：にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土。砂礫を多く含み、しまりあり。
Ⅲ-１：黒褐色（10YR2/2）砂質土。径２～５㎝の角のとれた円礫が多く混じる。やや粘性あり。遺物出土。
Ⅲ-２：黒褐色（10YR3/2）砂質土。径１㎝の角ばった炭化物片や土器片が少量出土。
Ⅲ-３：暗褐色（10YR3/3）砂質土。径２～５㎜の砂礫が多く混じる。

図７　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）７～10トレンチ位置図、土層断面・柱状図
（縮尺　1/400、1/100、1/40）

写真８　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）
７トレンチ（西から）

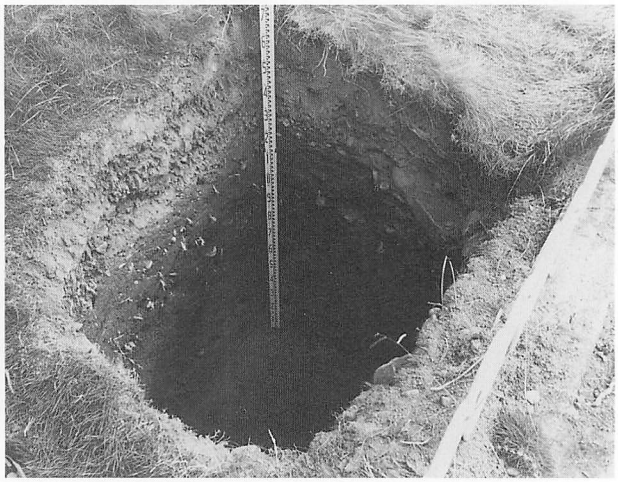


写真９　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）
８トレンチ（南西から）

写真10　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）
９トレンチA区（西から）

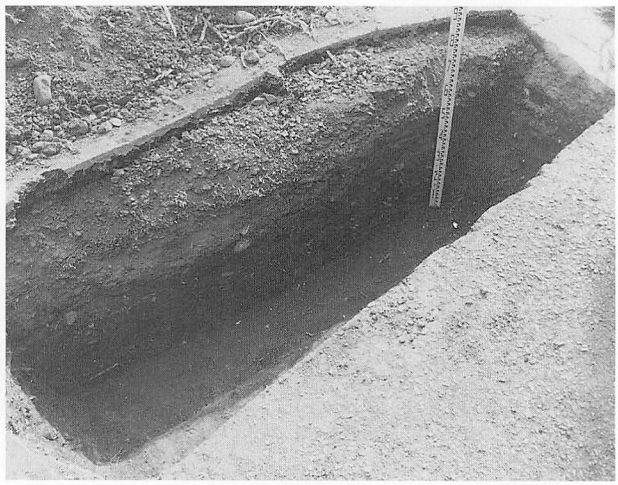


写真11　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）
９トレンチB区（北東から）

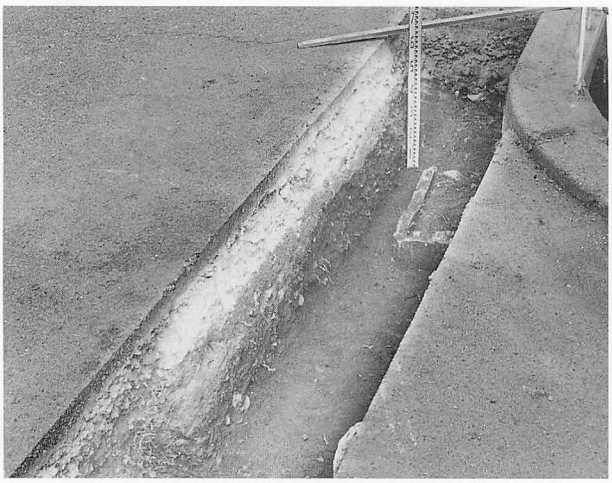


写真12　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）
10トレンチA区北半部（南から）

写真13　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）
10トレンチD区（南西から）

路掘削部分で、縁石を残したままの工事のため、４区画に分断され、西から東へとA～D区とした。

まず、A区では、地表下50cmの掘削深度内では、Ⅲ層に達していない。

道路舗装部分のB区では、計画された掘削深度も深く、舗装面から約45cmでⅢ層に達し、地表下80cmまで続く。この下層は、黒褐色砂層である。図８－２はB区Ⅲ層出土である。

C区でも、やはり同様の深さで遺物包含層であるⅢ層があらわれた。若干B区よりも厚さを減じるが、30cm以上の堆積をもち、C区西半においては、小石・礫に混じって多くの土器片が集中して出土した。図８－１・５・８～11・13・14、図９－１～６・８・９がC区Ⅲ層出土である。

このようなⅢ層の堆積は、７トレンチから東に約18mほどにおよび、そこから東側は、８トレンチで検出した流路内堆積層へと転換していく（C区東端・D区）。なお、その土層の変化は必ずしも明瞭ではない。むしろ包含層としたⅢ層自体が、包含層形成後の水流によって若干の移動を伴っている可能性が高い。

［10トレンチ］（図７、写真12・13）

７－８トレンチ間の東西方向の９トレンチに対し、７トレンチを南北に貫く管路部分を10トレンチとした。９トレンチ同様、縁石を残したままの工事のため、南からA～D区の４区画に分けて調査を行った。

まず、７トレンチ以南のA区においても、道路舗装面下30cmでⅢ層があらわれ、掘削深度の60cmまで続く。しかし、Ⅲ層が広がる範囲は、東西道路の北側１m幅のみで、道路中央部は既設管路によって攪乱されていた。攪乱部の幅は３mで、それ以南においては、掘削深度内でⅢ層はみられない。

B区では、地表下40cmでⅢ層があらわれ、比較的多くの遺物が出土した。ただし、工事に伴う掘削深度である地表下55cmまでの掘り下げにとどめている。図８－３・６が攪乱土層、図８－４・７・12、図９－10がⅢ層から出土した。

C区では、地表下40cmでⅡ層とⅢ層の混合層があらわれるが、純粋なⅢ層は掘削深度内では検出されていない。攪乱土層から結晶片岩製石器２点（図10－１・２）が出土している。

学生部建物西側のD区では、Ⅱ層を挟んで、Ⅲ層の検出面が地表下50cmと深くなる。したがって、これより以北については、管路掘削にあたって包含層に影響のないことを確認した。

（２）　出土遺物（図８～10）

１～６・８トレンチでは図化できるような遺物はみられず、７・９・10トレンチにおいて比較的大形の土器片が出土した。その中でも、９トレンチC区西半のⅢ層では、まとまった出土状況をみせる。

図示した遺物は、図８－14を除いていずれも弥生土器である。壺は図９－１～10と図８－１。広口壺（図９－１）と複合口縁壺（図９－２～７）が出土している。複合口縁壺は、一次口縁部径が20cm前後のもの（図９－２～６）と、30cmをこえる大型品（図９－７）がみられる。図９－８～10は底部片。図８－１は口縁部片で、頸部が直立し、口縁が短く外反する後期初頭の壺である。混入品と判断した。

甕は図８－２～８。図８－２・３は口縁部片である。図８－２は口縁端部に刻目を施す前期の甕で、混入品である。図８－３は口縁屈曲部から強く外傾する。図８－４・５は口縁屈曲部から胴部上半部の破片である。図８－４の胴部外面にはタタキが施される。図８－６～８は底部片で図８－６・７は平底、図８－８は丸みをもった平底を呈する。図８－７は外面にタタキを施す。

図８－９は鉢。わずかに上げ底の底部片で、胴部が強く開く形状から、鉢の底部と判断した。図８－10は高坏脚上部片であり、裾部へ向かい緩やかに開く。図８－11～13は支脚。低く中実の図８－11と、中空円筒形の図８－12・13の２種がみられる。13は端部を下方につまみ出す。

図８－14は近世の施釉陶器である。蓋破片であり、外面には緑釉が施される。

以上の出土遺物は、若干の混入品が含まれるものの、弥生時代後期を中心としている。図８－７のタタキを施す底部や図８－８の丸みのある平底の甕底部から判断して、弥生時代後期、後葉～終末、梅木謙一編年の弥生後期Ⅴ－３～４期に位置付けられる。

３　調査のまとめと問題点

今回の調査は、狭い範囲のトレンチながら、15次調査１～３トレンチで把握していた城北団地東縁部の状況について、さらに詳細を明らかにできた。とりわけ、中世においては水田に利用されている18次調査区から17次調査４トレンチで検出された東西方向の谷状の窪地について、団地東端部での広がりを確認できた。す

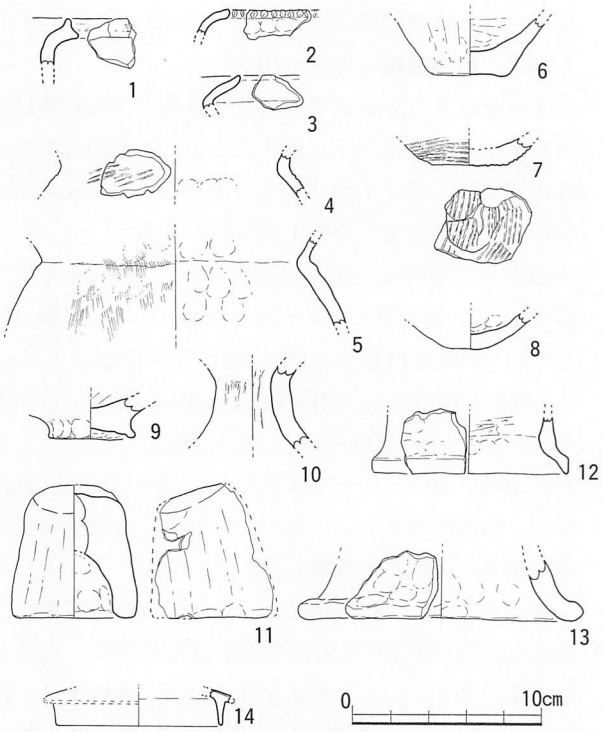


図８　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）出土遺物
実測図１（縮尺　１/４）

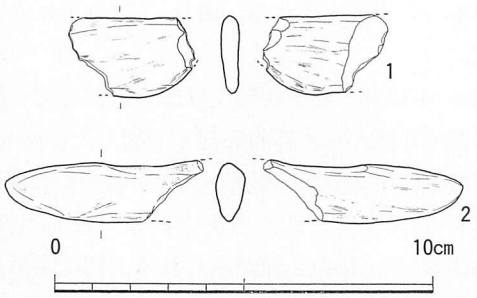


図10　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）出土遺物
実測図３（縮尺　１/２）

なわち、東西に並ぶ７-９-８トレンチがほぼこの流路の北岸に相当し、一部周辺の包含層（Ⅲ層）も、その影響を被っているようである。しかし、流路北側の微高地上には、弥生時代後期中葉の居住域の広がりを出土遺物から想定される。15次調査３トレンチのSC-03・04などは、その候補であろう。そして、この自然流路の南岸は、今回の６トレンチ付近までおよび、６トレンチのⅡ層の内一部は、中世段階まで溯る水田層である可能性が高い。５トレンチで検出された流路内堆積も、この低地部南縁に平行して走る流路群の可能性が高い。したがって、学生部事務局・課外活動第２共用施設周辺では、南北幅50mほどの谷状にのびる低地部を復元できる。

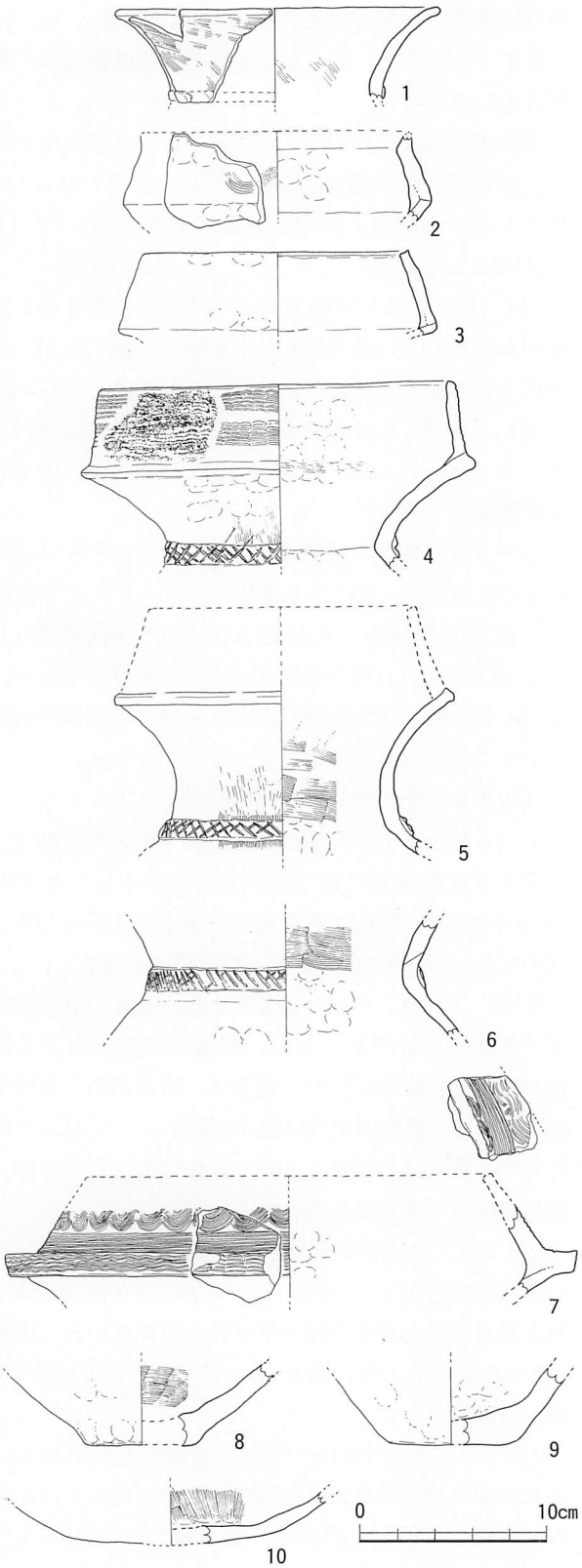


図９　99901調査（文京遺跡19次Ⅰ区）出土遺物
実測図２（縮尺　１/４）

さて、今回の調査にあたって、当初埋蔵文化財調査室に提示された設置計画図と、工事発注後に作成された施工図との間に相違が生じていた。そのため、調査当初、少なからぬ行き違いが生じ、調査の進行上に支障をきたす結果を招いた。工事の過程で、現状に即した施工の変更はやむを得ないが、変更が生じた際の施設部と埋蔵文化財調査室の速やかな連絡体制の強化が必要である。　（吉田・山村）

99902　工学部等総合研究実験棟新営電気設備工事に伴う調査（２期）（文京遺跡19次調査Ⅱ区）

調査地点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地（図１）
調査面積　43m²
調査期間　平成11年12月１日～12月17日
調査の種別　全面調査
調査担当　田崎博之・三吉秀充
依頼文書　施設課長発事務連絡
　　（平成11年８月５日付）

１　調査にいたる経緯

工学部等総合研究実験棟新営に伴う電気設備工事による２期目の発掘調査である。調査時には、19B次としていたが、今回の報告から19次調査Ⅱ区とする。

外灯基礎部分17ヶ所、電線管路埋設部分１ヶ所で発掘調査を行った。調査地点には、団地南側から１～17のトレンチ名を、法文学部本館北の電線管路埋設部分は１－２－３間トレンチの名称を与えている。

２　調査の記録

［１トレンチ］（図11・12、写真16）

法文学部本館北側に位置する外灯基礎部分である。地表下55cmまでⅠ層が続いた後、Ⅲ層があらわれた。Ⅲ層上面では、SC－１と柱穴のSP－２が確認できた。

SC－１は、北東－南西にほぼ直線的にのびる落ち込みラインをもち、竪穴式住居跡と考えた。埋土は、暗褐色砂質シルトで、丸い明黄褐色砂質土塊が少量混じる。砂礫をほとんど含まない。SP－２はSC－１に切られる小穴である。埋土は、暗褐色砂質土で、丸い明黄褐色砂質土塊を少量含み、径１～２㎜の砂粒が混じる。Ⅲ層下のⅣ層は、Ⅳ－１～Ⅳ－４層に分層できる。Ⅳ－１層は、暗褐色砂質シルトで、砂礫がごく少量混じる。Ⅳ－２層は、明黄褐色砂質土。Ⅳ－３層は、灰白色砂礫層で、主に径２～３㎜前後の礫からなる。Ⅳ－４層は、灰白色砂礫層で、径１～２㎜の砂粒が主体である。地表下1.3mで親指先大～拳大の円礫からなるⅤ層を確認した。

出土遺物には、当初Ⅲ層として掘り下げたSC－１上面にあたる部分から、上げ底の甕底部片が出土。SC－１埋土中からは、脚台状に厚い底をもつミニチュアの鉢が出土している（図12－１～３）。いずれも弥生中期中葉～後期初頭に位置付けられる土器である。これらの遺物から、SC－１およびSP－２は当該期に位置付けられる。

［２トレンチ］（図11、写真17）

法文学部本館北側、１トレンチの東に位置する外灯基礎部分である。地表下約70cmでⅣ層があらわれ、Ⅱ層・Ⅲ層はみられない。南側に設定された１－２－３間トレンチでは、地表下約40cmでⅢ層が確認されていることから、建物建設などで削平されていると考えられる。Ⅳ層は、径１～２㎜の砂粒が多く混じる灰白色砂質土で、小指先大～親指先大の円礫を含む。遺物は出土していない。

［３トレンチ］（図11、写真18）

法文学部本館北側、２トレンチ東の外灯基礎部分である。地表下80cmでⅣ層があらわれた。Ⅱ層・Ⅲ層はみられない。２トレンチ同様、攪乱により削平されたものと考えられる。Ⅳ層は、Ⅳ－１～Ⅳ－３層に分層できる。Ⅳ－１層は、明黄褐色砂質土で、径１㎜前後の砂粒が混じる。Ⅳ－２層は、灰白色砂質土で、きめが細かく、砂礫は含まない。Ⅳ－３層は、径２～３㎜の砂礫が多く混じる褐灰色砂質土である。出土遺物はない。

［１－２－３間トレンチ］（図13、写真14・15）

法文学部本館北側、１・２・３トレンチの南側に設置される電線管路部分である。東西約56m、幅90cmを測る。既存の管路により調査区の半分近くが攪乱を受けていたが、トレンチ南半部で、地表下約40cmでⅢ層があらわれた。

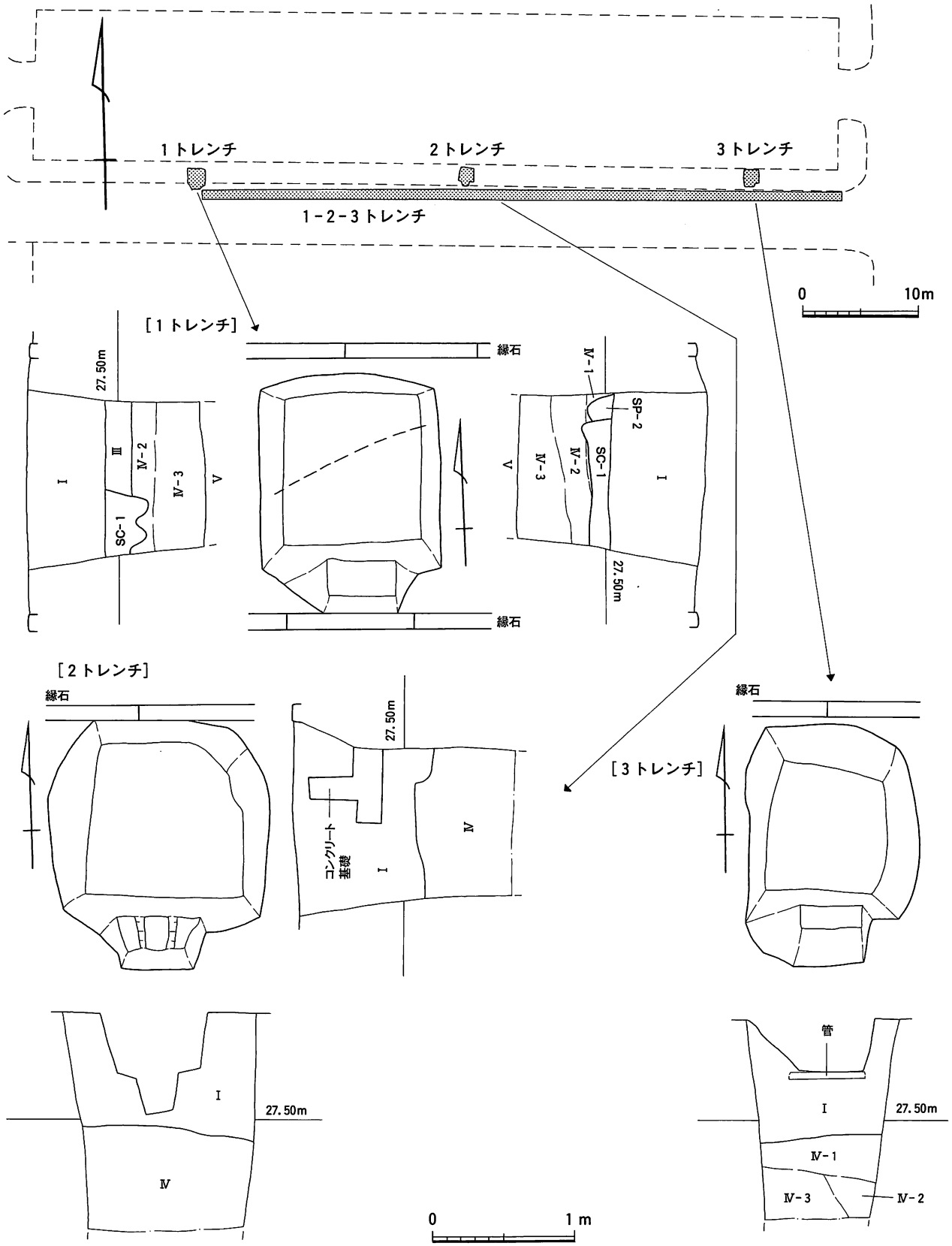


図11　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）１～３トレンチ位置図、土層断面図（縮尺 1/500、1/40）

写真14　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
1－2－3間トレンチ全景（西から）

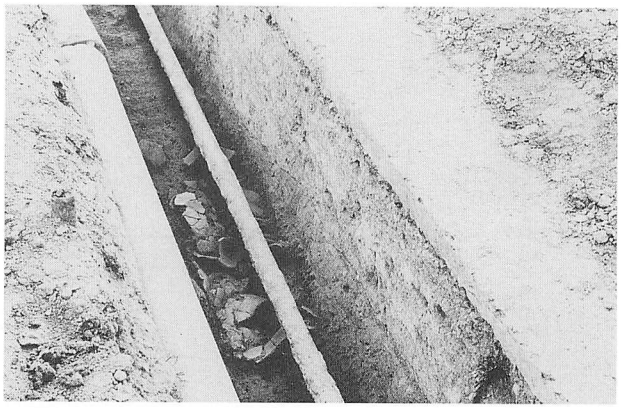


写真15　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）1－2－3間
トレンチ遺物出土状況（北西から）

写真16　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
1トレンチ南壁土層断面

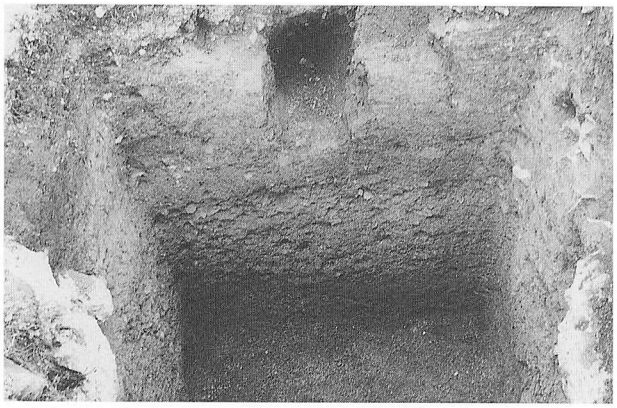


写真17　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
2トレンチ南壁土層断面

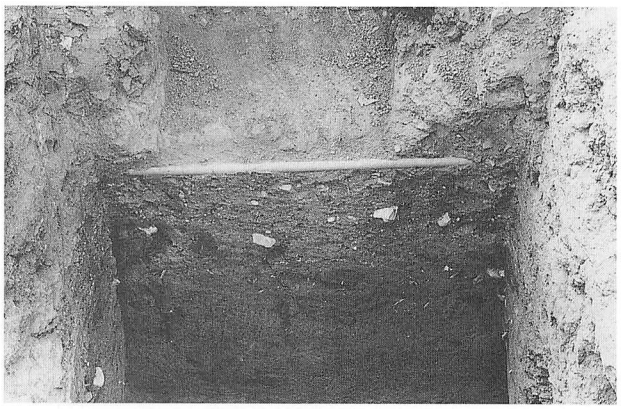


写真18　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
3トレンチ南壁土層断面

今回の調査では、電気設備工事に伴う深度までで調査を終えたが、可能な限り遺構検出に努めた。その結果、竪穴式住居7棟（SC－1・4・10・12・13・14・21）、土壙9基（SK－2・5～9・15・18・20）、溝3条（SD-16・17・19）、柱穴（SP－3）1基を確認した。

細長く狭い調査区ではあるが、竪穴式住居跡には、平面形が円形のSC－1・10・12と、方形のSC－4がある。竪穴式住居跡の中には、SC－4とSC-10のように切り合い関係もみられる。

Ⅲ層は茶色みを帯びた明るい暗褐色砂質シルトであるのに対して、遺構埋土はいずれも暗褐色砂質シルトである。SC-13埋土は黒褐色で、西に広がる暗灰色砂

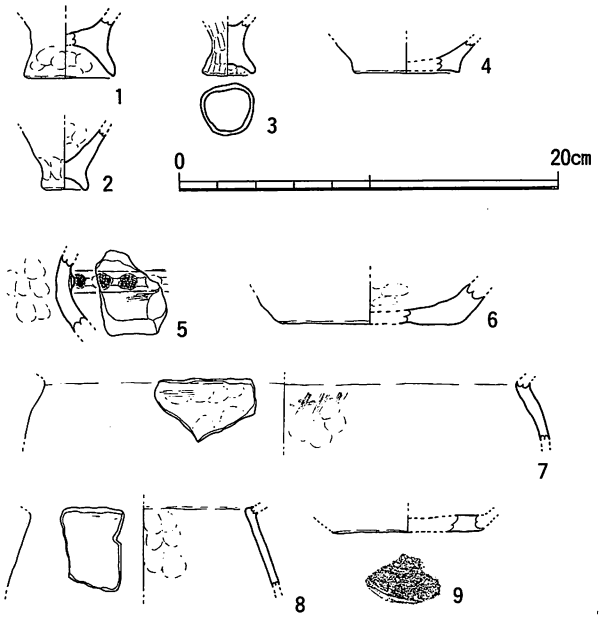


図12　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
出土遺物実測図１（縮尺　1/4）

礫層と明確な差が見られる。SC-14埋土には、明黄褐色のブロックが少量混じり、西側の遺構に比べて砂礫の割合は少ない。

調査区東側では、北西から南東方向にのびる溝（SD-16）と、南北方向に走る溝２条（SD-17・SD-19）を検出した。SD-16の溝幅は約40cm、SD-17では65cm、SD-19では20cmを測る。他の遺構と同質である。SD-17は、遺構検出時の平面プランから溝と考えたが、長方形土壙の可能性も残る。

また、調査区中央やや東よりにおいて、土器が折り重なって出土している（図13、写真15）。遺構として把握することはできなかったが、遺物の出土状況から何らかの遺構内に土器が廃棄されていることは明らかである。

１-２-３間トレンチでは、比較的まとまって遺物が出土している（図12-４～９、図14）。

図12-４は、Ⅲ層上部から出土した壺もしくは鉢の底部片である。図12-５～９は、Ⅱ～Ⅲ層出土遺物である。５は壺頸部片、６は壺底部片、７・８は甕の口縁屈曲部～胴部上半の破片である。７は屈曲部径が25.8cmを測る大型品で、胴部上半が強く張る。８は屈曲部径が復元で11.8cmとなる小型品である。胴部上半の張りは弱い。これらは、弥生時代中期後葉に比定できる。また、９は回転糸切り離し痕が外底に残る中世の土師器皿もしくは坏である。

図14-１～14は、調査区中央部やや東よりで確認した土器集中地点の出土土器である。１～５は、甕の口縁部～胴部にかけての破片である。口径が10数cmの小型品（１）、20～25cm程度の中型品（２～４）、30cmをこえる大型品（５）に分けることができる。１は口縁部が強く屈曲し、胴部上半の張りは弱い。中・大型品は口縁部が強く外傾し、胴部上半は張りをもつ。口縁端部には凹線の巡らされないもの（２）と、巡らされるもの（３～５）がある。また、屈曲部外面には突帯を貼付するもの（２・３・５）と、貼付しないもの（４）がある。６・７は甕胴部片である。８～10は胴部から底部にかけての破片である。８は壺もしくは鉢、９・10は甕底部である。

11は鉢の口縁部片である。口縁部は強く内傾し、口縁端を水平方向へ拡張する。外面には刻目および稜の明瞭な沈線状の凹線が３条施される。口縁端面にヘラ状工具で細い刻目と、凹線下側にヘラ状工具で細い斜単線文を２条巡らせる。文京３次調査で類例が出土しており、外来系の鉢とされている。しかし、本例の胎土は在地の土器と変わらない。

12～14は高坏である。12は口縁から坏部片であり、水平口縁をなす。剥離面、断面の状況から焼成時に破損したことが窺える。13は円盤充填の坏部底の破片である。14は脚裾部の破片である。

これらの土器は、弥生時代中期後葉に比定できる。

以上、１-２-３間トレンチで検出した遺構は、出土遺物と切り合い関係から、弥生時代中期後葉を中心とするものと考えられる。

［４トレンチ］（図15、写真19・21）

共通教育棟東側に設けられる外灯基礎部分である。トレンチ内の大部分では、掘削深度１mまでⅠ層が続くが、北壁に接して東西に約20cm幅で、Ⅱ層以下が残存していることを確認できた。当該箇所では、地表下約40cmでⅡ層となり、厚さ20cmほど堆積する。

以下、Ⅲ層が20cmほど堆積した後、Ⅳ層となる。Ⅲ層は、暗褐色砂質シルトであるが、親指先大の円礫が混じるⅢ-１層と、灰白色砂質土のⅢ-２層からなる。Ⅲ-１層からは弥生土器片が出土している。Ⅳ層もⅣ-１層とⅣ-２層に分層できる。Ⅳ-１層は明黄褐色砂質土。Ⅳ-２層は灰白色の径２mm～拳大の円礫からなる砂礫層である。出土遺物はない。

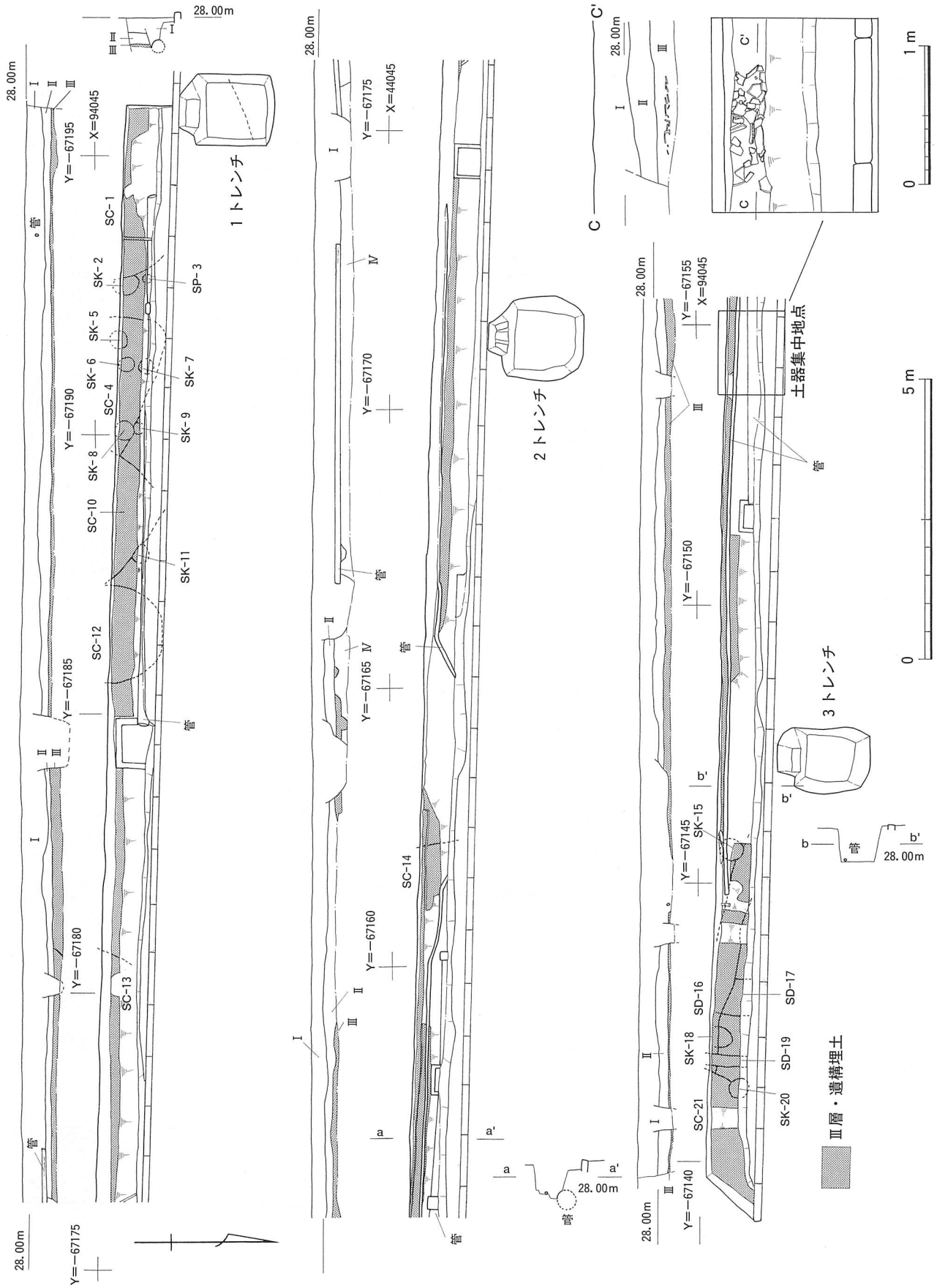


図13　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）1－2－3間トレンチ平面図、土層断面図（縮尺 1/100、1/40）

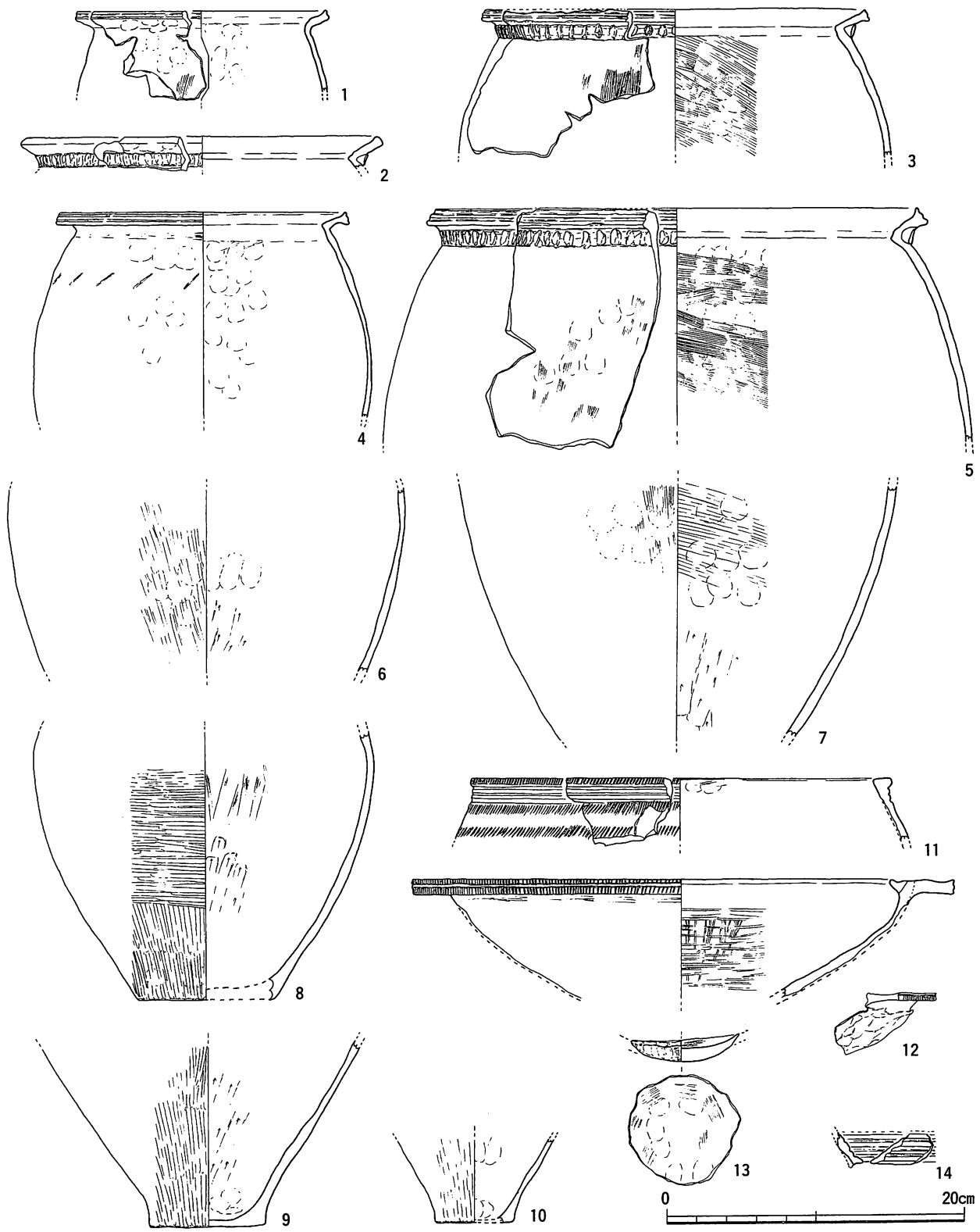


図14　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）出土遺物実測図２（縮尺　1／4）

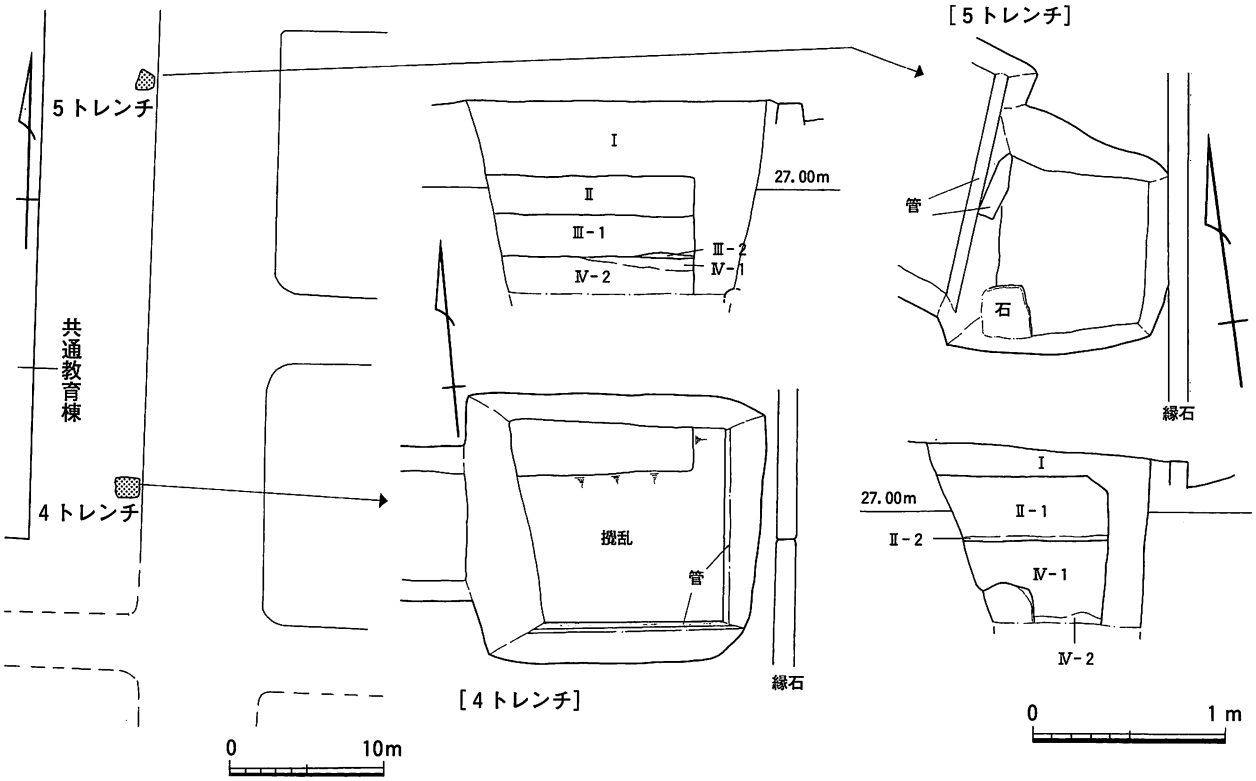


図15　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）4・5トレンチ位置図、土層断面図（縮尺 1/500、1/40）

［5トレンチ］（図15、写真19・22）

共通教育棟東側、4トレンチの北の外灯基礎部分である。地表下約10cmで近世の耕作土であるⅡ層があらわれ、地表下40cmまで続いた後、Ⅳ層を検出した。Ⅲ層はみられない。Ⅱ層は灰黄色シルトで、径1mm前後の砂粒が多く混じる。城北団地造成以前の水田層で、耕作土層のⅡ-1層と、その床土層であるⅡ-2層からなる。Ⅳ-1層は浅黄色砂質土で、砂礫や人頭大の円礫が混じる。Ⅳ-2層は砂礫層で、握り拳大前後の礫を多く含む。

出土遺物はない。

［6トレンチ］（図16、写真20・23）

共通教育棟東側、5トレンチのさらに北側の外灯基礎部分である。地表下30～40cmで団地造成以前の耕作土であるⅡ層となり、20～50cm程の堆積がみられる。その下層はⅣ層となる。Ⅳ層上面で、南東から北西方向にのびる溝（SD-1）を確認できた。

Ⅳ層は明黄褐色砂質シルトである。Ⅳ層の下部には、拳大の円礫からなるⅤ層が地表下約1mであらわれる。

SD-1は、逆台形の断面をもつ。調査区が狭いため、溝幅は不明。埋土は12層に分層できる。①層はにぶい黄褐色砂質土で、径2mm未満の砂粒が多く混じる。②層は灰白色砂質土で、きめが細かい。③層はにぶい黄褐色砂質土と灰白色砂質土が混じった層である。④層はにぶい黄褐色砂質土を主体として、丸い明黄褐色シルト塊が少量混じる。小指先大の礫を含む。⑤層はにぶい黄褐色砂質土層と灰白色砂質土層からなる。③層よりも砂粒が多く混じる。⑥層はにぶい黄橙色砂質土で、しまりがある。⑦層はにぶい黄橙色砂質土を主体としながら、明黄褐色砂質シルトのレンズ状ブロック、丸い黄灰色砂質土塊を含む。⑧層は黄灰色砂質土に丸い明黄褐色砂質シルト塊が混じる。⑨層はにぶい黄橙色砂質土で、灰黄色砂質土が少量混じる。⑩層は黄灰色砂質土。⑪層はにぶい黄橙色砂質土で、灰黄色砂質土が少量混じる。⑫層はにぶい黄橙色砂質土を主

写真19　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
4・5トレンチ全景（南から）

写真20　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
6・7トレンチ位置（北東から）

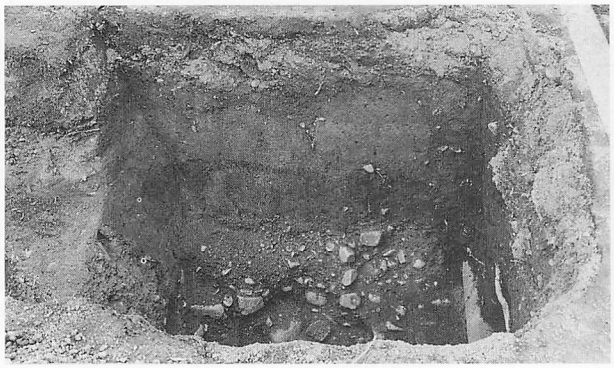


写真21　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
4トレンチ北壁土層断面

写真23　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
6トレンチ西壁土層断面

写真22　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
5トレンチ南壁土層断面

写真24　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
7トレンチ北壁土層断面

写真25　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
8トレンチ北壁土層断面

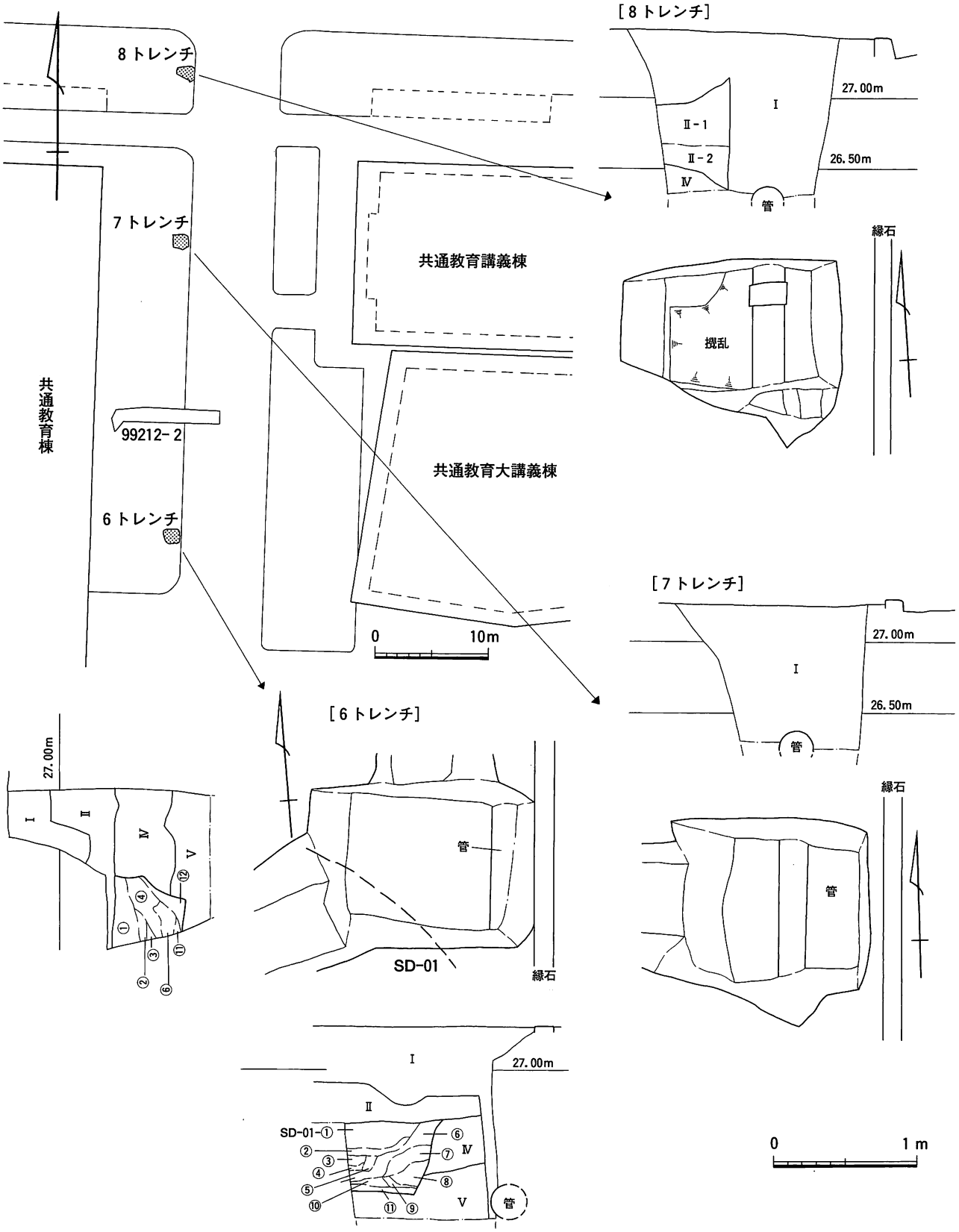


図16　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）６～８トレンチ位置図、土層断面図（縮尺 1/500、1/40）

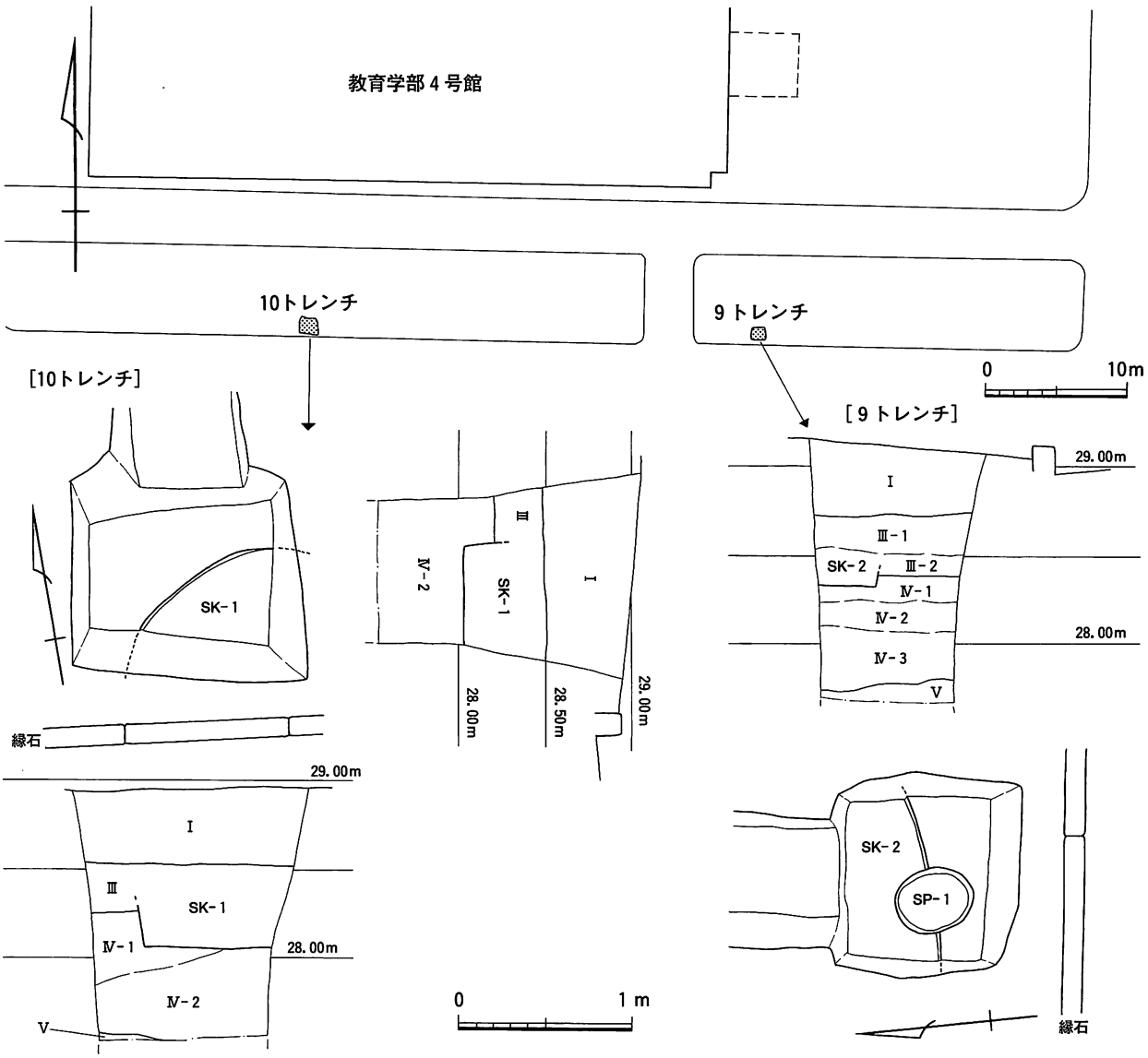


図17　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）９・10トレンチ位置図、土層断面図（縮尺　1/500、1/40）

体とし、灰黄色砂質土や丸い明黄褐色砂質シルト塊が混じる。

SD-１から出土した遺物はない。そのため、溝が機能した時期は不明であるが、埋土には大量の砂礫や砂質土が混じっており、水路として機能していたと考える。

［７トレンチ］（図16、写真24）

共通教育棟東側、６トレンチのさらに北側の外灯基礎部分である。地表下１mまで掘り下げたが、瓦礫を伴うⅠ層が続く。トレンチ内中央には南北方向に走る管路が埋設されており、その埋設工事に際して攪乱されている。

［８トレンチ］（図16、写真25）

共通教育棟東側、７トレンチ北に設けられる外灯基礎部分である。トレンチ内の東半分は、地表下1.1mまで掘り下げたが、瓦礫を伴ったⅠ層が続く。西半分では、地表下約30cmで、城北団地が造成される以前の水田層であるⅡ層が確認できた。Ⅱ層は、径１～３㎜前後の砂礫が多く混じるにぶい黄色シルトのⅡ-１層と、径２～３㎜の砂礫や小円礫が多く混じる黄褐色砂質シルトのⅡ-２層に分層できる。Ⅱ-２層には、さらに丸い明黄褐色砂質土塊が混じる。

本トレンチではⅢ層はみられず、地表下１mでⅣ層があらわれた。Ⅳ層は、浅黄色砂質シルトで、径１～２㎜前後の砂粒が混じる。一部にマンガンが沈着する。遺物は出土していない。

［９トレンチ］（図17・18、写真26・27）

共通教育講義棟北側の外灯基礎部分である。地表下約40cmでⅢ層があらわれた。以下、Ⅲ層は約30cm堆積し、地表下約70cmでⅣ層となる。

Ⅲ層は、径２～３cm大の花崗岩の円礫が混じる暗黒褐色砂質土のⅢ－１層と、径１～３cmの花崗岩の円礫が混じる暗褐色砂質土のⅢ－２層からなる。

Ⅳ層上面で、柱穴（SP－１）と土壙（SK－２）を各１基確認した。SP－１はSK－２を切る円形の小穴である。SK－２は、ほぼ東西に直線的にのびる浅い落ち込みで、竪穴式住居跡の可能性も残る。埋土はⅢ－２層と共通する。Ⅲ層下半から、弥生時代中期後葉に比定できる平底の壺底部片と、小型の甕もしくは鉢の口縁部片が出土している（図18－１・２）。SP－１、SK－２は、当該期の遺構と考えられる。

Ⅳ層は、Ⅳ－１～Ⅳ－３層からなる。Ⅳ－１層は暗灰褐色粗砂層、Ⅳ－２層はやや白みを帯びた黄灰色粗砂層、Ⅳ－３層は黄褐色細砂層である。その下層のⅤ層は、径１cm～握り拳大の円礫から構成される礫層で、黄褐色～灰黄色粗砂が混じる。

［10トレンチ］（図17、写真28・29）

共通教育講義棟北側、９トレンチの東に設けられる外灯基礎部分である。地表下40cmでⅢ層があらわれた。30～40cmほど堆積する。暗褐色砂質シルトで、径２～４cmの花崗岩の円礫が混じる。Ⅲ層中から弥生土器片が出土した。

地表下70～80cmでⅣ層となる。Ⅳ層上面で、弧状を呈する遺構（SK－１）を検出した。埋土中には、径２～５cmの花崗岩の円礫が詰まる。竪穴式住居跡の可能性も考えられる。

Ⅳ層は、小礫や粗砂からなる暗褐色砂礫層のⅣ－１層と、暗灰色粗砂層のⅣ－２層からなる。Ⅴ層は握り拳大の花崗岩円礫砂層で、暗灰色粗砂が混じる。

［11トレンチ］（図19、写真30）

教育学部本館東側に設けられるトレンチ中央には、南北方向に走る管路に伴う攪乱がおよぶ。しかし、その両側は攪乱を免れている。

地表下約40cmでⅡ層があらわれ、80cmでⅢ層となる。Ⅱ層は、にぶい黄色シルトのⅡ－１層、径１～３㎜の砂礫からなる灰白色砂礫ブロックのⅡ－２層、水田床土層のⅡ－３層からなる。

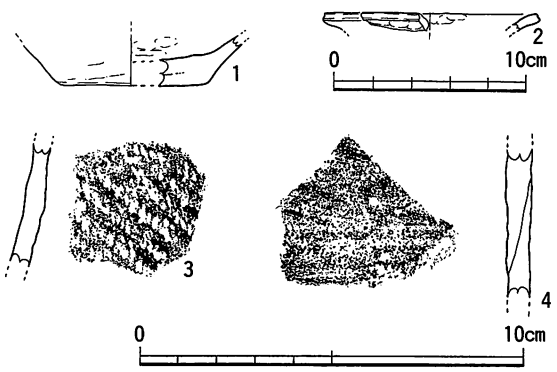


図18　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
出土遺物実測図３（縮尺　1/4、1/2）
（１・２：９トレンチⅢ層、
３・４：13トレンチⅣ層）

Ⅲ層は、厚さ20cmほどの灰黄褐色砂質シルト層で、丸い明黄褐色塊が多く混じる。また、Ⅲ層には本来なら混じらない小円礫がみられるので、遺構埋土である可能性が考えられる。Ⅲ層中からは、弥生土器もしくは土師器の小片が出土している。

Ⅲ層下の地表下1.1mでⅣ層があらわれる。にぶい黄橙色シルトで、１～２㎜の砂粒および円礫が多く混じる。

［12トレンチ］（図19、写真31）

教育学部本館東側、11トレンチの南に位置する外灯基礎部分である。地表下1.2mまで掘り下げたが、瓦礫が混じるⅠ層が続く。トレンチ内を南北方向に走る管路があり、その管路設置に伴い攪乱を受けたもの考えられる。

［13トレンチ］（図18・20、写真32）

教育学部本館南側の外灯基礎部分である。地表下約80cmでⅣ層があらわれた。Ⅱ層・Ⅲ層はみられない。その下層のⅣ層は、径１㎜～小指先大の円礫が混じる明黄褐色砂質シルトのⅣ－１層と、浅黄色砂質シルトのⅣ－２層に分層できる。Ⅳ－２層は、Ⅳ－１層に比して、砂性が強い。砂礫が混じるが、その割合は少ない。

Ⅳ層中からは縄文土器鉢の胴部片が出土している（図18－３・４）。小破片のため、傾きについては不明であるが、３は調整等の特徴から縄文時代中期前半の船元式土器である可能性が高い。

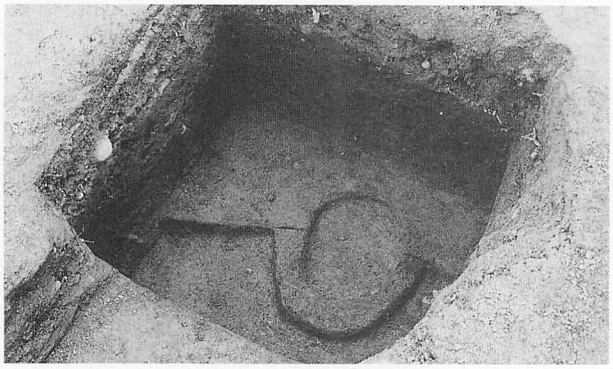


写真26　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
9トレンチSP-1・SK-2（北西から）

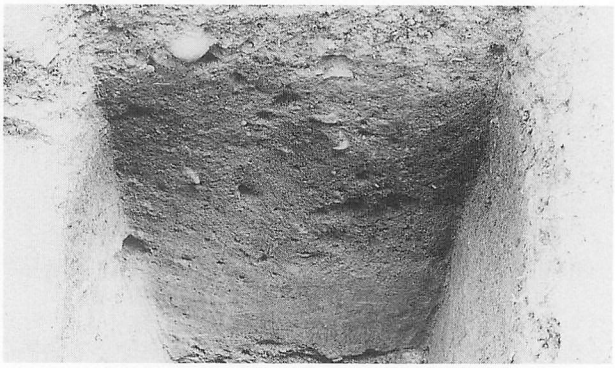


写真27　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
9トレンチ東壁土層断面

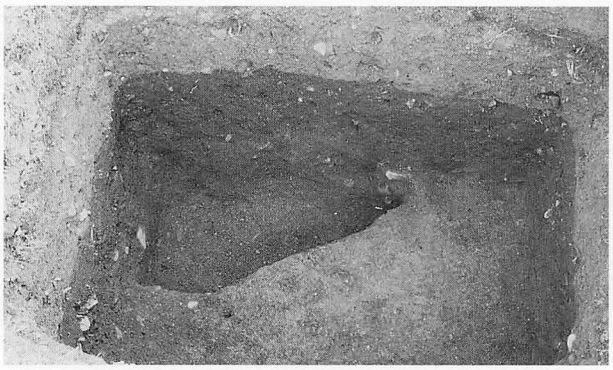


写真28　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
10トレンチSK-1（北から）

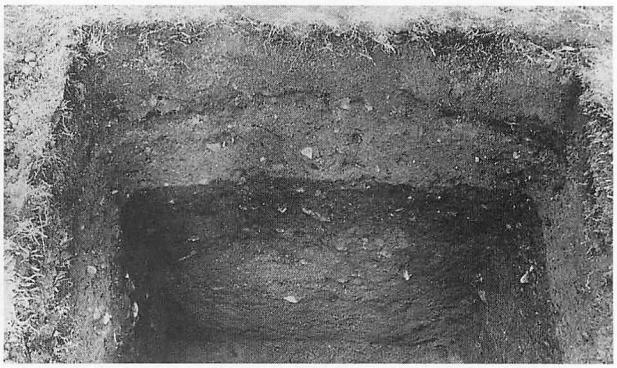


写真29　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
10トレンチ南壁土層断面

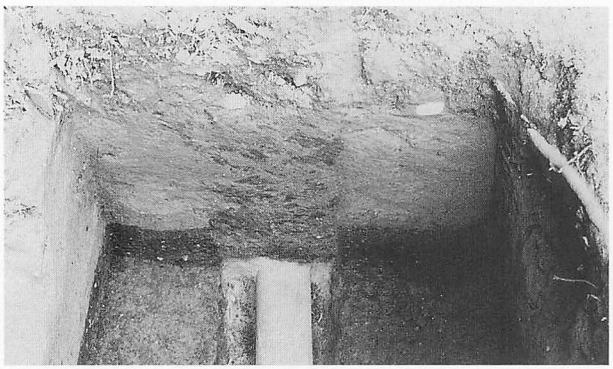


写真30　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
11トレンチ北壁土層断面

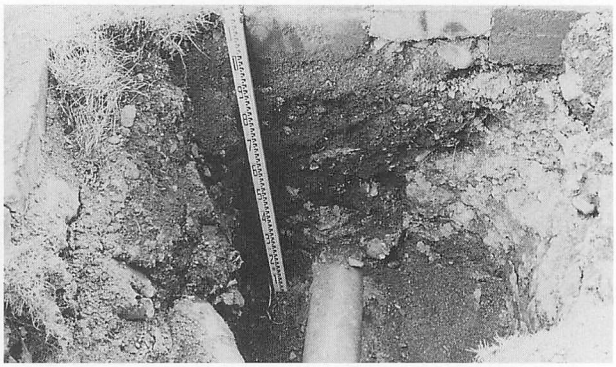


写真31　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
12トレンチ土層断面

写真32　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
13トレンチ西壁土層断面

写真33　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
14トレンチ北壁土層断面

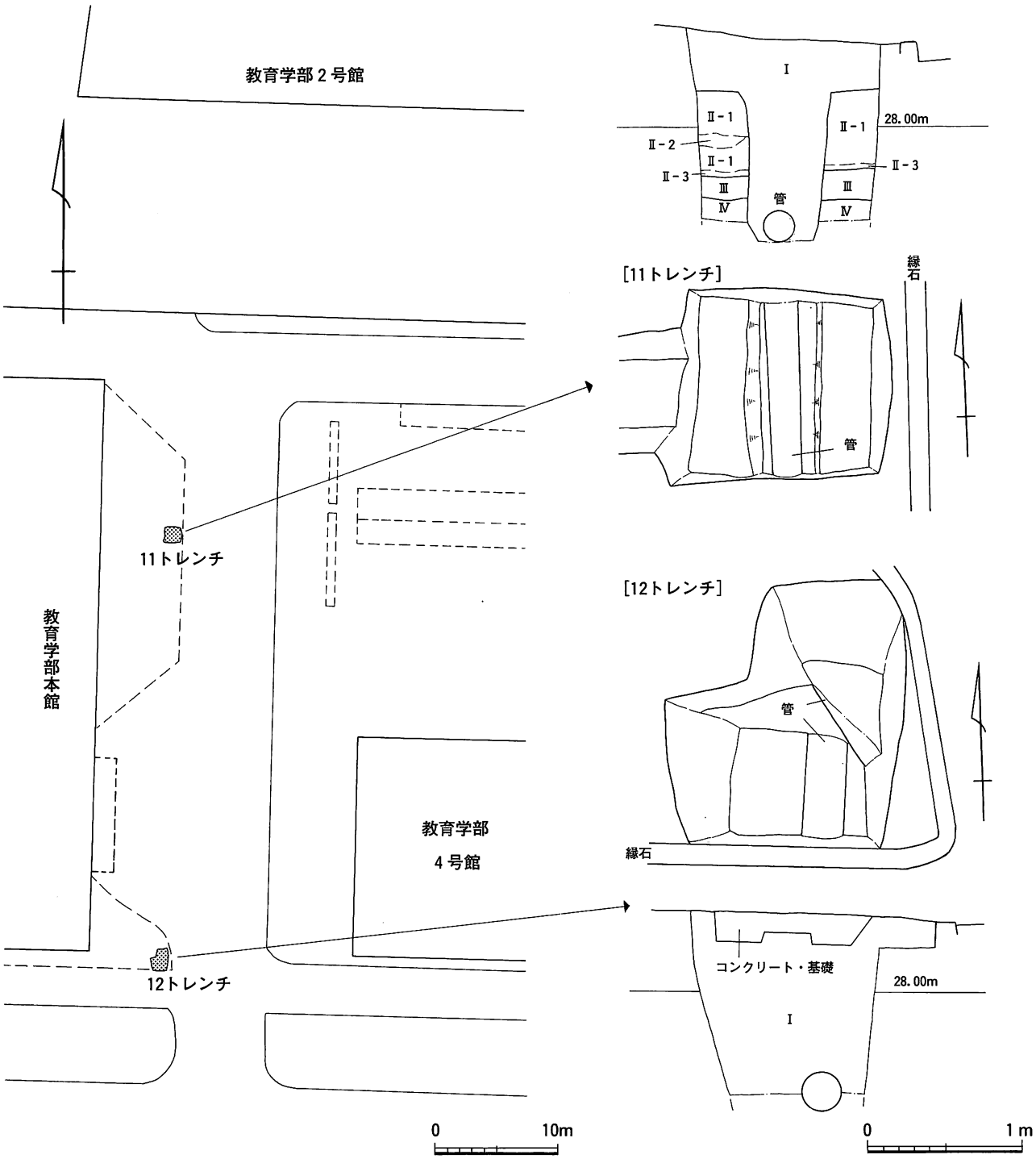


図19　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）11・12トレンチ位置図、土層断面図（縮尺 1/500、1/40）

[14トレンチ]（図20、写真33）

教育学部本館南側、13トレンチの東に位置する外灯基礎部分である。地表下90cmでⅡ層となる。以下、工事に伴う掘削深度の地表下1.7mまでⅡ層が続く。このⅡ層は、一部上層の水田の影響で、にぶい黄橙色の部分もあるが、基本的には灰黄褐色で、砂礫や小円礫が大量に混じるシルト質土である。Ⅱ-1～Ⅱ-6層に分層できる。Ⅱ-1層は、灰黄色砂質シルトで、砂礫が多く混じる。Ⅱ-2層は、にぶい黄色砂質シルトで、Ⅱ-1層の床土層である。Ⅱ-1層と比べて若干粘性があり、径2～3㎜の礫が多く混じる。Ⅱ-3層は、にぶい黄橙色砂質シルトで、土質はⅡ-2と共通するが、径1～2㎜前後の砂粒が多く含まれる。Ⅱ-4層は、にぶい黄色砂質シルトとにぶい黄橙色砂質シルトが混じりあった土層で、Ⅱ-2・3層に比べて砂礫が圧倒的に多い。Ⅱ-5層は、砂礫が多く混じる灰黄

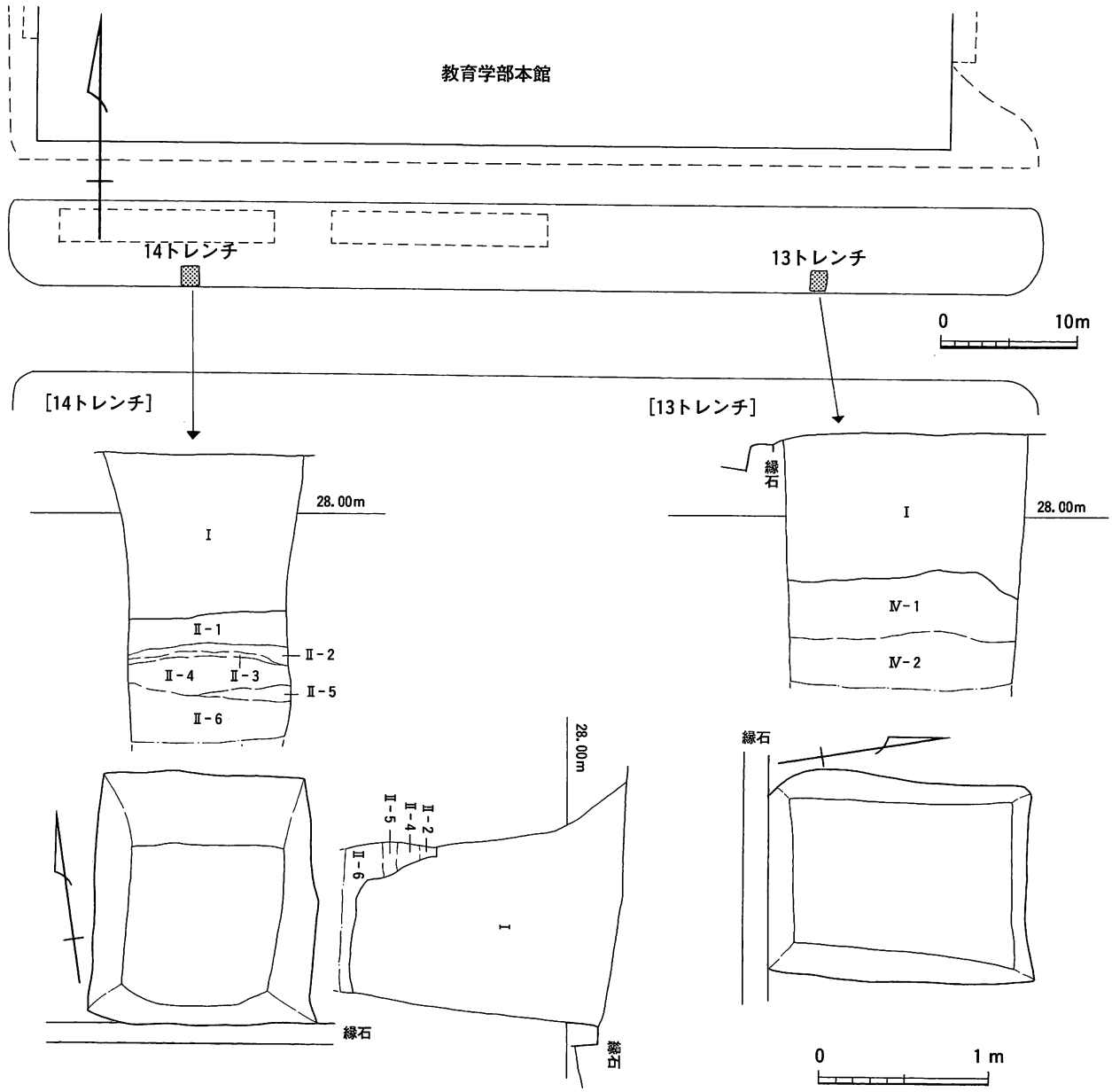


図20　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）13・14トレンチ位置図、土層断面図（縮尺 1/500、1/40）

褐色シルトで、Ⅱ-5層と比べて若干淡い色調である。Ⅱ-6層は、灰黄褐色シルトと灰白色砂礫が縞状に互層堆積した土層で、小指先大の小円礫も混じる。

以上のⅡ層は、遺物は出土していないが、古代・中世～近世の水田層と考えられる。

[15トレンチ]（図21、写真34）

教育学部本館北西部の外灯基礎部分である。地表下1.1mでⅡ層があらわれた。Ⅱ層は、砂礫が多く混じるにぶい黄橙色シルトのⅡ-1層と、砂礫混じりの灰黄色シルトであるⅡ-2層からなる。Ⅱ層は、団地造成以前の水田耕作土である。

さらに、地表下1.4mでⅢ層があらわれる。灰黄褐色シルトで、文京遺跡12次調査でみられたⅢ層と比べて、淡い土色を呈する。10cmほどの厚さである。その下層の地表下1.5mでⅣ層を検出した。Ⅳ層上面で小穴を確認できた。埋土はⅢ層を主体として、小指先大の丸い明黄褐色シルト塊が混じる。

Ⅳ層を工事に伴う掘削深度の1.9mまでは掘り下げた。径1cm～親指先大の小円礫が少量混じる明黄褐色シルトであるⅣ-1層と、明黄褐色砂質シルトのⅣ-2層からなる。Ⅳ層から縄文土器の細片が1点出土したが、図化できるほどの大きさではない。

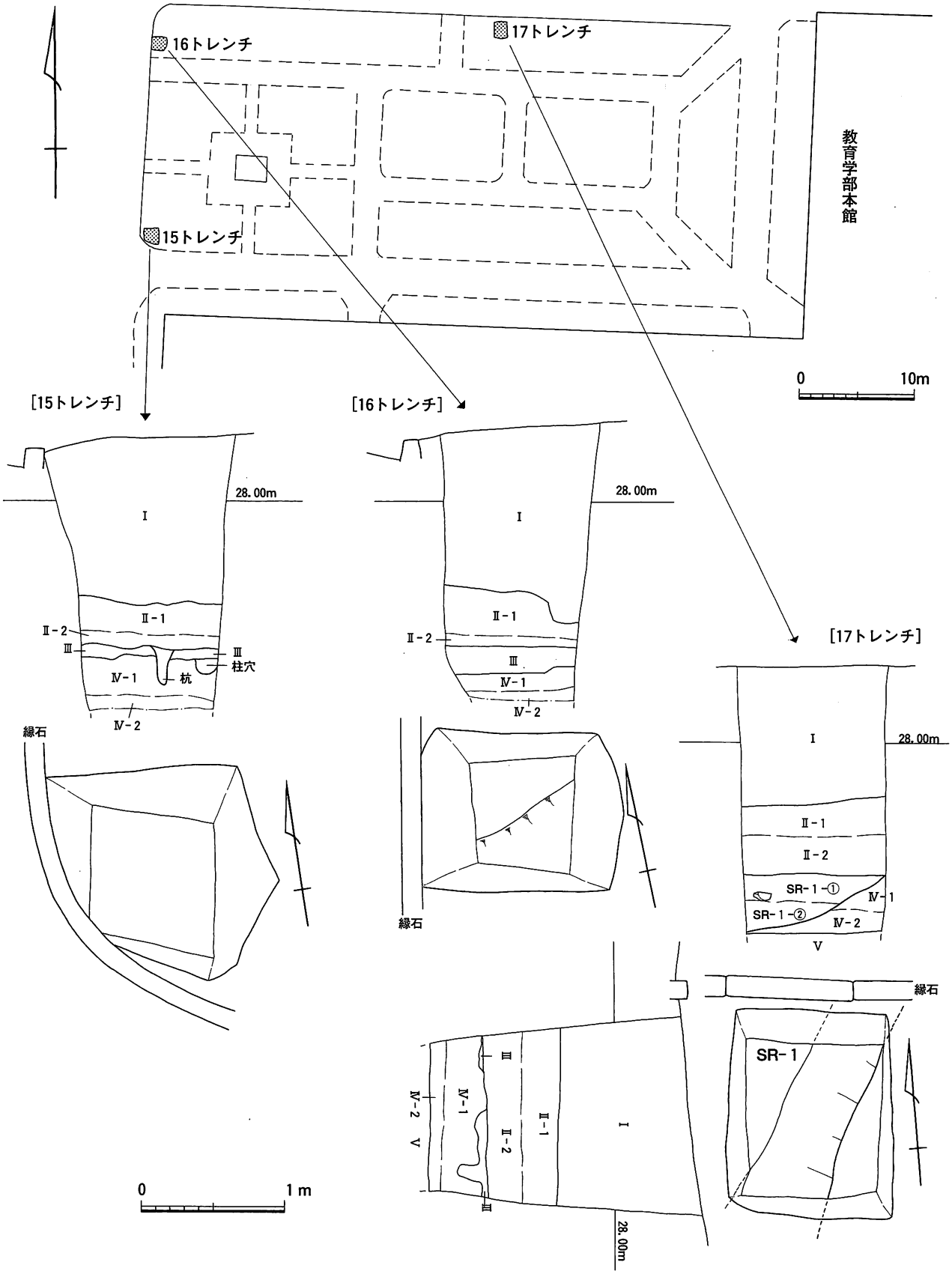


図21　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）15～17トレンチ位置図、土層断面図（縮尺 1/500、1/40）

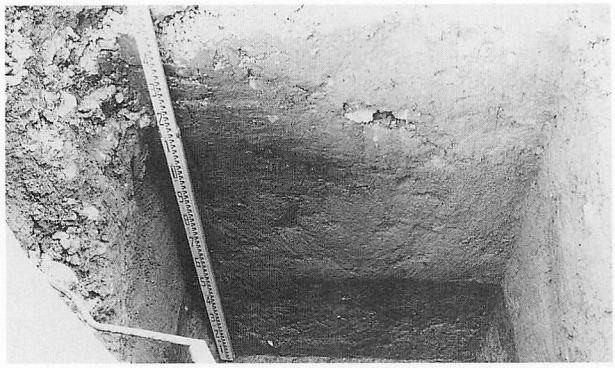


写真34　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
15トレンチ北壁土層断面

写真35　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
16トレンチ北壁土層断面

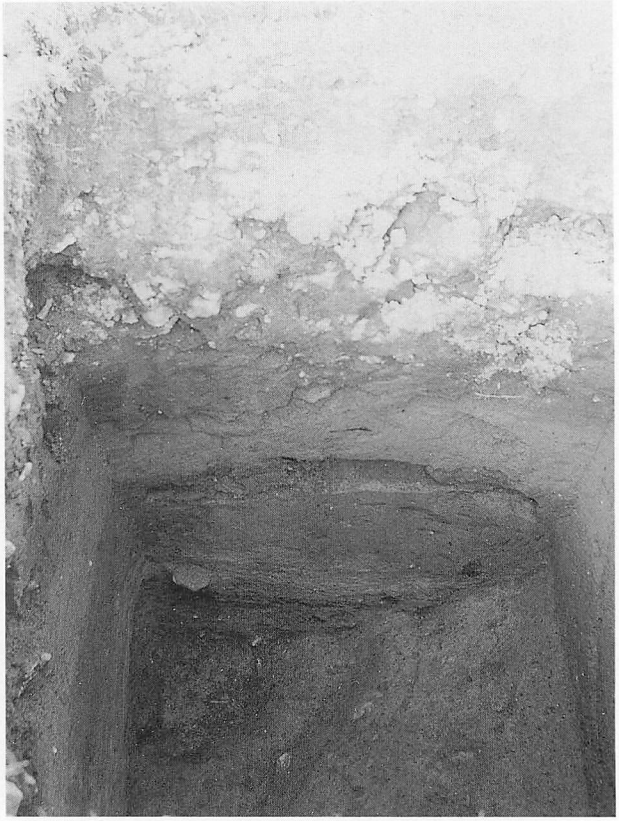


写真36　99902調査（文京遺跡19次Ⅱ区）
17トレンチ北壁土層断面

［16トレンチ］（図21、写真35）

教育学部本館北西部、15トレンチ北側の外灯基礎部分である。地表下1.1mでⅡ層があらわれた。Ⅱ層は、砂礫が多く混じる灰黄褐色シルトのⅡ-1層と、灰白色の径1～2㎜の砂礫層であるⅡ-2層に分層できる。

さらに、地表下1.5mでⅢ層となる。Ⅲ層は15トレンチでみられたものと同様に、灰黄褐色粘質土で、径1㎜～小指先大の砂礫が少量混じる。地表下1.7mでⅣ層があらわれ、工事に伴う掘削深度1.9mまで続く。2層に分層できた。Ⅳ-1層は明黄褐色シルト。Ⅳ-2層は明黄褐色シルトで若干粘性を帯びる。

［17トレンチ］（図21、写真36）

教育学部本館北西部、16トレンチの東に位置する外灯基礎部分である。地表下約85㎝でⅡ層があらわれた。層厚50㎝ほどである。Ⅱ層は2層からなり、Ⅱ-1層は、団地造成以前の水田層である。灰褐色砂質シルトで、全体にマンガンの沈着が目立つ。Ⅱ-2層は、淡暗褐色砂質シルトで、細砂や微細砂の薄いレンズ状ブロックが、いくつもほぼ水平に堆積し、文京遺跡18次調査で確認されている古代後半の水田土壌に類似する。

Ⅲ層は暗褐色シルトで、下層のⅣ層とは不整合面をなし凹凸がみられるが、遺構としては認識できない。Ⅳ層上面で、北東から南西方向に続く流路（SR-1）の肩部を検出した。SR-1の上層埋土である①層は、灰白色～灰色の粗砂や細砂がほぼ水平に縞状に互層堆積する。②層は、マンガンや鉄が沈着した灰白色～灰色の粗・細砂層が縞状に互層状態で堆積する。①層と比べて、しまってかたい。

Ⅳ層はⅣ-1層とⅣ-2層に分層できる。Ⅳ-1層は、黄褐色粘質シルトである。Ⅳ-2層は、黄褐色粘質シルトに灰褐色粗砂が多く混じり、全体に黄褐色砂質シルトとなる。

Ⅴ層は握り拳大の花崗岩や砂岩の角のない丸い円礫層で、礫間には黄褐色砂質シルトがつまる。Ⅲ層とⅣ層、Ⅳ-1とⅣ-2層の層界については漸移的である。

Ⅱ-2層とⅢ層の層界から弥生土器・土師器片が出土している。

3　調査の成果と問題点

本調査では、発掘調査地点が城北地区の各所にちら

ばり、結果として調査と調査成果に様々な影響をおよぼした。

まず、発掘調査着手直後、工事業者によって、工事工程の都合から調査地点の調査順序変更の要望が出された。しかし、調査室で計画していた発掘調査の順序と大きく異なったため、大幅な調査計画の変更を伴うこととなった。先行して調査を実施したⅠ区(調査番号：99901)と同様、効率的な調査を進めるためにも、周到な工事計画と発掘調査計画との連絡調整が必要である。

また、本調査は文京遺跡の実態把握に資することとなった。とくに、1トレンチ、1-2-3間トレンチでは、弥生時代中期後葉から後期初頭にかけての文京遺跡集落の密集状況を再確認できた。4トレンチでも当該期と思われるⅢ層を確認しており、4トレンチ付近まで集落の密集状況が続くことが明らかとなった。

また、13トレンチでは、縄文時代中期前半の船元式土器を1点ではあるが確認している。文京遺跡における既往の調査では、縄文時代後期以前の遺物が出土していないことから、貴重な資料であると言える。今後とも、文京遺跡における縄文時代の遺跡の有無やその広がり等の実態把握が必要となってきた。

以上のような成果をもたらした今回の調査であるが、文京遺跡の実体が明らかになると同時に、文京遺跡自身が切り刻まれていっているという側面も見逃してはならないことを最後に付け加えておきたい。

（三吉・山村）

99903　農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事に伴う立会調査（1期）

調査地点　松山市樽味3丁目5番7号
　　樽味団地（図2）
調査面積　1.4㎡
調査期間　1999年10月6日
調査の種別　立会調査
調査担当　吉田広
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　施設課長発事務連絡
　　（平成11年9月9日付）

1　調査にいたる経緯

農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事に伴って、埋蔵文化財調査が必要と判断された。本体工事の進捗状況と整合させるために、これらすべてを一気に行うことはできず、都合4回に分けて行うこととなった。今回は、高等学校校舎西側道路部分から建物に電気線を引き込む際のハンドホール設置に関わる調査である。

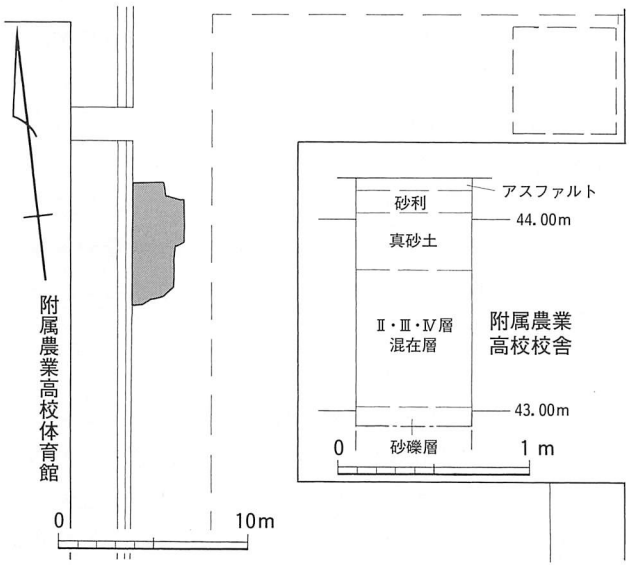


図22　99903調査位置図および土層柱状図
（縮尺　1/400、1/40）

写真37　99903調査地点（南から）

2　調査の記録（図22、写真37）

地表下約50cmまではアスファルト・砕礫・真砂土のⅠ層である。以下、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層が小塊となって混合した層が地表下約120cmまで続く。一帯には、弥生時代～中世の遺物を包含するⅢ層がかつては広がっていたものの、樽味団地造成時に周辺が整地された際に削平されたことが考えられる。なお、ハンドホール設置に必要な地表下128cmまでは、造成時の砂礫層であった。

3　調査後の対応

以降の慎重工事を依頼して調査を終えた。（吉田）

99904　農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事に伴う立会調査（２期）

調査地点　松山市樽味３丁目５番７号
　　樽味団地（図２）
調査面積　25m²
調査期間　1999年10月25日～10月29日
調査の種別　立会調査
調査担当　吉田広
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　施設課長発事務連絡
　　（平成11年９月９日付）

1　調査にいたる経緯

先の１期工事に引き続く農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事のうちの、主に外灯設置に伴う調査である。

2　調査の記録

調査地点は、外灯基礎の６ヶ所、外灯用電線管路のハンドホール部分２ヶ所、上水道量水機を設置する１ヶ所、そして先の１期工事の追加でもある高圧ケーブルハンドホール１ヶ所の、計10ヶ所である。調査順に１～10トレンチとした。

［１トレンチ］（図23、写真38）

外灯電源のために配管される弱電管のハンドホール設置に伴うトレンチである。高等学校北中庭の南より中央に位置する。現地表下80cmまでは攪乱を受けた表土（Ⅰ－１層）で、以下掘削深度の130cmまではⅡ・Ⅲ・Ⅳ層が10cmをこえる塊となって混在する土層（Ⅰ－２層）である。

［２トレンチ］（図23、写真39）

１トレンチの西約５m、外灯基礎設置に伴うトレンチである。工事に伴って掘削される深度の地表下145cmまで重機を用いて掘削したが、いずれも攪乱を受けた表土層であった。

［３トレンチ］（図23、写真40・41）

本来計画になかったが、先の１期工事で設置したハンドホールから直接建物内に高圧ケーブルの引き込みができず、新たなハンドホールが必要となり、高等学校中校舎北西隅付近に設置されたトレンチである。現地表下130cmまではⅠ層であるが、以下は掘削必要深度の145cmまでⅢ層が続く。その底面で平面精査を行い、SP－１～４とSD－５を確認した。これらの遺構はいずれも、Ⅲ－１層から掘り込まれている。SP－１～４の埋土は黒褐色粘質土で、小石は混じらない。SD－５埋土も黒褐色粘質土で、黒色粘質土の径３～５cmの不整形な塊が混じる。いずれも中世の遺構と推定される。これに対して、下層はやや黒みの強いⅢ－２層である。図25は３トレンチⅢ層出土の粘土塊である。

［４トレンチ］（図23、写真40）

３トレンチ北西に接して、１トレンチと同じ弱電管ハンドホールに対するトレンチである。やはり現地表下125cmまでⅠ層で、以下Ⅲ層となる。３トレンチ同様、上部約７cmがⅢ－１層で、以下工事で掘削される地表下135cmまで掘り下げたが、Ⅲ－２層が続く。Ⅲ－１層から掘り込まれた遺構も認められなかったので、Ⅲ－２層の堆積状況を確認するために、南壁際のみ掘り下げた。Ⅲ－２層は25cmほどの層厚で堆積していることが確認できた。

［５トレンチ］（図23、写真42）

高等学校北校舎西に設置される外灯に伴うトレンチである。地表下90cmまでⅠ層、以下110cmまではⅡ層となり、その下層には厚さ15cmほどのⅢ層が堆積する。Ⅲ層はきめの細かい粘質土で、ほとんど遺物を含まない。以下は褐色シルトのⅣ層である。

［６トレンチ］（図24、写真43）

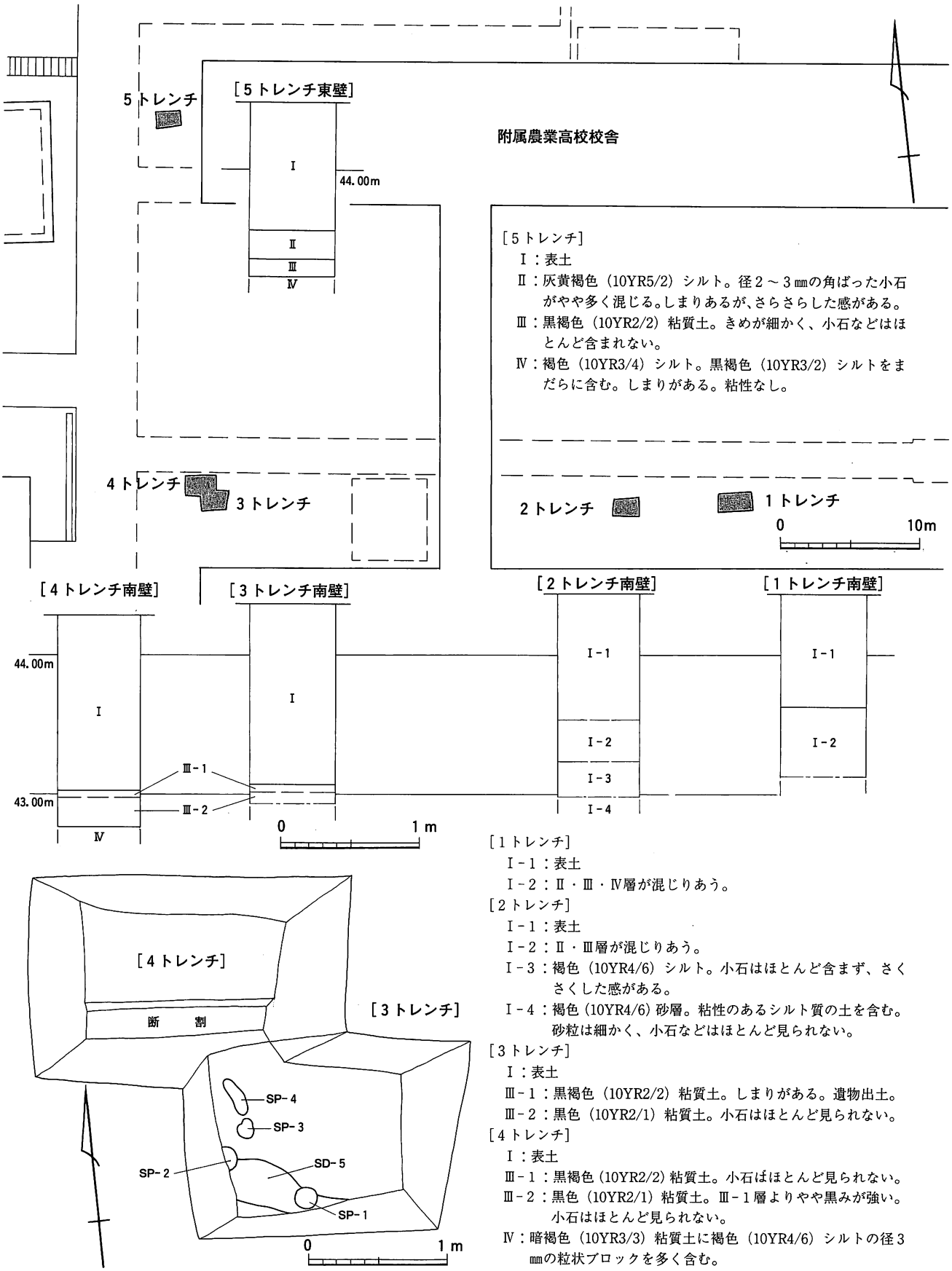


図23　99904調査1～5トレンチ位置図、遺構検出平面図、土層柱状図（縮尺　1/400、1/40）

写真38　99904調査１トレンチ（北から）

写真39　99904調査２トレンチ（北から）

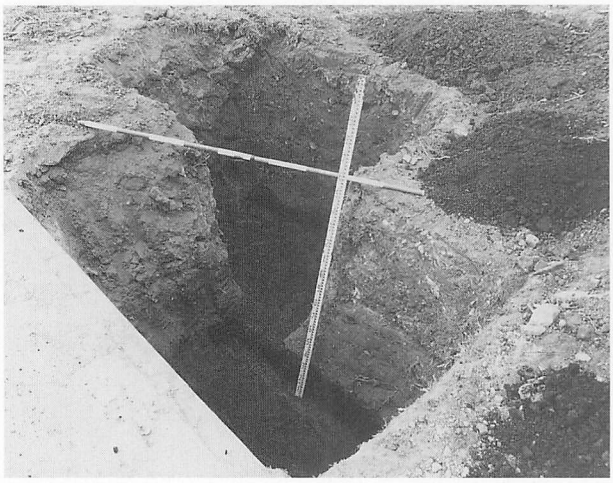


写真40　99904調査３・４トレンチ（北西から）

写真41　99904調査３トレンチ中世遺構検出面
（北東から）

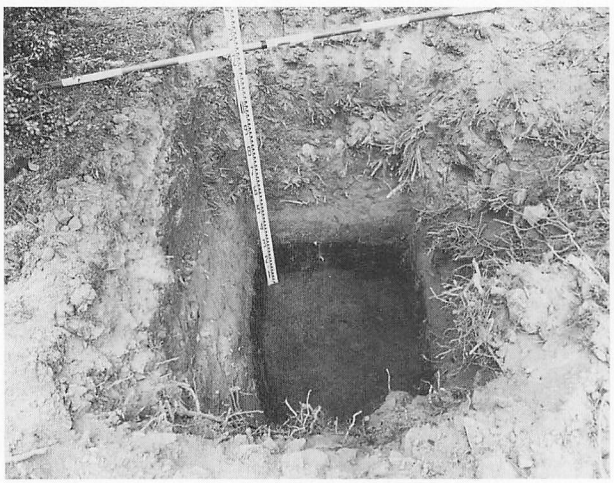
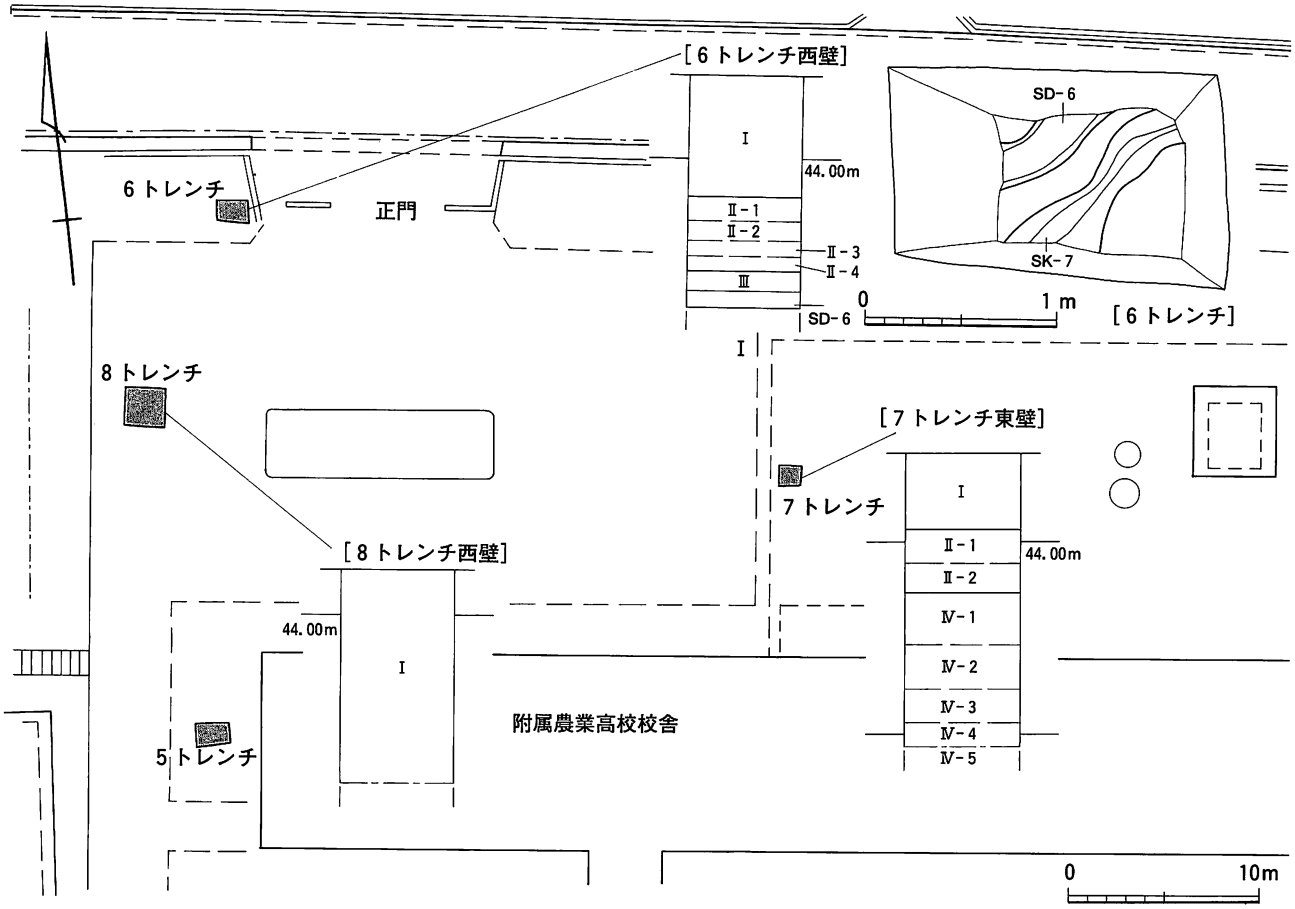


写真42　99904調査５トレンチ（西から）

写真43　99904調査６トレンチ（南西から）



[6トレンチ]
Ⅰ：表土
Ⅱ-1：灰黄褐色（10YR4/2）砂質シルト。小石はほとんど含まない、きめ細かいシルト質。しまりがあるが、さくさくした感じの土質。
Ⅱ-2：褐色（10YR4/4）砂質シルト。きめ細かいシルト質で、しまりあり。
Ⅱ-3：にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト。きめ細かいシルト質で、しまりあり。
Ⅱ-4：暗褐色（10YR3/3）砂質土。きめ細かいシルト質で、しまりあり。わずかに粘性あり。
Ⅲ：黒褐色（10YR2/2）粘質土。
[7トレンチ]
Ⅰ：表土
Ⅱ-1：オリーブ黒色（5Y3/1）粘質土。径1～2cmの小石が少量混じる。オリーブ黒色（5Y3/2）粘質土の径1～4cmの楕円形ブロックを少量含む。
Ⅱ-2：黒褐色（10YR3/2）粘質土。10YR2/2黒褐色シルトの径1cmの丸い塊が少量混じる。
Ⅳ-1：褐色（10YR4/4）粘質シルト。粘性は強いが、下層よりやや細かい砂粒を含む。
Ⅳ-2：褐色（10YR4/4）粘質土。粘性は強く、べたっとした感がある。
Ⅳ-3：黄褐色（10YR5/6）粘質シルト。きめの細かいシルト質だが粘性は強い。
Ⅳ-4：黄褐色（10YR5/6）砂質シルト。径1～5mmの角ばった角礫が多く混じる。
Ⅳ-5：褐色（10YR4/6）シルト。粘性は無い。触ると溶けるような感がある。

図24　99904調査6～8トレンチ位置図、遺構検出平面図、土層柱状図（縮尺　1/400、1/40）

高等学校正門西脇に設置される外灯に伴うトレンチである。表土は地表下60cmまでで、以下100cmまでは耕作土層のⅡ層がよく残る。その下層にⅢ層である黒褐色粘質土が約10cm堆積し、Ⅳ層となる。Ⅳ層上面で、SD-6とSK-7を検出した。ともに北東－南西方向の落ち込みで、深さは10cm前後。SD-6の埋土は、Ⅲ層とほぼ同じ黒褐色粘質土であるが、やや粘性がある。SK-7の埋土は、黒褐色粘質土で、下部は砂層になり、黒みが薄くなる。

［7トレンチ］（図24、写真44）

高等学校前庭に設置される外灯に対するトレンチである。地表下40cmまではⅠ層が続く。以下70cmまではⅡ層で、そのままシルト質土のⅣ層へと移り、工事に伴う掘削予定深度の150cmまでⅣ層が続く。

［8トレンチ］（図24、写真45）

上水道の量水機を設置するためのトレンチである。

工事の掘削深度の地表下110cmまで重機によって掘削したが、攪乱のおよぶⅠ層であった。

［９トレンチ］（図26、写真46）

高等学校南中庭の南より中央に位置する、外灯基礎に伴うトレンチである。工事の掘削深度である地表下110cmまで重機によって掘削したが、攪乱がおよぶⅠ層であった。

［10トレンチ］（図26、写真47）

高等学校南校舎北西隅の外灯基礎に伴うトレンチである。工事に伴う掘削深度の地表下140cmまで重機によって掘削したが、やはり攪乱がおよぶⅠ層が続く。

3　調査のまとめと調査後の対応

各トレンチは狭いが、附属農業高等学校各所にトレンチを配する結果となった。既往の調査成果と併せて、農業高等学校周辺の遺跡の残存状況がおよそ推し量れるようになった。それによれば、北側中庭から前庭西半を中心として、弥生時代～中世の遺物包含層が良好な状態で残っている。これに対して、南中庭より

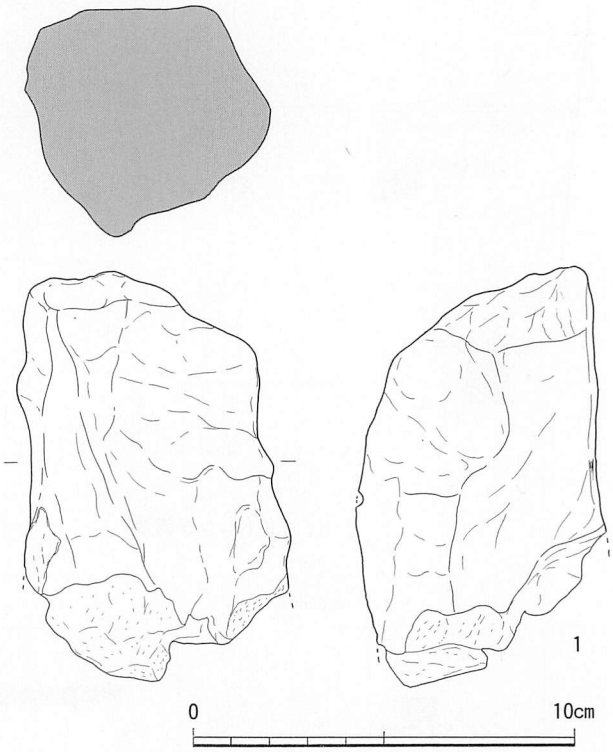


図25　99904調査出土遺物実測図（縮尺　1／2）

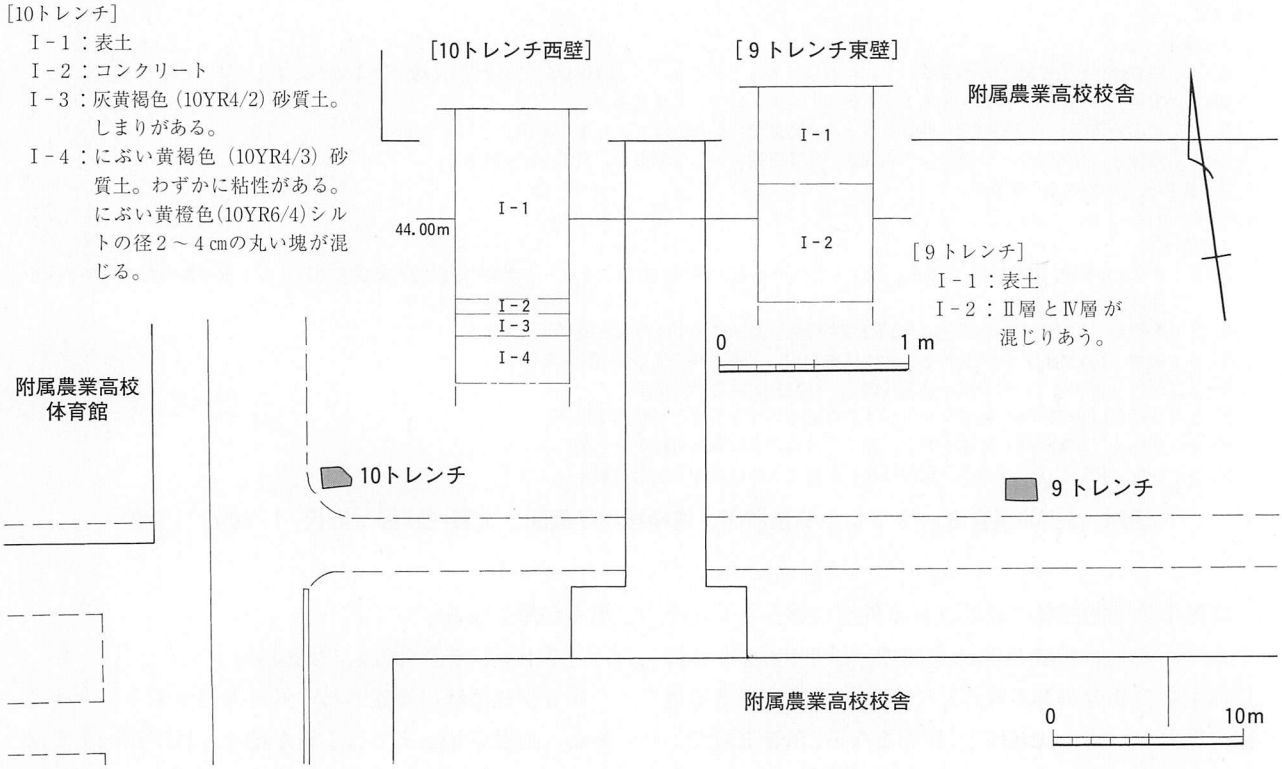


図26　99904調査９・10トレンチ位置図、土層柱状図（縮尺　1/400、1/40）

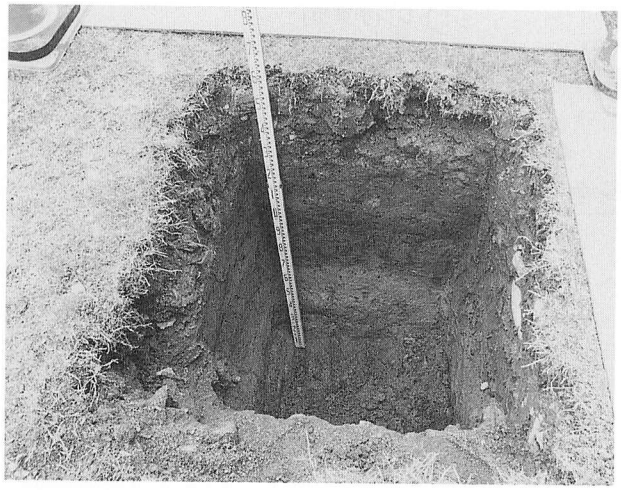


写真44　99904調査７トレンチ（西から）

写真45　99904調査８トレンチ（北東から）

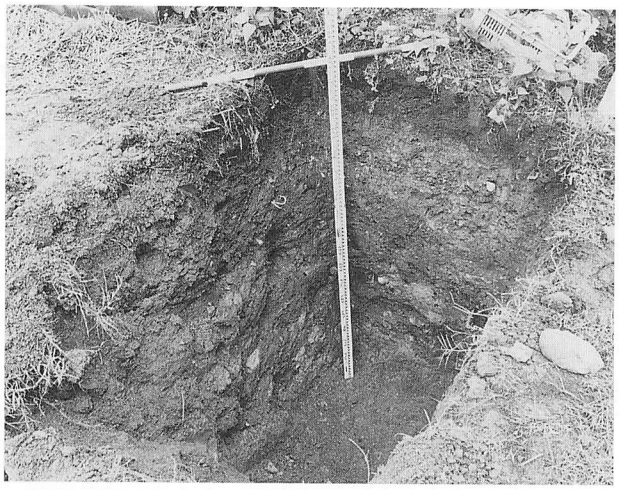


写真46　99904調査９トレンチ（南から）

写真47　99904調査10トレンチ（東から）

以南は遺物包含層が団地造成に伴って削られてしまっている可能性が高い。また、前庭東半ではⅡ層直下でⅣ層となるように、近世・近代の改変が著しいものと考えられる。

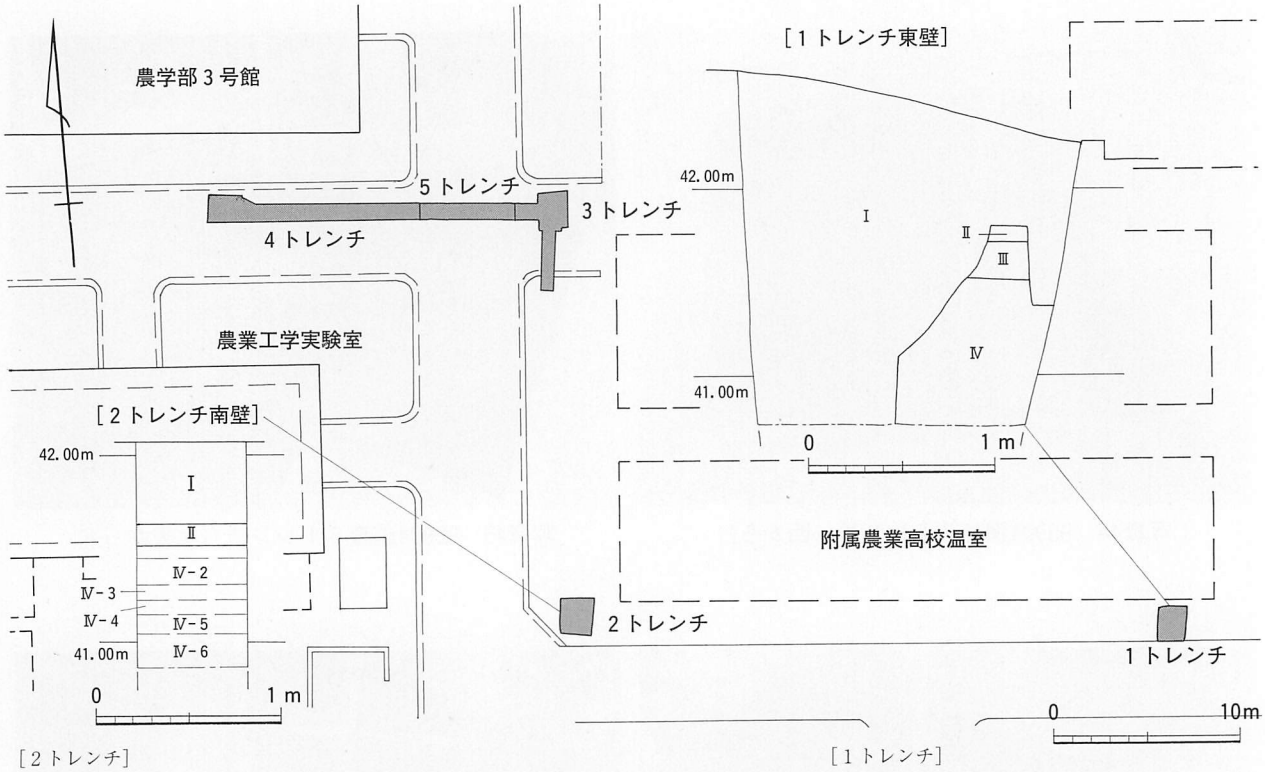
調査終了後、以降の慎重工事を依頼して、現地を撤収した。（吉田）

99905　農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事に伴う立会調査（３期）

調査地点　松山市樽味３丁目５番７号
樽味団地（図２）
調査面積　31㎡
調査期間　1999年11月24日～11月28日
調査の種別　立会調査
調査担当　吉田広
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　施設課長発事務連絡
（平成11年９月９日付）

１　調査にいたる経緯

先の１・２期工事に引き続いて、３期工事として弱



［２トレンチ］
Ⅰ：表土
Ⅱ：灰黄褐色（10YR4/2）砂質土。径５㎜の礫を少量含む。ややさくさくした感がある。
Ⅳ-１：褐色（10YR4/6）粘質土。粘性が強い。砂礫はほとんど含まない。
Ⅳ-２：褐色（7.5YR4/4）粘質土。粘性が強い。砂礫はほとんど含まない。下部ほど茶色みが強い。
Ⅳ-３：暗褐色（10YR3/3）粘質シルト。きめ細かく砂っぽい。粘性はややある。
Ⅳ-４：褐色（10YR4/4）粘質シルト。Ⅳ-３層と質はほとんど同じ。
Ⅳ-５：黄褐色（10YR5/6）砂質シルト。Ⅳ-３層と質はほとんど同じ。
Ⅳ-６：暗褐色（10YR3/3）砂礫層。径１～３㎝の角礫からなる。しまりはある。

［１トレンチ］
Ⅰ：表土
Ⅱ：暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂質土。しまりがある。径２～３㎜の礫が少量混じる。
Ⅲ：黒色（10YR1.7/1）粘質シルト。遺物が出土。きめ細かく、砂粒は含まない。しまりがある。
Ⅳ：褐色（10YR4/6）粘質シルト。きめ細かく、砂粒はほとんど含まない。しまりがある。下部がやや灰色みを帯びる。

図27　99905調査１～５トレンチ位置図、土層柱状図、土層断面図（縮尺　1/400、1/40）

電線を農学部校舎から引く必要が生じた。それに伴う調査が３期調査である。

2　調査の記録

ハンドホール設置部分はもちろん、先の樽味遺跡５次調査で確認された深度に照らして、埋蔵文化財への影響が想定される管路部分についても調査を行うこととし、１～５トレンチを設定した。

（1）　各トレンチの調査状況

［１トレンチ］（図27、写真48）

農学部新営校舎南西角から西に弱電管路をのばし、その途中、温室南東角付近に設定される枡部分に対応したトレンチである。道路縁石から150cm北では、温室建設あるいは管路に伴う攪乱が、道路面から130cmは続く。また、道路縁石より北に30cm以南は、ガス管の埋設に伴って、道路面から75cmの深さまで攪乱がおよんでいる。このトレンチ内で破壊を免れている範囲は、南北に20～30cmの幅に過ぎない。それでも、道路面下35cmでⅡ層が、そして道路面下43～63cmの間にⅢ層が堆積することを確認できた。この地点のⅢ層は、砂粒を含まずきめの細かい黒色粘質シルトである。道路面下63cmから140cmまではⅣ層が続く。

［２トレンチ］（図27、写真49）

１トレンチから西へ、南北道路との交差点北東隅、温室の南西隅に位置する。表土層が45cmほどあり、道路面下25cmでⅡ層があらわれた。Ⅱ層は厚さ12cmほどで、道路面下36cm以下はⅣ層となり、工事に伴う掘削深度まで続く。

［３トレンチ］（図27～29、写真50）

２トレンチから北に、南北道路を横断する前の枡にあたる部分である。それ以南の管路部分も、先の樽味５次調査から予定掘削深度で遺構部分にあたると想定された。しかし、実際には攪乱がおよんでおり、遺構の確認された範囲は、枡部分と５次調査区の間1.3mの間だけであった。その遺構も、Ⅰ層直下のⅣ層上面での検出で、小穴と土壙の一端ないしは柱穴である。

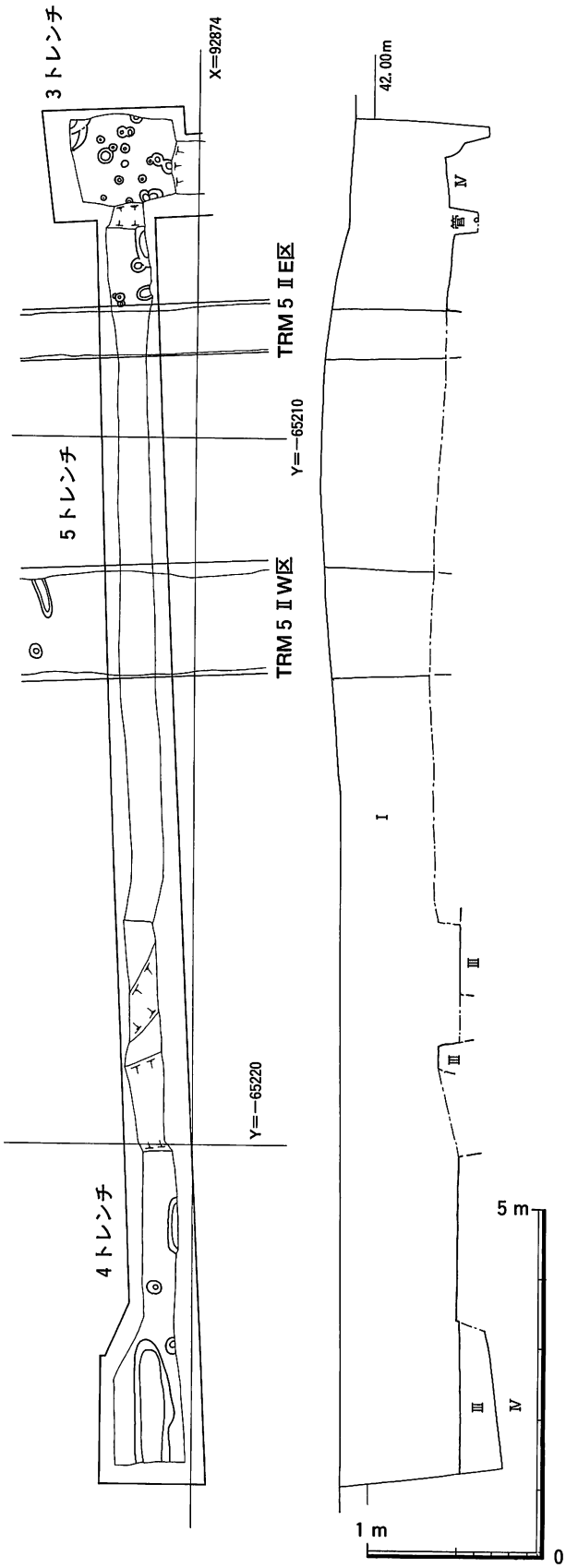
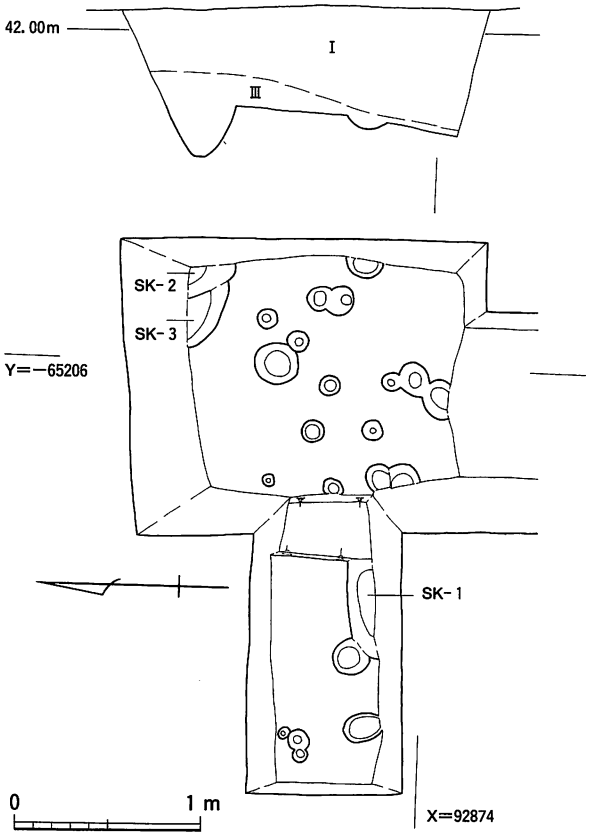


図28　99905調査３～５トレンチ平面図、土層断面図
（縮 尺 1/100、1/40）



［３トレンチ］
SK-１：暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘質土。暗褐色（10YR3/4）粘質土の径３～６cmのレンズ状ブロックを少量含む。径３～５mmの角礫が多く混じる。下部にいくにつれて粘性が強くなる。
SK-２：黒褐色（10YR3/2）粘質土。褐色（10YR4/4）シルトの粒状ブロックを少量含む。
SK-３：SK-２と同色だが、わずかに淡い土色である。

図29　99905調査３トレンチ平面図、土層断面図
（縮尺 1/40）

検出面は、高い北側で地表下50cm、南側で65cmほどである。

［４トレンチ］（図27・28・30、写真51・52）

３トレンチと南北道路を挟んだ西側の枡部分と管路部分である。道路面下50cm前後でⅡ層があらわれ、70cm前後でⅢ層を検出した。Ⅲ層の上部10cmほどは、砂粒を含んだ暗褐色粘質土であるが、下部は砂粒を含まない黒褐色から黒色の粘質土である。同様の土層は、樽味５次調査でも確認されており、上層が中世、下層が弥生時代～古墳時代の堆積と考えられる。上層を基本的に埋土とする遺構としてはSD-６などがある。

なお、Ⅲ層下層については、管路部分は既に埋設に必要な深度に達しており、さらに掘削が必要な枡部分だけを掘り下げた。結果、道路面から95cmでⅣ層に達し、上面で小穴・柱穴数基を検出した。

写真48　99905調査１トレンチ（西から）

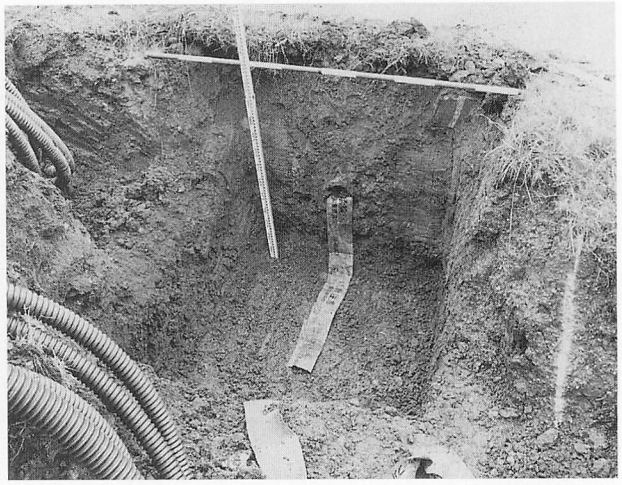


写真49　99905調査２トレンチ（北から）

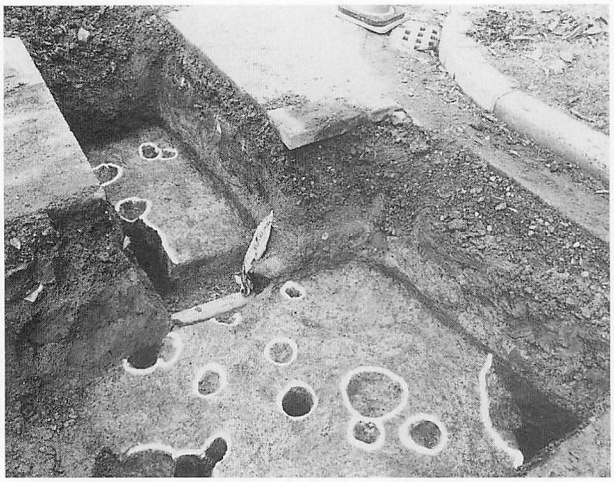


写真50　99905調査３トレンチ（東から）

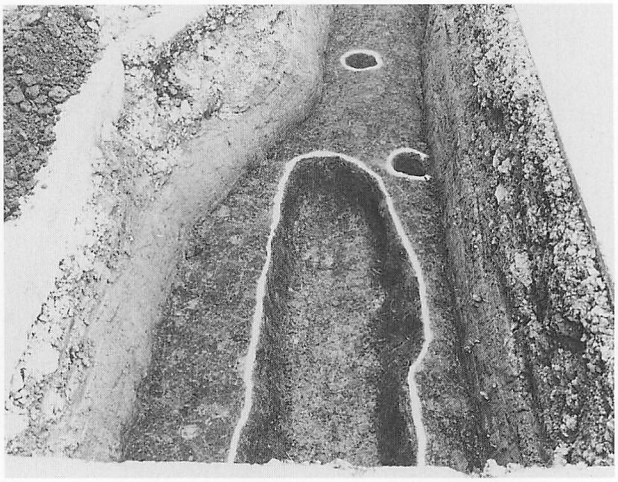


写真51　99905調査４トレンチ西半部の
中世遺構の完掘状況（西から）

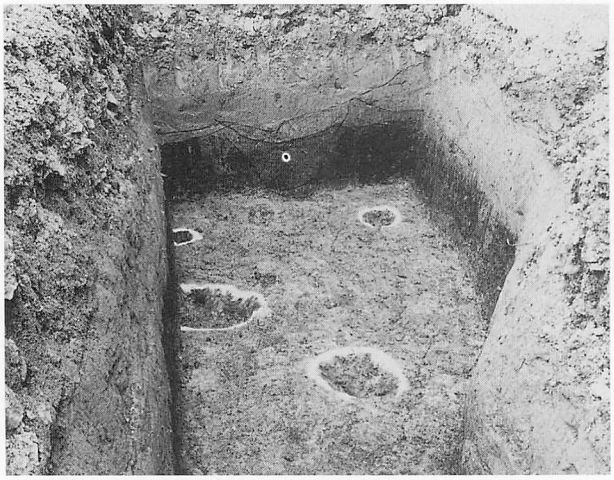


写真52　99905調査４トレンチ西半部の完掘状況
（東から）

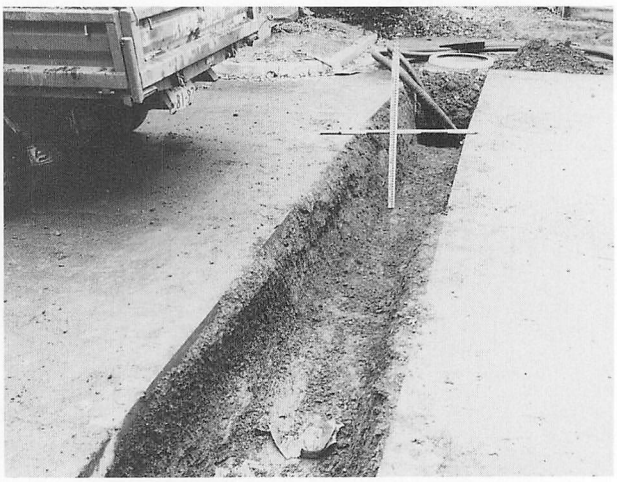
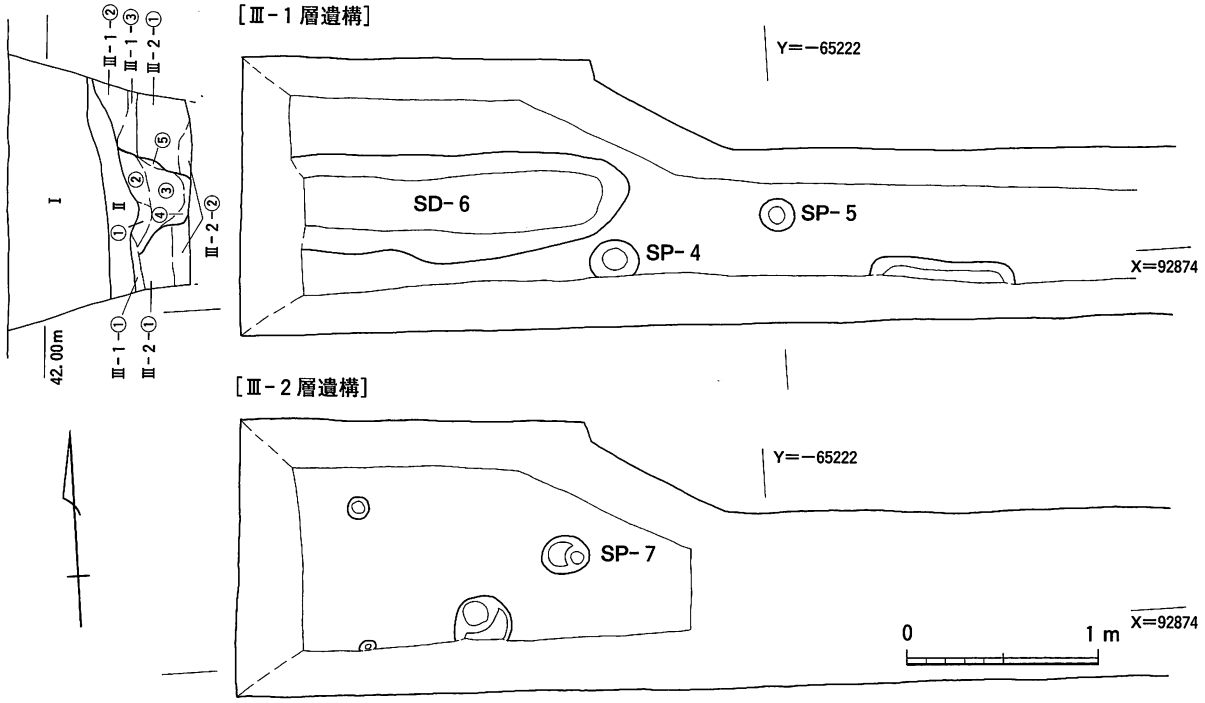


写真53　99905調査５トレンチ（西から）



[4トレンチ]
Ⅰ：表土
Ⅱ：褐灰色（10YR4/1）砂質土。
Ⅲ-1-①：暗褐色（10YR3/3）粘質土。砂っぽい。やや褐色を帯びる。
Ⅲ-1-②：灰黄褐色（10YR4/2）粘質土。
Ⅲ-1-③：暗褐色（10YR3/3）粘質土。径5㎜の角礫が少量混じる。
Ⅲ-2-①：黒色（10YR2/1）粘質土。粘性が強く、砂粒は含まない。
Ⅲ-2-②：黒褐色（10YR2/2）粘質土。粘性が強い。

[SD-6]
①：褐灰色（10YR4/1）粘質土。やや砂っぽい。
②：褐色（10YR4/4）粘質土。やや砂っぽい。
③：黒褐色（10YR2/2）砂質土。砂っぽく粘性は弱い。土器片が出土。
④：黒褐色（10YR2/2）砂質土。③とほぼ同じ。土器片が出土。
⑤：暗褐色（10YR3/3）粘質土。粘性は強い。

図30　99905調査4トレンチ平面図、土層断面図（縮尺　1/40）

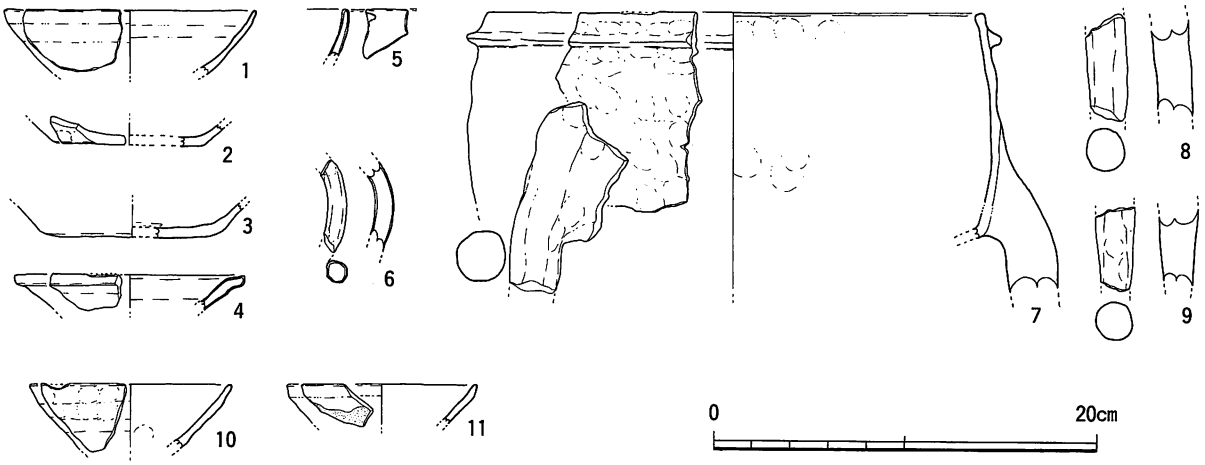


図31　99905調査出土遺物実測図1（縮尺　1/4）

[5トレンチ]（図25・26・30、写真53）

3-4トレンチ間の南北道路部分で、車両通行に支障をきたすため、この部分のみ休日に調査を行った。管埋設に必要な深度（道路面下45cm）まで重機掘削を行ったが、トレンチ内全域において攪乱を受けていた。

（2）　出土遺物（図31・32）

今回の調査では、3・4トレンチから遺物が出土している。図31-1～8は4トレンチⅢ層出土。1～3は土師質土器の坏または埦である。底部片には共通して回転糸切り痕が残る。7・8は三足付き羽釜である。時期は口縁部とタガ部の形状的な特徴から13世紀

後半～14世紀に位置付けられる。9は4トレンチSP-7出土の三足付き羽釜の脚部破片である。10・11は3トレンチSK-2出土の土師質土器の坏または碗である。ともに胴部は強く外傾し、口縁部は上方へ立ち上がる。図32は、3トレンチSK-1出土の砥石の破片。二次的な火熱を受けている。

3　調査後の対応

以降の慎重工事を依頼して調査を終えた。（吉田）

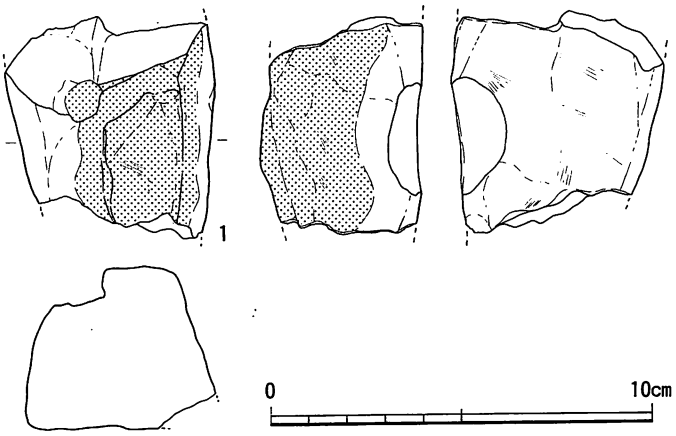


図32　99905調査出土遺物実測図2（縮尺　1/2）

99906　農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事に伴う立会調査（4期）

調査地点　松山市樽味3丁目5番7号
　　樽味団地（図2）
調査面積　2.5㎡
調査期間　2000年1月28日
調査の種別　立会調査
調査担当　吉田広
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　施設課長発事務連絡
　　（平成11年9月9日付）

1　調査にいたる経緯

先の1～3期工事に引き続き、ガス管本管の一般道路下から高等学校構内への引き込みが計画された。これに伴い、既設水路・上水道管などのため、掘削深度を下げることが必要となり、埋蔵文化財に対する影響が考えられ、立会調査を実施することとなった。

2　調査の記録

現地表下85cmまでは大きく攪乱を受けた表土であるが、以下は同じ表土ながら、Ⅱ層の褐灰色砂質シルトとⅣ層の褐色シルトの1～5cm大の円形または不整形な塊が細かく斑状に混在する。掘削深度の地表下140cmまで続く。途中、人頭大の川原石が多く混在し、40cm四方に加工した花崗岩石材が現在の道路にほぼ並行して検出された。以上のことから、この地点が大学建設前の農地の地境に相当し、現行道路の前身とでも言うべき道路面であったことが窺える。

3　調査後の対応

以降の慎重工事を依頼して調査を終えた。

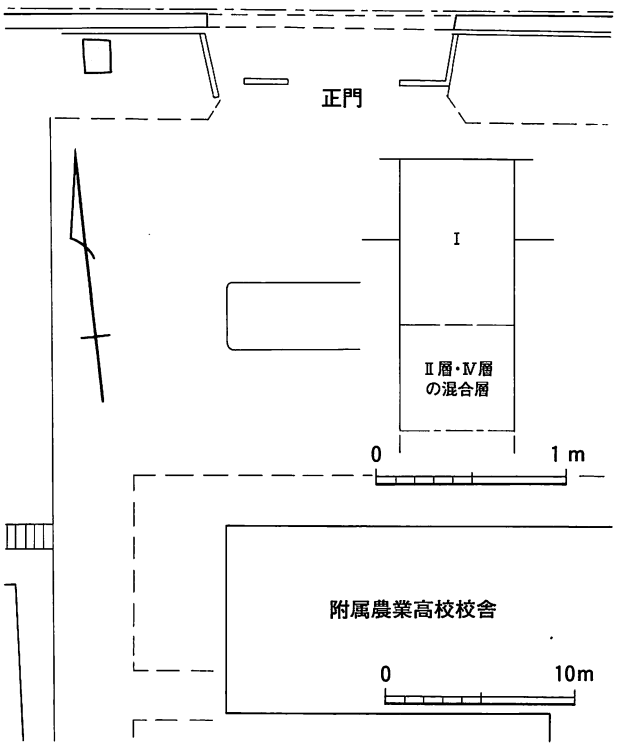


図33　99906調査地点位置図、土層柱状図
（縮尺　1/400、1/40）

4　99903～99906調査の問題点

今回の調査で、4期にわたった農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事に伴う立会調査を終了することができた。ここでは、今後のためにも、調査にあたっての問題点を整理しておきたい。

今回の調査の原因は、1997年度に発掘調査を行った新営校舎に接続する電気・機械設備工事である。それ以前に、1996年度に試掘を、そして今回の立会を要するような管路部分のデータを得るための試掘調査も1997年度の発掘調査前に10ヶ所にわたって行っており、その結果は施設部に逐次報告している。

ところが、本体工事の進捗に伴って、数多くの設計変更が生じ、4期にわたる立会調査が必要となってしまった。建設工事では設計変更があるとは言え、それに伴う発掘調査を最小限にすることで、埋蔵文化財の保存・保護に努めるべきと考える。そのためには、建物建設の設計においては、関連する配管路を含めた検討を行い、施設部と埋蔵文化財調査室での協議を進める必要がある。　（吉田）

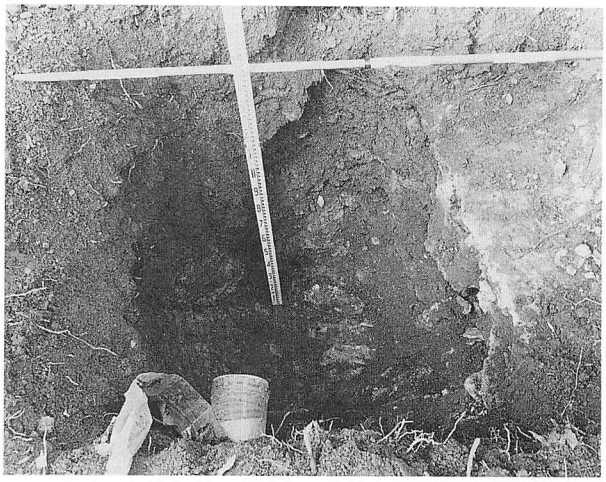


写真54　99906調査土層断面（東から）

99907 「大正天皇お手植えの松」移植に伴う立会調査

調査地点　松山市文京町3番
　　城北団地（図1）
調査面積　20㎡
調査期間　2000年1月25日
調査の種別　立会調査
調査担当　田崎博之・吉田広
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　工学部事務長発事務連絡
　　（平成12年1月7日付）

1　調査にいたる経緯

工学部本館と工学部機械実習工場棟の間に、サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー建物が建設されるのに伴い、緑地帯に植えられた「大正天皇お手植えの松」を移植する計画がたてられた。移植作業では、周囲を幅1mの環状に掘削することが必要で、松の樹根しだいでは埋蔵文化財に影響をおよぼすことが考えられ、立会調査を実施することとなった。

調査を開始すると、松の樹根が予想以上に深くのびており、部分的にⅢ・Ⅳ層を破壊せざるをえないことになり、その範囲を最小限にとどめることを協議した。また、移植先については、施設部企画課と協議の結果、工学部1号館北側棟建設に伴う発掘調査（文京遺跡14次調査）区域内に移植することになり、慎重工事を依頼し、調査は行わなかった。

2　調査の記録（図34・35）

調査地点北半部では、表土下67cmでⅡ層の団地造成以前の旧水田層が、地表下1.1mでⅢ層の黒褐色シルト層があらわれた。Ⅲ層の厚さは10cm前後である。Ⅲ層の下層では、地表下1.2mでⅣ層の黄褐色シルト層を確認できた（図34）。

出土遺物には、Ⅲ層から出土した弥生土器の甕の胴部破片、高坏の脚部破片（図35-1）、坏蓋の天井部破片（図35-2）がある。Ⅳ層からは遺物は出土していない。

また、調査地点南半部は、近代以降の攪乱部分にあたり、すでにⅢ層とⅣ層上部は破壊されていた。攪乱土中からは、近代以降の白磁瓶（図35-3）、弥生土器や古墳時代後期の土師器の小片が5～10片出土している。

3　調査後の対応

慎重工事を依頼して調査を終了。　（吉田）

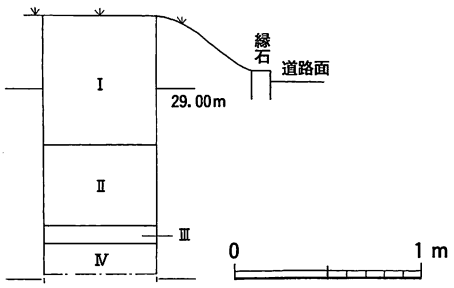


図34　99907調査土層柱状図（縮尺　1/40）

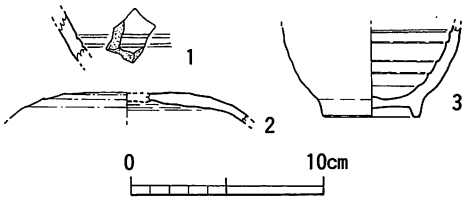


図35　99907調査出土遺物実測図（縮尺　1/4）

99908　理工学部等総合実験棟新営電気設備工事（その２）に伴う立会調査

調査地点　松山市文京町３番
　　城北団地（図１）
調査面積　８㎡
調査期間　2000年２月１日
調査の種別　立会調査
調査担当　田崎博之
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　施設部施設課長発事務連絡
　　（平成11年12月24日付）

１　調査にいたる経緯

工学部本館の南側にある講義棟の東側に電線管路を敷設する計画が、埋蔵文化財調査室に提示された。できるだけ既設の電線管路やハンドホールを利用することを、施設部とともに協議した。その結果、講義棟西側では既設の管路内に電線管を埋設することになったが、工学部本館と講義棟間部分には既設管路がなく、この部分のみを立会形式で調査することとなった。

２　調査の記録

（１）　層位

調査地点は、工学部本館と講義棟間の通路の東側に位置する。アスファルト舗装を剥いで客土である表土層のⅠ層を掘り下げると、地表下25～30cmで、小礫を多く含む灰褐色砂質シルト層があらわれた。部分的に薄い帯状のマンガンの沈着部分が観察でき、団地造成以前の水田層のⅡ層と判断した。さらに下層の地表下45～50cmでは、Ⅲ層である黒褐色シルト層を、地表下58～60cmでⅣ層を確認した。Ⅳ層の最上部は、Ⅲ層から漸移的に変化する淡い褐色を呈するシルト層である。

（２）　遺構と遺物

Ⅳ層上面で遺構検出に努めた。工学部本館建物際と既設ハンドホール周辺は溝状の攪乱部で乱されていたが、管路部分では竪穴式住居跡１、土壙２、小穴15を検出できた。ただし、工事に伴う掘削深度が、地表下60cmであり、これ以上遺構が破壊されることがないので、調査は遺構の上面の確認でとどめた。

検出した遺構には、１～18までの連番の遺構番号を付し、遺構の種別を表す略号を冠した。埋土の特徴を観察すると、黒褐色シルトを埋土とする遺構(SC-１、SK-３・４、SP-５～11）と、灰色みを帯びた褐色シルト遺構（SP-２・12～18）の２者がある。出土遺物と既往の調査成果から、黒褐色シルトを埋土とする遺構は弥生時代～古墳時代、灰色みを帯びた褐色シルトの遺構は古代～中世のものと考えられる。

［竪穴式住居跡］

SC-１　一辺3.5mほどの隅丸方形の竪穴式住居跡の一部と考えた。埋土は黒褐色シルトである。細片化しているために図示できないが、Ⅲ層部分から弥生時代中期の甕や壺の胴部片が出土している。

［土壙］

SK-３　SK-４に切られる土壙で、黒褐色シルトの埋土をもつ。

SK-４　SK-３を切る土壙で、埋土部分が崩落したため、この土壙だけは完掘した。深さ30cm前後を測り、埋土は黒褐色シルトである。

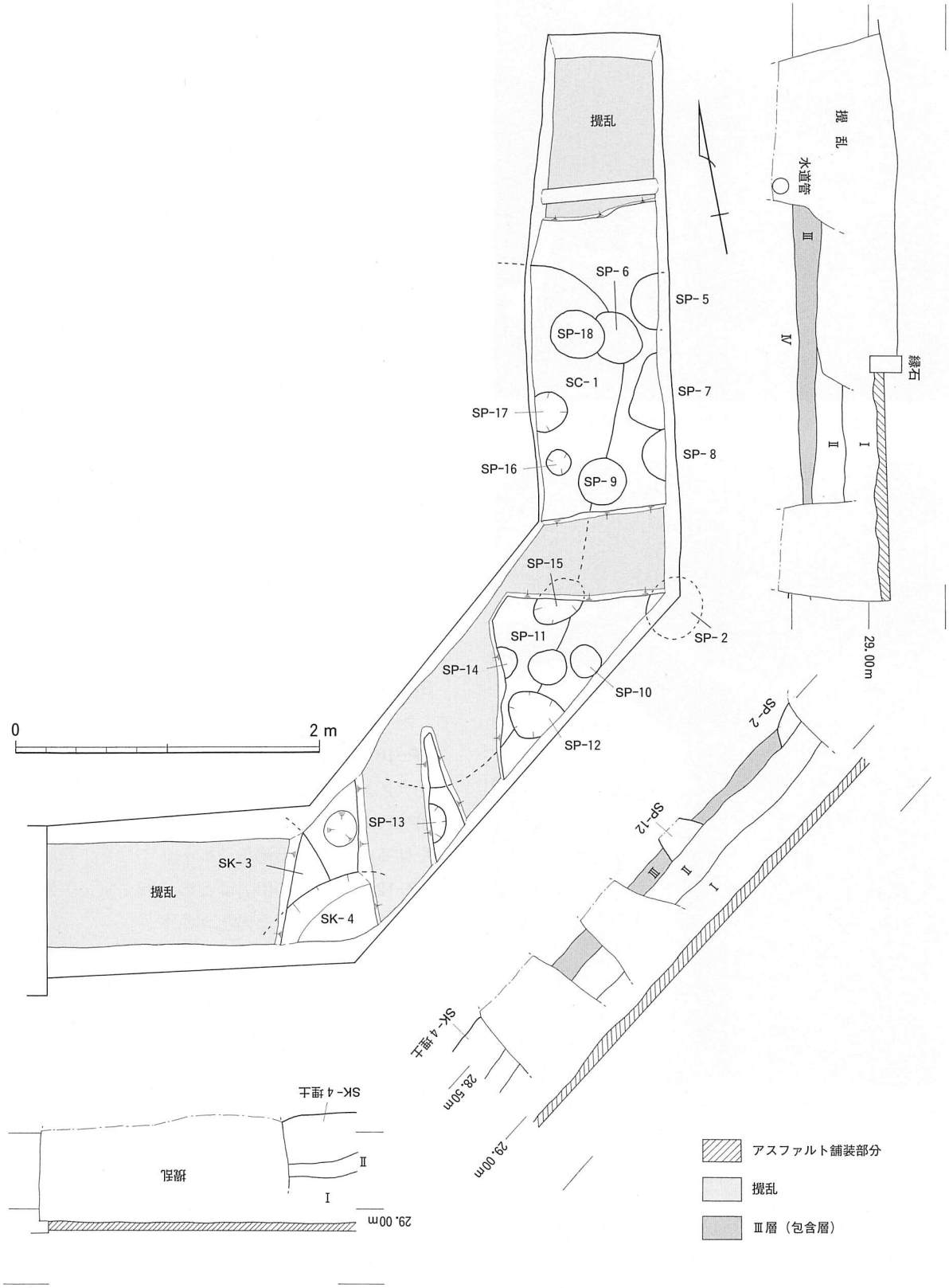


図36　99908調査遺構配置図、土層断面図（縮尺 1/40）

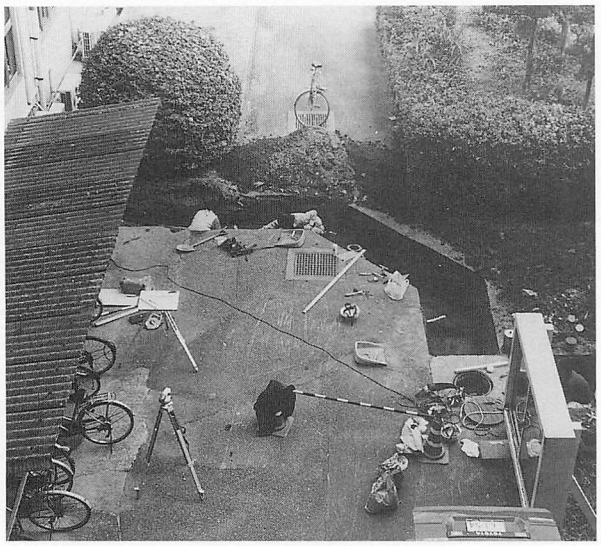


写真55　99908調査状況（西から）

写真56　99908調査北半部の遺構検出状況（北から）

［小穴］

SP－2　直径35cmほどの円形小穴で、攪乱壙の壁面で深さ10cmほどを確認できた。大部分が調査区外にのびる。埋土は灰色みを帯びた褐色シルトで、土師器の鍋口縁部片が出土した（図37－4）。内湾する口縁部をもち、胴部外面は指頭による乱雑にナデた後に部分的に刷毛目調整を施す。口縁部周辺と内面は横ナデ調整。

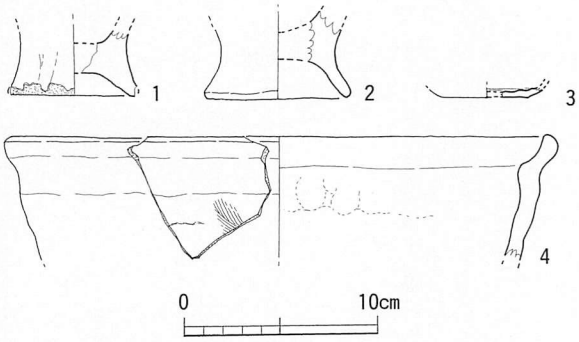


図37　99908調査出土遺物実測図（縮尺　1／4）

SP－5　直径40cm前後と考えられる円形の小穴。埋土は黒褐色シルト。

SP－6　直径30～35cmの不整円形の小穴で、SC－1を切り、SP－18に切られる。埋土は黒褐色シルト。

SP－7　長辺50cm前後と考えられる隅丸方形の小穴で、埋土は黒褐色シルト。

SP－8　直径35cm前後と考えられる円形の小穴。SP－6を切る。埋土は黒褐色シルト。

SP－9　直径30cmほどの円形の小穴。SC－1を切る。埋土は黒褐色シルト。

SP－10　直径20cmほどの不整円形の小穴。埋土は小指先大の炭化物片が多く混じる黒褐色シルト。

SP－11　直径20～25cmほどの不整円形の小穴。SC－1を切る。埋土は黒褐色シルト。

SP－12　直径30×40cmほどの小穴。SC－1を切る。埋土は灰色みをおびた褐色シルト。

SP－13　直径25cmほどの円形の小穴。大半を攪乱で破壊されている。埋土は灰色みを帯びた褐色シルト。

SP－14　直径20cmほどの円形の小穴。SC－1を切る。埋土は灰色みを帯びた褐色シルト。

SP－15　直径25×35cmほどと考えられる長円形の小穴。SC－1を切る。埋土は灰色みを帯びた褐色シルト。

SP－16　直径15cm前後の円形の小穴。SC－1を切る。埋土は灰色みを帯びた褐色シルト。

SP－17　直径30cmほどの円形の小穴で、SC－1を切る。埋土は灰色みを帯びた褐色シルト。

SP－18　直径30cmほどの円形の小穴で、SC－1とSP－6を切る。埋土は灰色みを帯びた褐色シルト。

この他、攪乱部分から、弥生時代中期の甕の底部や胴部片、中世の土師器皿の底部片、龍泉窯系青磁の碗

もしくは皿の口縁部破片、黒色土器碗の胴部片が出土している（図37-１～３）。１・２は、弥生時代中期後葉の甕の底部片、３は中世の糸切り底の土師器皿である。

3　調査後の対応

施設部と工事担当者とともに、Ⅳ層検出面以下を掘削しないことを確認し、慎重工事を依頼して調査を終了した。（田崎）

99909　総合情報処理センター新営電気設備工事に伴う立会調査

調査地点　松山市文京町３番
　　城北団地（図１）
調査面積　８㎡
調査期間　2000年２月８日
調査の種別　立会調査
調査担当　田崎博之・吉田広
依頼文書　施設部長発事務連絡
　　（平成11年８月５日付）

1　調査にいたる経緯

総合情報処理センター新営工事に伴って外灯設備が新設される計画がたてられたが、埋蔵文化財調査室に連絡がないまま、工事が開始された。施設部と埋蔵文化財調査室で行った事前の協議で工法変更などが図られた箇所以外の４ヶ所について、改めて調査が必要と判断し、立会調査を実施することとなった。

2　調査の記録

調査地点は、外灯基礎部分４ヶ所で、南から順に１～４トレンチとした。

［１トレンチ］（図１）

総合情報処理センターへの道路取り付き部分の南側に新設される外灯基礎部分である。埋蔵文化財に対する判断の前に工事が着手されており、既に外灯基礎・支柱が設置されていた。設置にあたっては、地表下80㎝まで掘削を行ったという。調査では、その位置を確認したにとどまる。

［２トレンチ］（図１）

１トレンチから北側約30mに位置する。このトレンチも１トレンチ同様、地表下80㎝まで掘削したとされる外灯基礎が設置されており、調査では、その位置とを確認したのみである。

［３トレンチ］（図１、写真57）

２トレンチから、さらに30mほど北側に位置する。地表下80㎝までの掘削を終え、砕石が敷かれて基礎の型枠が設置されていた。調査では、これらを除いて現状の土層の確認を行った。その結果、掘削深度では表土層にとどまっていることが確認できた。

［４トレンチ］（図１、写真58）

３トレンチから30mほど北側の、テニスコート東入

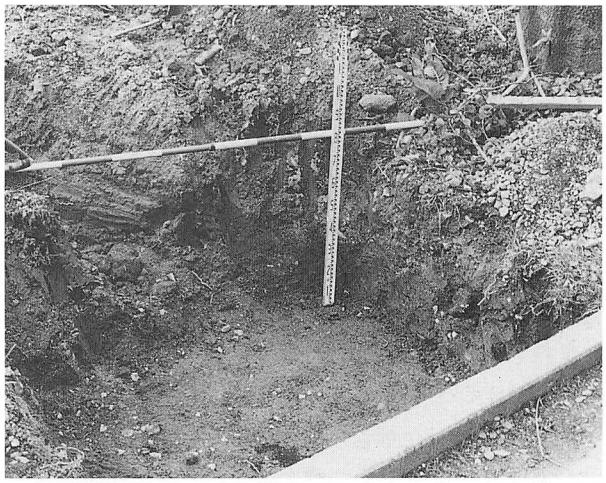


写真57　99909調査３トレンチ

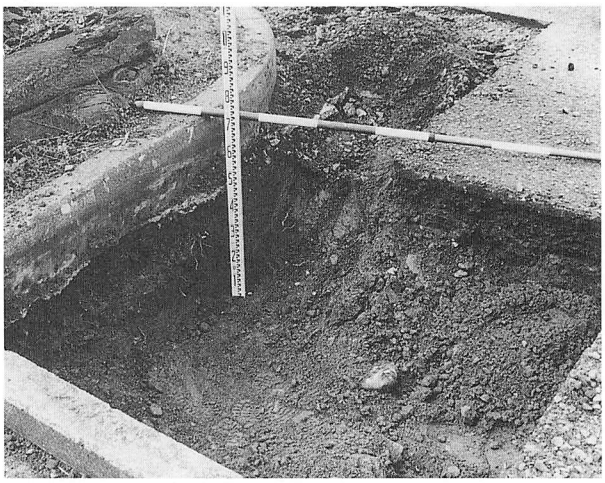


写真58　99909調査４トレンチ

口付近に位置する。設置位置の確認を行うとともに、重機による掘削から立会い、掘削の根切り面は表土層の中におさまることを確認した。

なお、基礎より浅い3－4トレンチ間の管路部分についても、表土層にとどまっていることを確認した。

3　調査後の対応と問題点

調査は、慎重工事を依頼して終えた。しかし、今回の外灯設備工事は埋蔵文化財調査室に連絡のないまま行われていたもので、これに対応するため急遽調査を実施した。このようなことが生じた原因は、施設部と埋蔵文化財調査室との緊密な連絡体制が欠如していたためである。今後、こうした体制を再整備する必要がある。　（吉田）

99910　愛媛大学サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー（S. B. B. L.）新営工事に伴う調査（文京遺跡20次調査）

調査地点　松山市文京町3番
　　城北団地（図1）
調査面積　588㎡
調査期間　2000年2月14日～6月20日
調査の種別　全面調査
調査担当　吉田広・三吉秀充
依頼文書　工学部事務長発事務連絡
　　（平成11年12月15日付）

1　調査にいたる経緯

愛媛大学では、地域共同研究センターの東側に隣接して、サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー建物新営が計画された。地域共同研究センター新営にあたっては文京遺跡13次調査として全面調査を行い、相当数の遺構・遺物が出土している。したがって、その東隣の今回の新営地点も、事前に全面調査を行うこととなった。

2　調査の概要

20次調査地点は、東から西へと緩やかに傾斜する微高地上に位置し、旧地形が高くなる東半分では、地表下約50㎝で地山面に到達する。そのため、遺構・遺物とも東よりでとりわけ少ない。以下、時代ごとに検出遺構・出土遺物を概観する。

（1）　近世～近現代の遺構と遺物

（図38、写真59・61）

近現代の遺構としては、旧建物基礎の他、練兵場時代の演習用塹壕がある。青銅製銃弾・薬夾、軍刀用吊り金具が出土している。

近世では、集石土壙5基がある。いずれも人頭大ほどの塊石の詰まった土壙（SX-13～15・19）である。この時期の出土遺物には、幕末期の柄鏡破片や寛永通宝、墓石などがある。

（2）　中世の遺構と遺物

（図38、写真59・62～64）

中世では、調査区南端に接して東から西へと流れる幅6mほどの水路群（SD-1～4）を検出した。いずれも、ほぼ東西方向の直線的な流れで、人工水路の可能性が高い。埋土からは、弥生時代以降の遺物、とりわけ中世の土師器・瓦器・陶磁器・獣骨等が出土している。なお、この水路に北ないし北東から合流する溝2条も確認されている（SD-5・6）。この他、若干の土壙・柱穴などが検出されている。

（3）　古墳時代の遺構と遺物

（図39、写真60・65～68）

古墳時代の遺構埋土は、弥生時代の遺構と同じ黒褐色砂質土でありながら、1～3㎜大の砂粒を多く含みしまりがあり、容易に見分けることができる。こうした埋土をもつ遺構には、竪穴式住居跡5棟と柱穴30基前後があり、調査区内でも西よりに偏っている。

竪穴式住居跡5棟のうち2棟は、調査区北半部での部分的な確認にとどまる。残る2棟がSC-27とSC-28である。SC-27は、方形の竪穴式住居跡で、周辺への広がりから、4×3m、2本柱穴構造の竪穴式住居跡と推定される。SC-28は、C字状に残る周溝と主柱穴1基を確認した竪穴式住居跡で、一辺4m四方、柱間2m弱の4本柱穴構造が考えられる。これら住居跡はいずれも、古墳時代後期である。

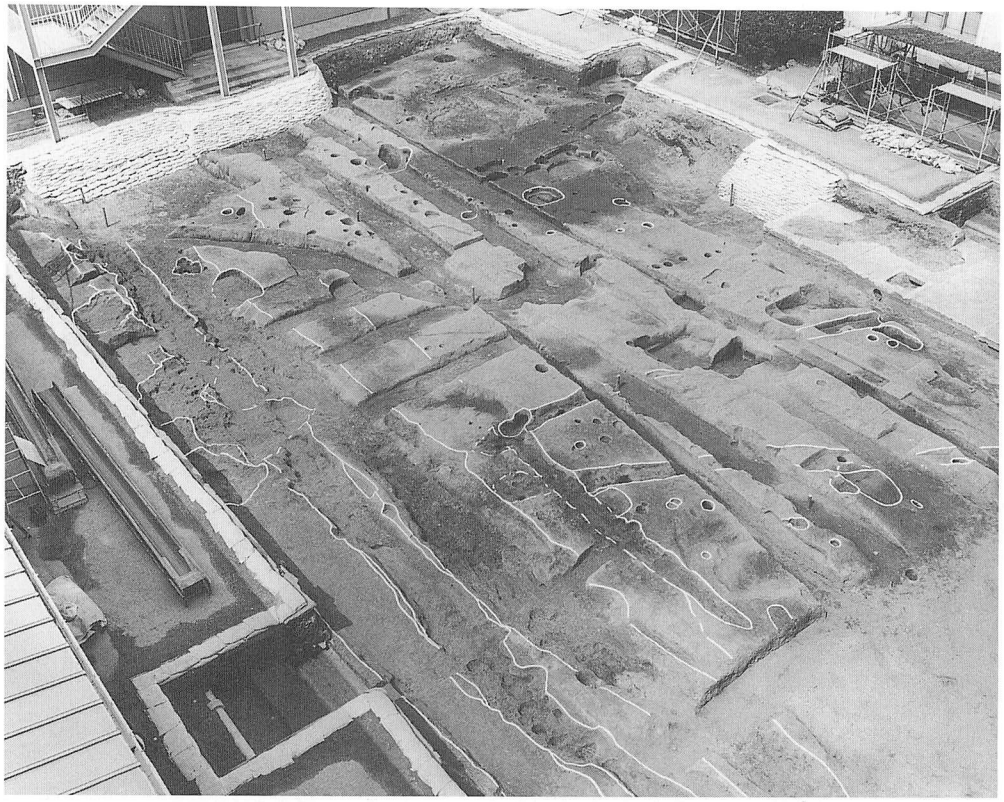


写真59　99910調査（文京遺跡20次）中世～近世遺構の完掘状況（南東から）

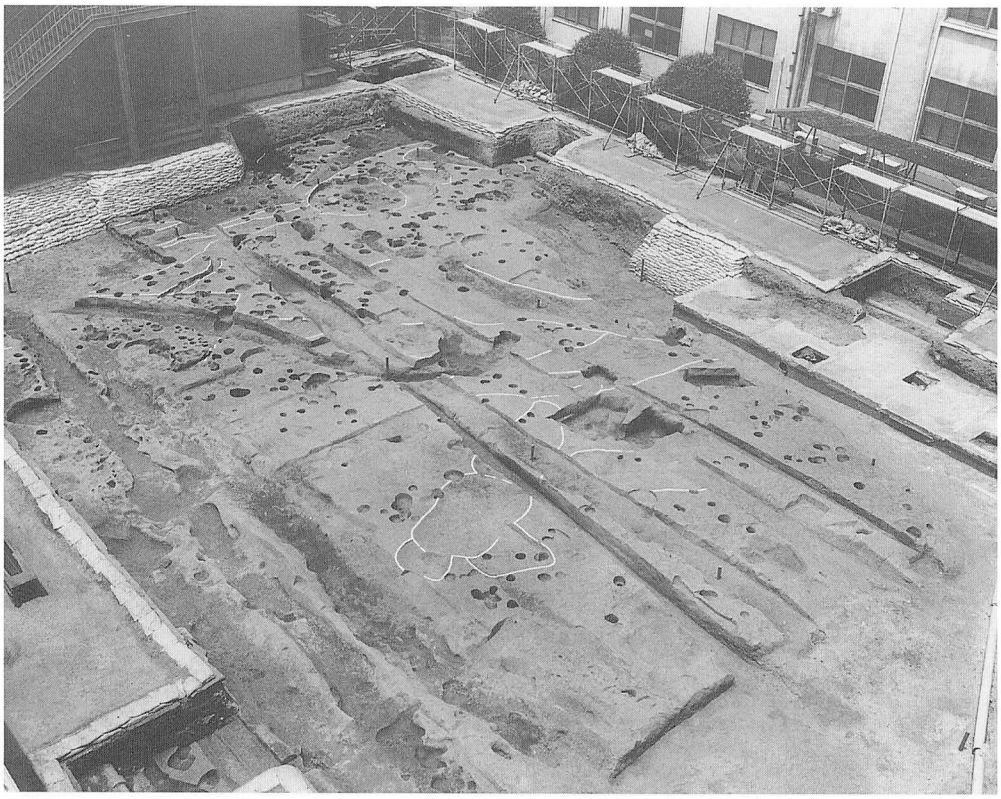


写真60　99910調査（文京遺跡20次）弥生時代～古墳時代遺構の完掘状況（南東から）

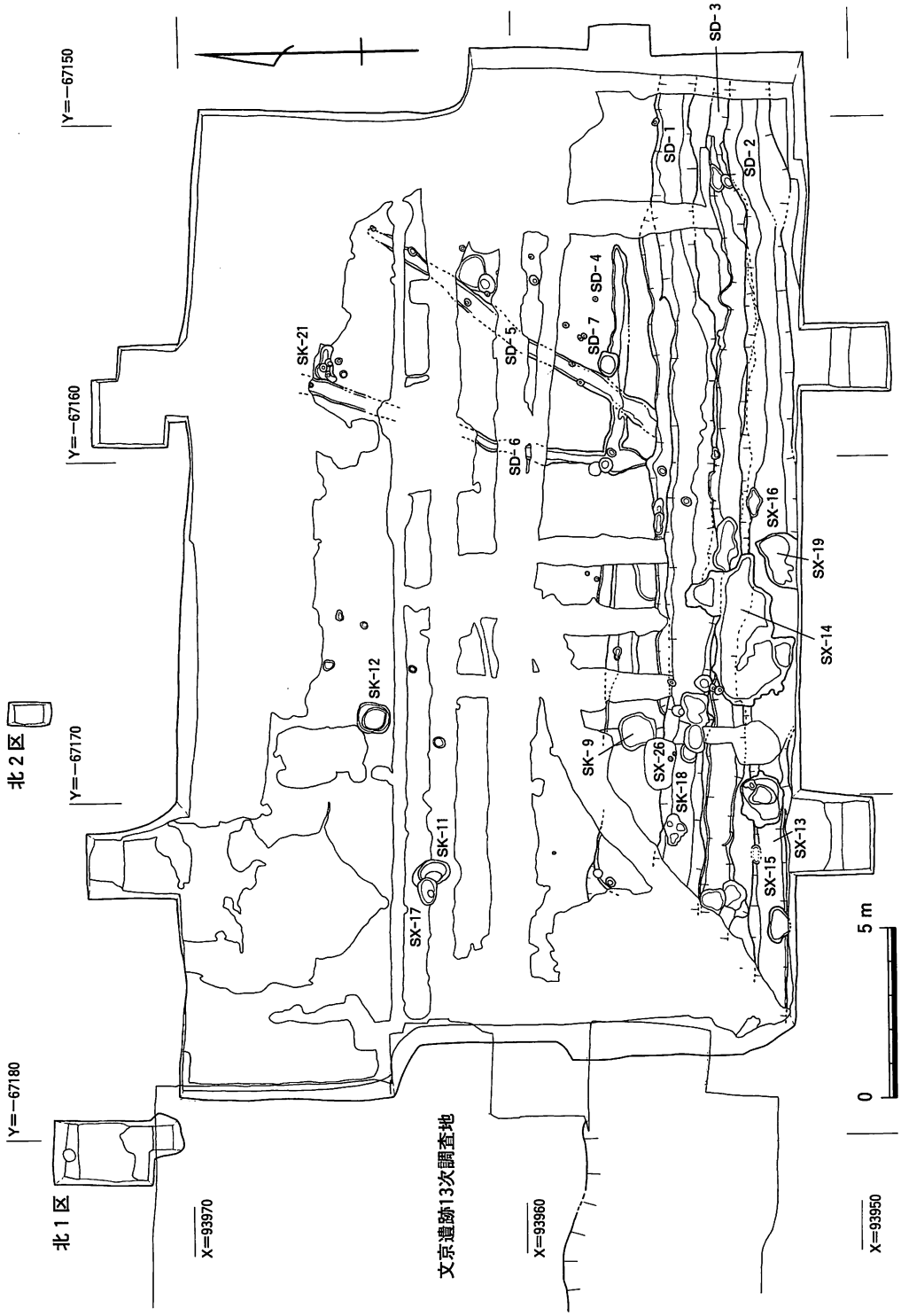


図38　99910調査（文京遺跡20次）中世～近世の遺構配置図（縮尺 1/200）

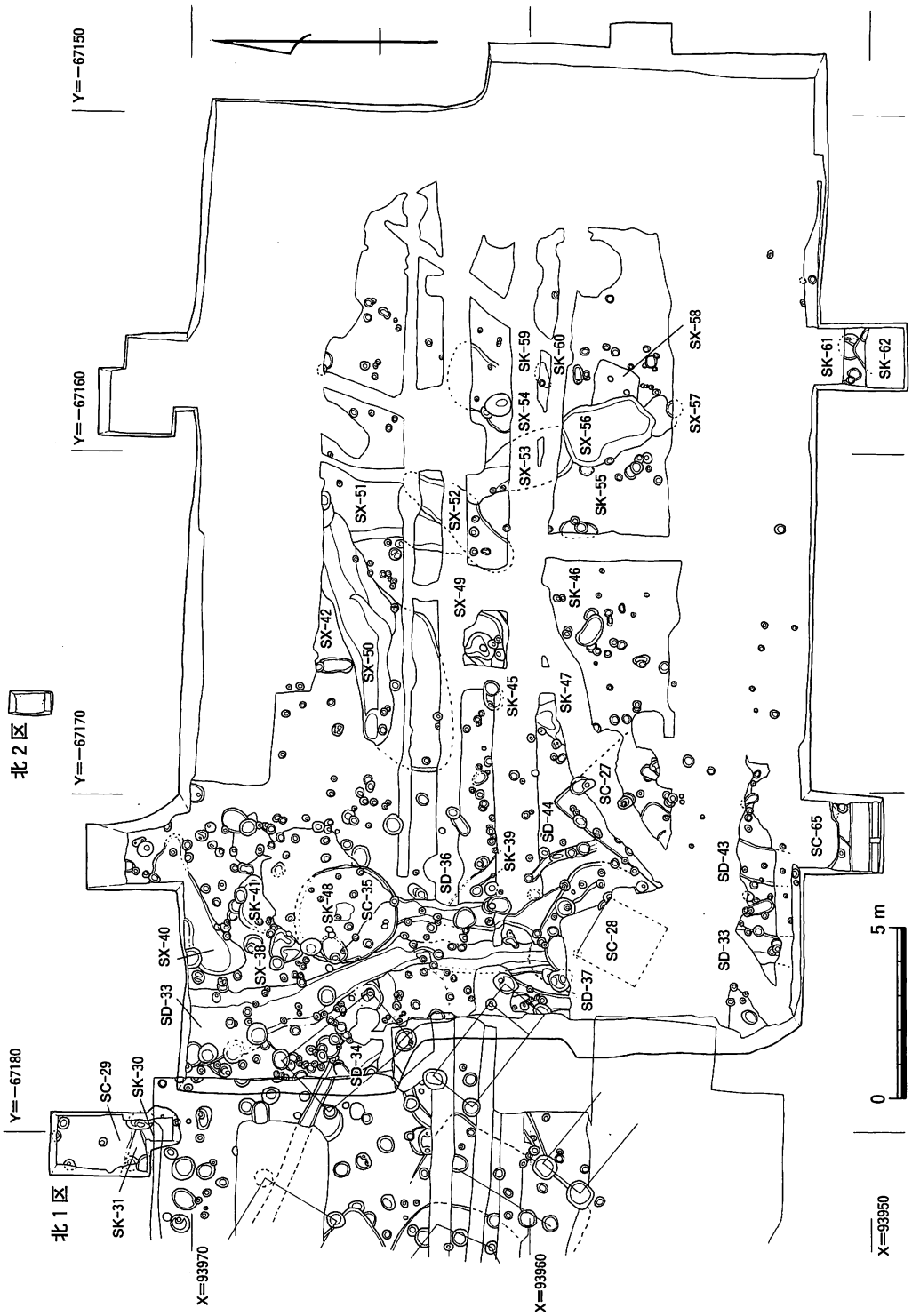


図39　99910調査（文京遺跡20次）弥生時代～古墳時代の遺構配置図（縮尺　1/200）

写真61　99910調査（文京遺跡20次）
SX-13（北から）

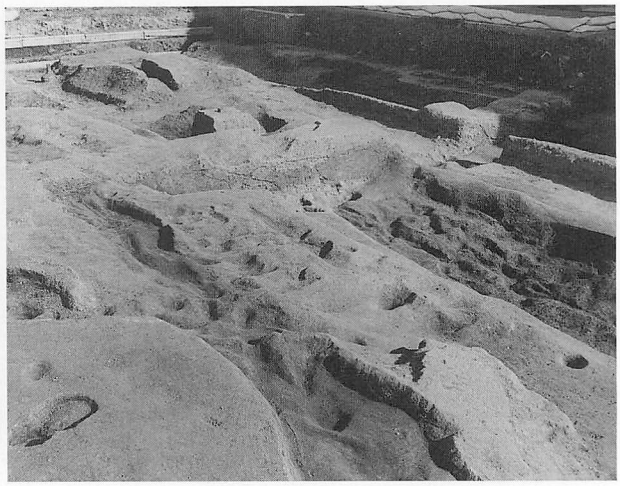


写真62　99910調査（文京遺跡20次）
SD-１～４検出状況（北西から）

写真63　99910調査（文京遺跡20次）
SD-２下層獣骨出土状況（西から）

写真64　99910調査（文京遺跡20次）
SD-１～４完掘状況（西から）

柱穴については、西側の文京遺跡13次調査で検出した柱穴との検討から、２棟以上の掘立柱建物を確認している。

特徴的な古墳時代遺物としては、包含層から大型の鉄滓や鞴の羽口など出土している。とりわけ後者は、６世紀前後の土師器（甕）と一括廃棄された状態で出土している。

（４）　弥生時代の遺構・遺物

（図39、写真60・69・70）

弥生時代の遺構埋土は、古墳時代と異なり、細かい砂質土からなる。このような遺構のほとんどは、明確な掘り込みを見出しがたい溝状や窪地状の溜まりが多い。出土遺物もほとんどない。柱穴以外の明確な遺構は、竪穴式住居跡SC-35の１棟だけである。SC-35は直径３m弱と小型の円形住居跡。北東側を先の松移植工事（調査番号：99901）に伴って破壊を受けていたが、南西側は深さ20cmほどとよく残る。埋土中に焼土・炭化物が多く混じり、床面付近ではそれらが面的に広がる。床面に置かれた台石上、あるいは床面には、屋根材の一部と思われる炭化材が放射状に検出されている。台石横には中央炉SK-48があり、その中から、炭化物・焼土に混じり、赤色顔料やサヌカイトや赤色頁岩の微細剥片などが出土している。

写真65　99910調査（文京遺跡20次）
鞴羽口出土状況（南から）

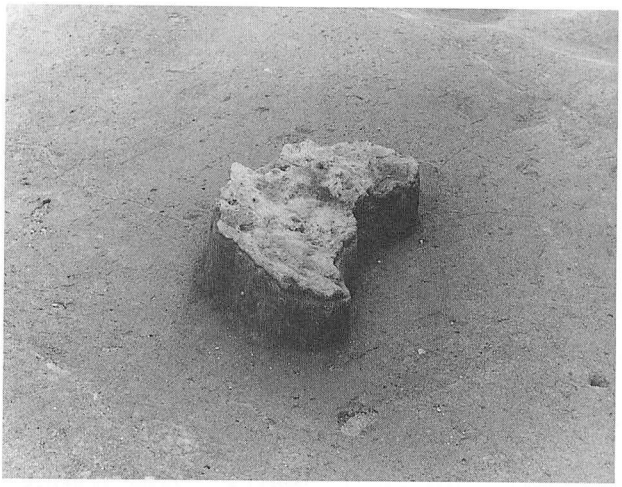


写真66　99910調査（文京遺跡20次）
SX-22（北西から）

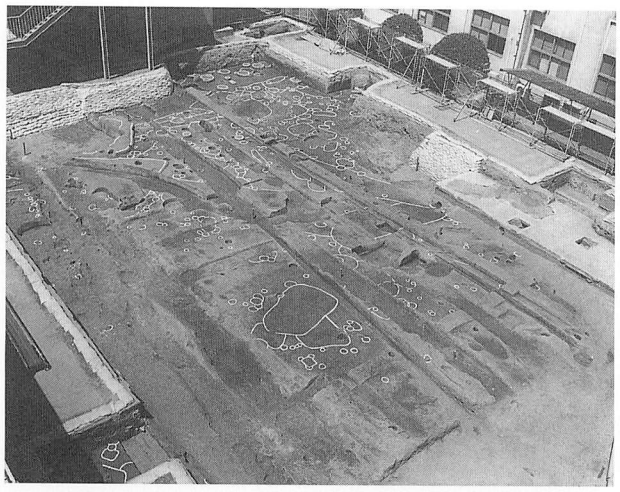


写真67　99910調査（文京遺跡20次）弥生時代～
古墳時代遺構の検出状況（南東から）

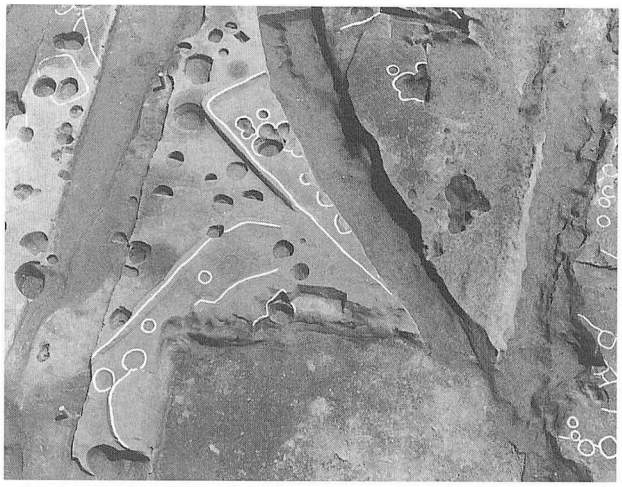


写真68　99910調査（文京遺跡20次）
SC-27・28（西から）

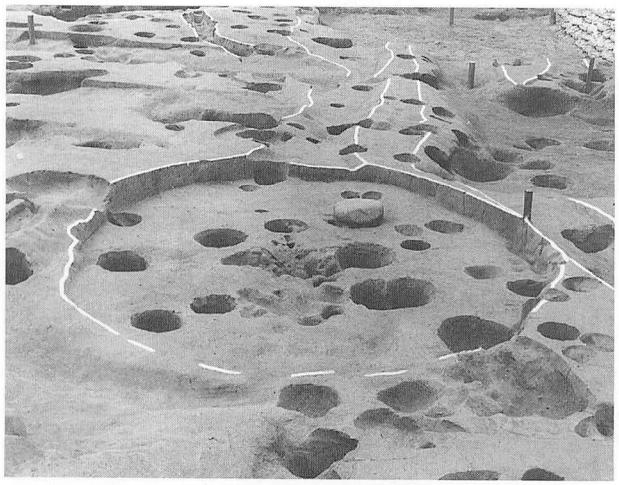


写真69　99910調査（文京遺跡20次）
SC-35（北から）

写真70　99910調査（文京遺跡20次）SC-35
焼土・炭化物出土状況（東から）

3　調査のまとめ

20次調査では、出土遺構・遺物ともに少なかったものの、特徴的な成果をあげることができた。まず、中世の土地利用に関して、18次調査で検出された水田とも関連し、中世における文京遺跡周辺の土地利用の一端を明らかにできる。また、包含層出土資料とは言え、古墳時代の鉄器生産に関する貴重な出土品を得ることもできた。今後の分析により、大型の皿状の鉄滓の性格が明らかにできようし、ほぼ全形を知りえる羽口とともに、文京遺跡の古墳時代集落像を考える上で、重要な資料である。

弥生時代では、一般住居とは明確に異なる構造・出土遺物をもつ建物跡として、工房跡と目される竪穴式住居跡SC-35が検出できた。こういった工房跡が、同時期の集住地区とは離れて、20次調査地点に位置することになり、改めて文京集落内の機能分担・計画的配置を強く肯定することになる。　（吉田）

99911　大学会館改修工事に伴う試掘調査

調査地点　松山市文京町３番
　　城北団地（図１）
調査面積　９㎡
調査期間　2000年２月16日
調査の種別　試掘調査
調査担当　田崎博之
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　施設部施設課長発事務連絡
　　（平成12年２月29日付）

1　調査にいたる経緯

城北団地の北東隅にある大学会館の改修に伴い、電気・水道・ガス管などの配管工事が行われることとなった。施設部と協議を重ねた結果、できるだけ配管を大学会館建物が建設された際の余掘り範囲に入れ、周囲の埋蔵文化財への影響を最小限にとどめることとになった。

ところが、これまで、大学会館周辺では、北側で１ヶ所（調査番号：99305）と、東側で１ヶ所（調査番号：99202-２トレンチ）の調査が行われているだけで、面的に調査を行った例はない。そのため、大学会館建物建設時の余掘り範囲は明確ではない。今回の調査では、調査可能な建物東側と北側に試掘調査を行うことで、余掘り範囲を確定することとした。

2　調査の記録

［１トレンチ］（図40・46、写真71）

１トレンチは、大学会館東側に設定した。大学会館建物と団地囲障壁の間で、大学会館建物建設に伴う余掘りの掘り込みラインを検出した。造成土であるⅠ層が地表下45㎝まで続き、その下層に層厚25～30㎝の団地造成以前の旧水田層であるⅡ層があらわれた。地表下55㎝で小礫混じりの黒褐色砂質土層があらわれる。当初、Ⅲ層と考えたが、砂礫が多く混じることや、部分的にⅡ層の褐色シルトが混じることから、Ⅱ′層とし、さらに掘り下げを進めることとした。その結果、

写真71　99911調査１トレンチ土層断面

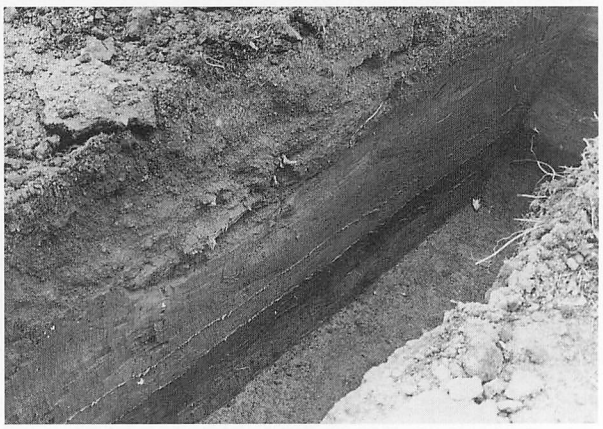


写真72　99911調査４トレンチ土層断面

地表下70cmで褐色シルトが混じらず、かつⅡ′層と比べて茶色みを帯びた黒褐色砂質土層を確認できた。この層がⅢ層にあたる。このⅢ層の上面を確認して、調査を終了することとした。出土遺物はない。

［2トレンチ］

（図40・46）

2トレンチは、大学会館北側中央の建物際に設定した。地表下75cmまで、造成土層であるⅠ層がつづく。道路側で東西方向に埋設された配管があらわれた。2トレンチ北端まで、大学会館建物建設に伴う余掘り部分が広がっていると判断し、調査を終了した。

［3トレンチ］

（図40・46）

3トレンチは、大学会館北側、道路を挟み2トレンチの北側の延長線上に設定した。地表下1.2mまで造成土が続き、Ⅳ層のにぶい黄褐色砂質土層があらわれた。Ⅰ・Ⅳ層ともに遺物は出土していない。

［4トレンチ］

（図40・46、写真72）

4トレンチは、2・3トレンチの西側、大学会館と教育学部課外活動施設の間に位置する。造成土であるⅠ層を除去すると、地表下60cm前後で、造成以前の旧水田層であるⅡ層があらわれる。Ⅰ層とⅡ層の層界部には、厚さ2～3cmの薄い明黄色細砂層が挟まる。Ⅱ層は、厚さ20～30cmを測

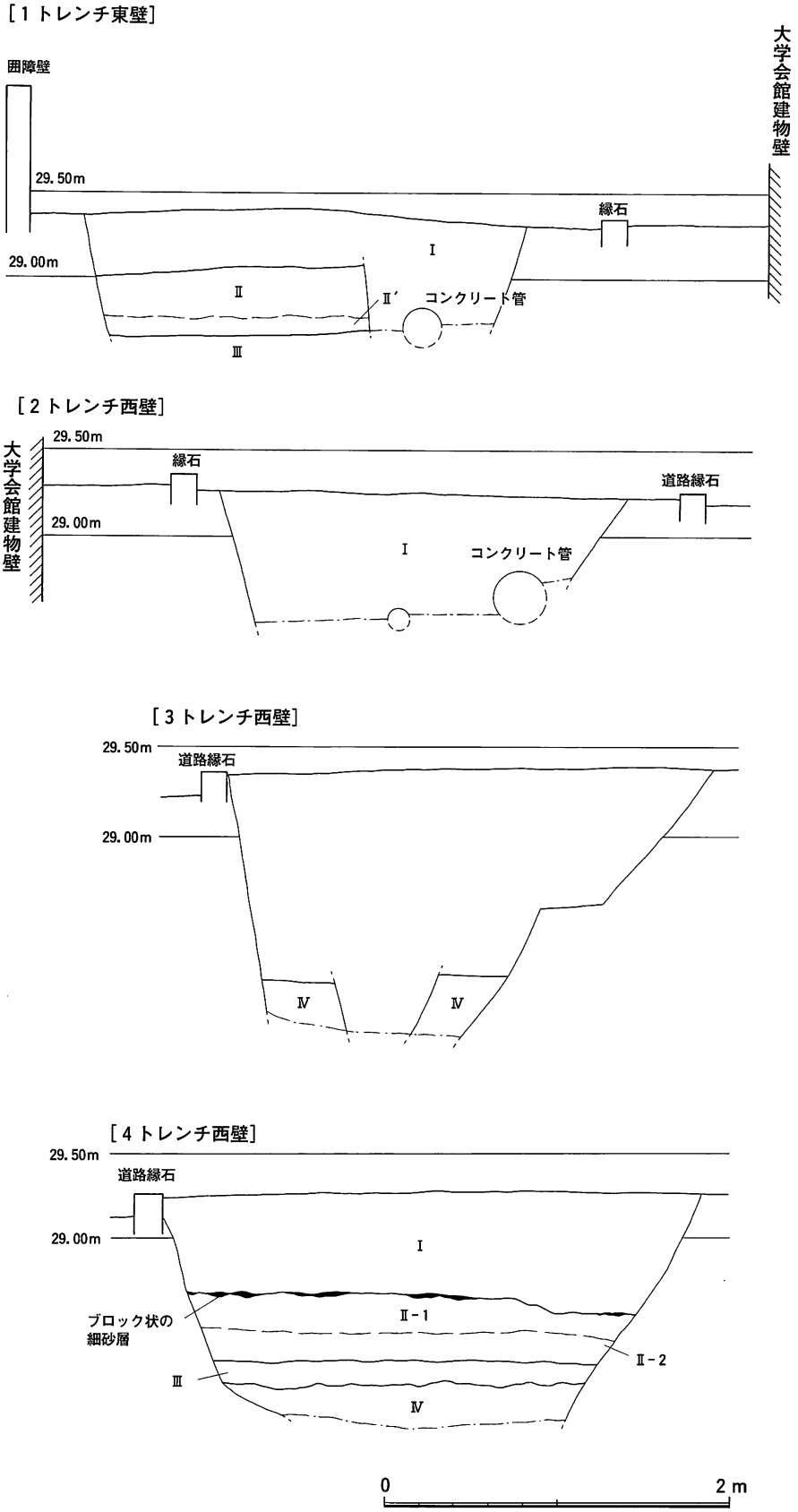


図40　99911調査1～4トレンチ土層断面図（縮尺 1/40）

り、上部の耕作土部分にあたる灰黄褐色粘質土層（Ⅱ－１層）と、下部の床土部分にあたるにぶい黄褐色粘質土層（Ⅱ－２層）に分層できる。Ⅱ層下では、地表下70cm前後でⅢ層があらわれた。この地点のⅢ層は、粘性が強い黒褐色粘質土で、小石や小礫が混じる。層厚は12～15cm。さらに下層の地表下1.1mで黄褐色砂質土層を検出した。Ⅳ層である。Ⅲ層からⅣ層への変化は漸移的である。Ⅲ層を含めて、遺物は出土しなかった。

3　調査のまとめ

今次調査では、建物から東側では2.35m、北側では３mまで、建物建設時の余掘り範囲が広がっていることを確認した。調査後、施設部へ調査成果を報告するとともに、改修工事にあたって余掘り範囲または造成土部分に配管を埋設することを要望した。　（田崎）

99912　城北団地外灯移設に伴う立会調査

調査地点　松山市文京町３番
　　城北団地（図１）
調査面積　１㎡
調査期間　2000年２月16日
調査の種別　立会調査
調査担当　田崎博之
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　施設部施設課長発事務連絡
　　（平成12年12月１日付）

1　調査にいたる経緯

愛媛大学理工学部等総合実験棟新営電気設備工事とともに、法文学部講義棟北西角に設置されている旧式の外灯を、共通教育棟西側の外灯と取り替えることとなった。移設元の共通教育棟西側の外灯は、設置時に調査が行われている（調査番号：99208）。

その際の調査データから、移設元の外灯は周囲を地表下70cmまで掘り下げて引き抜くという工法を採って、埋蔵文化財に影響がないようにすることを施設部と協議した。しかし、法文学部講義棟北西角の移設先では、設置されている旧式の外灯基礎を引き抜いて周囲を掘り広げることが必要であり、この移設先のみ工事に立ち会って調査を実施することとなった。

2　調査の記録

まず、既設の外灯および基礎部分を引き抜いて土層断面を観察した。地表下63cmまで造成土のⅠ層が続き、その下位で厚さ25cmほどの黒褐色シルト層を確認した。文京遺跡全域での基本層序Ⅲ層である。移設する外灯の基礎を設置する範囲で、Ⅰ層をバック・ホーで掘り下げ、Ⅲ層部分を精査したが、遺物は出土しなかった。また、地表下87cmで黄褐色シルト層のⅣ層があらわれたが、やはり出土遺物はない。　（田崎）

写真73　99912調査地点（東から）

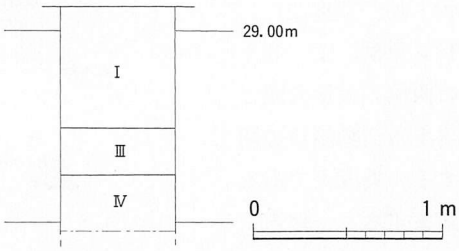


図41　99912調査土層柱状図（縮尺　1/40）

99913　農学部生態観察実験のための水田設置に伴う調査

調査地点　松山市樽味町３丁目５番地
　　樽味団地（図２）
調査面積　１㎡
調査期間　2000年３月10日
調査の種別　確認調査
調査担当　田崎博之
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　農学部事務長発事務連絡
　　（平成12年３月６日付）

1　調査にいたる経緯

樽味遺跡団地内で農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事（３期）に伴う調査中の11月24日、実験農場の一角に幅50cmほどの溝が掘削されていることを知った。溝は半ば埋まりかけていたが、部分的に地表面から50cmほど掘り込まれ、樽味遺跡全域における基本層序Ⅳ層を確認できた。

工事は、農学部による冬期間における水田の貯水状態での生態観察実験のためのもので、埋蔵文化財に対する配慮のないまま行われたものであった。急遽、調査を実施することとなった。

2　調査の記録

田面の中央に逆「T」字形に東西16.5m、南北10m、西辺に沿って南北７mの溝が掘られていた。調査では、まず、すでに西辺に沿って掘られた溝の壁面を清掃して土層の観察を行った。現水田面下の地表下50cmで、樽味遺跡における基本層序Ⅳ層の黄褐色砂質シルト層があらわれた。また、中央に逆「T」字形に掘られた溝は水が溜まっているため、田面北東部に１×１

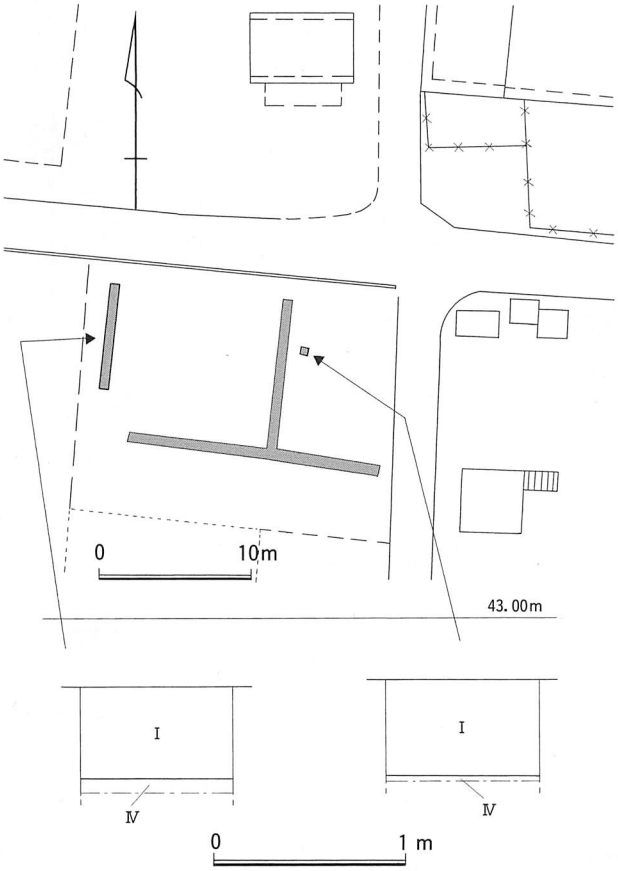


図42　99913調査地点位置図、土層柱状図
（縮尺　1/500、1/40）

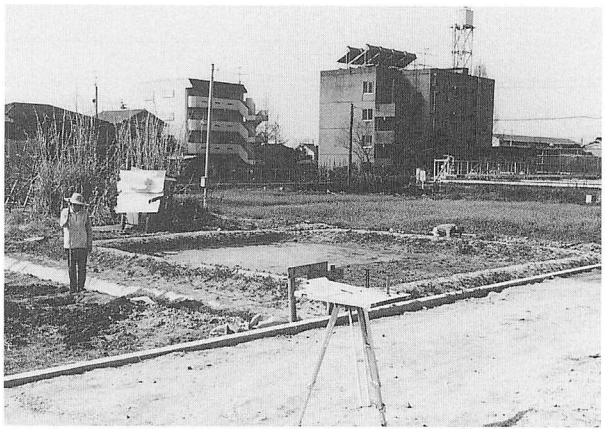


写真74　99913調査地点（北東から）

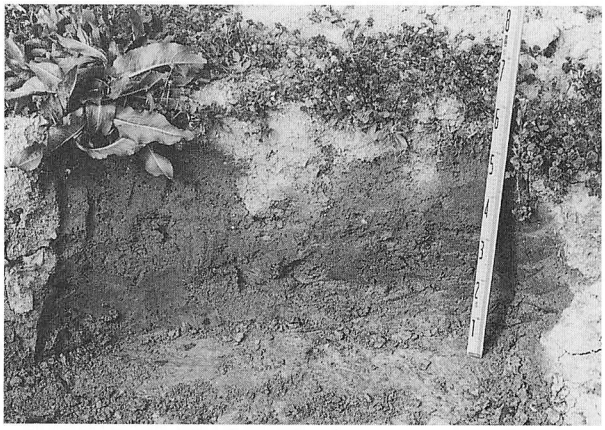


写真75　99913調査地点西側溝部分の土層断面

mの調査区を設定して土層の観察を行ったが、やはり、地表下50cmでⅣ層にあたる黄褐色砂質シルト層を確認できた。周辺では、Ⅱ・Ⅲ層を削って水田が造成されたと考えられる（図42、写真74・75）。

今回の調査では、弥生土器もしくは土師器の胴部片が2点出土したのみである。小片で図示できなかった。

3　調査にかかわる問題点

平成11年12月9日付で、施設部長へ「埋蔵文化財の周知徹底について（依頼）」を提出するとともに、構内各所で行われる諸工事を把握し、埋蔵文化財調査室との協議を行い、埋蔵文化財の保護・保存に努めることを確認した。（田崎）

99914　埋蔵文化財調査室情報通信設備工事に伴う立会調査

調査地点　松山市道後樋又10番13号
城北団地（図1）
調査面積　19m²
調査期間　2000年3月13日
調査の種別　立会調査
調査担当　田崎博之
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　施設部施設課長発事務連絡
（平成12年3月1付）

1　調査にいたる経緯

城北団地北東部にある事務局管理棟1階の保健管理センターから情報通信ケーブルを埋蔵文化財調査室まで敷設することとなった。施設部と協議し、埋蔵文化

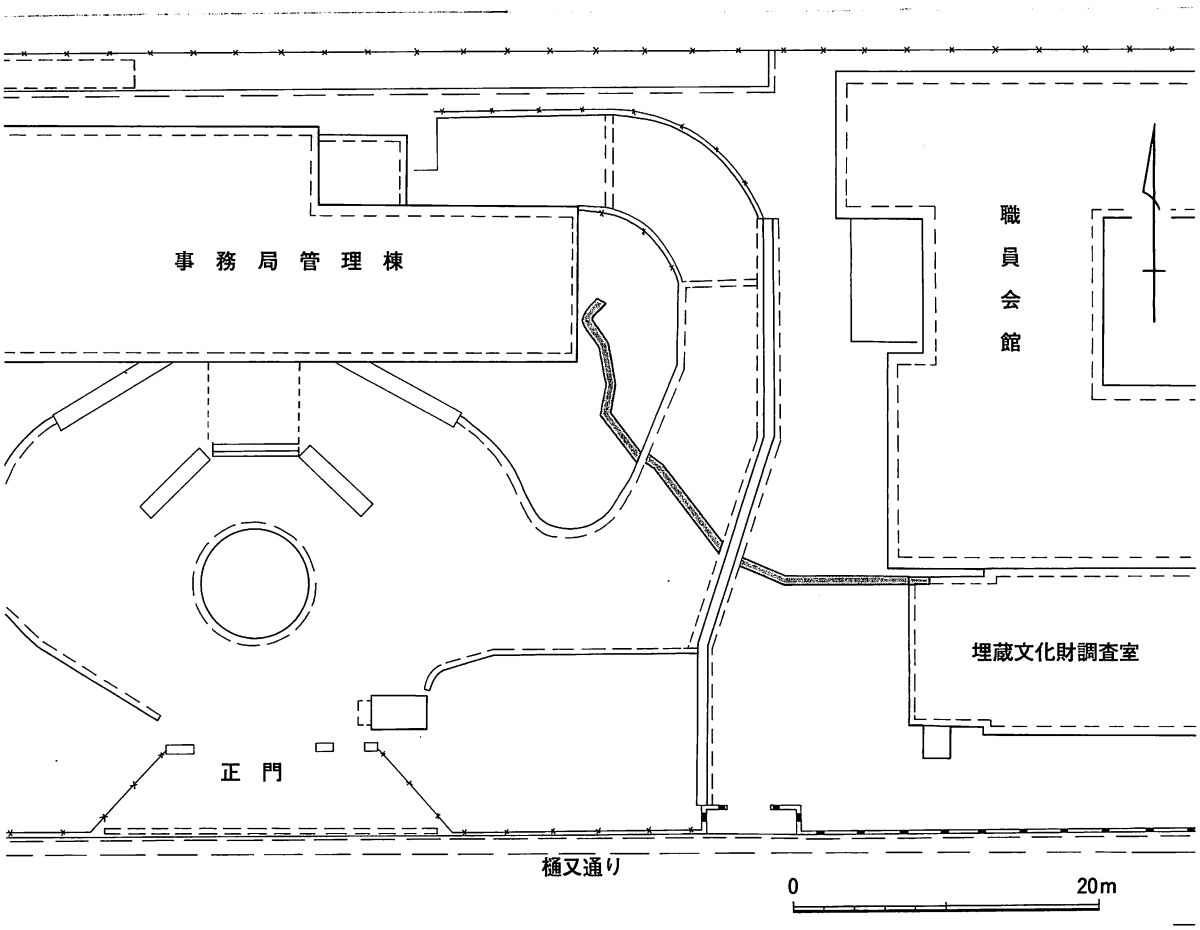


図43　99914調査位置図（縮尺　1/500）

財に影響がないように、できるだけ管路を浅くする設計を行い、工事にあたって立会調査を実施することとした。

2　調査の記録

情報通信ケーブル埋設用の幅70cm、長さ35m、深さ60cmの溝を掘削したが、いずれの地点でも造成土であるⅠ層の中におさまっている（図43）。

出土遺物には、備前焼の擂鉢、白磁碗の胴部片、近世の施釉陶器片、弥生時代後期と考えられる甕の口縁部の破片が出土した。いずれも細片である。

3　調査後の対応

慎重工事を依頼して調査を終了。　（田崎）

99915　法文学部講義棟空調電源工事に伴う立会調査

調査地点　松山市文京町３番
　　城北団地（図１）
調査面積　１㎡
調査期間　2000年３月13日
調査の種別　立会調査
調査担当　田崎博之
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　施設部施設課長発事務連絡
　　（平成12年３月１付）

1　調査にいたる経緯

法文学部講義棟の南西角で空調電源工事が行われることとなり、工事に立ち会って調査を実施した。

2　調査の記録

調査区は法文学部講義棟の壁面に接した箇所にあり、工事に際して地表下85cmまで掘り下げたが、造成土であるⅠ層が確認されたにすぎない（写真76）。調査地点は、講義棟建設のための余掘り部分の中にあるものと考えられる。遺物は出土していない。

3　調査後の対応

電源工事に伴って掘削される地点は、法文学部講義棟の建設時の余掘り部分と考えられる。範囲以外の掘削を行わないように依頼して、調査を終了した。

（田崎）

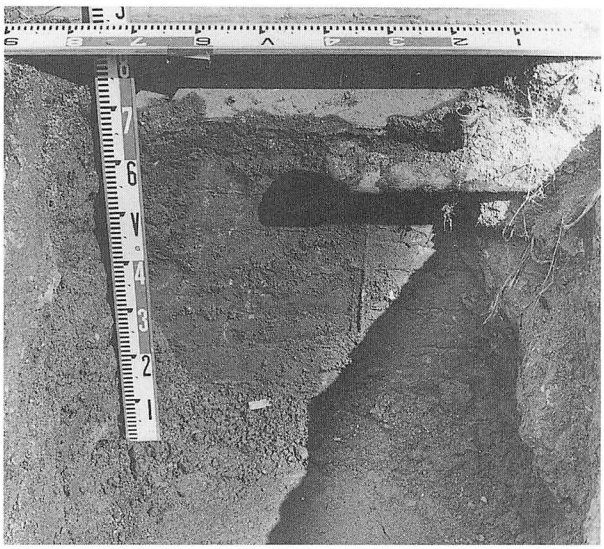


写真76　99915調査地点土層断面

99916　農学部附属農業高等学校校舎新営工事に伴う立会調査

調査地点　松山市樽味町３丁目５番地
　　樽味団地（図２）
調査期間　1999年５月７日
調査の種別　立会調査
調査担当　吉田広
調査補助　宮崎直栄

1　調査にいたる経緯

樽味遺跡５次調査中に、先に行った樽味遺跡４次調査地点の、農学部附属農業高等学校校舎新営工事に際して、調査中に既設管路で調査できなかった部分の掘削が行われることが連絡された。そこで、樽味遺跡４次調査に追加する形で立会調査を実施することとした。

2　調査の記録

調査地点は、樽味遺跡４次調査の本調査区北東隅部にあたる。調査時には、側溝と排水管路の存在のため調査できなかった部分である。調査は、掘削後の土層観察として、側溝下部において行った。

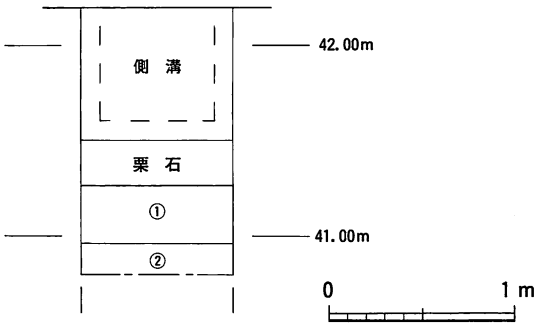


図44　99916調査土層柱状図（縮尺　1/40）

側溝は、地表から70cmの深さで、その下に約25cmの厚さの基礎栗石が敷かれていた。それ以下は攪乱がおよんでいない土層である（図44）。

まず、粘性が高く、下部には砂層をラミナ状に混じえる黒褐色シルト質土層（①層）が約30cmの厚さで堆積し、その下は、0.5mm以下の均質なしまりの弱い黄灰色砂層（②層）を15cmの厚さで確認された。これらは、樽味遺跡４次調査で確認したSR-１の埋土の一部である。

なお、今回の調査では遺物は出土していない。

3　調査後の対応

翌日、続いて東側斜道の掘削が行われる予定であったが、計画掘削深度も浅く、遺跡に影響がおよばないと判断できたため、以後の慎重工事を依頼して調査を終えた。　（吉田）

Ⅲ　2000年度の調査

00001　大学会館改修工事に伴う立会調査

調査地点　松山市文京町３番
　　城北団地（図１）
調査面積　９㎡
調査期間　2000年８月29・30日
調査の種別　立会調査
調査担当　田崎博之
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　施設部施設課長発事務連絡
　　（平成12年８月２日付）

１　調査にいたる経緯

大学会館の改修工事が着手されることとなったが、昨年度実施した試掘調査（調査番号：99911）と周辺での既往調査の成果を踏まえ、埋蔵文化財への影響を最小限にとどめるため、施設部との協議を行った。しかし、大学会館西側の排水管路の枡設置部分３ヶ所については、掘削面を表土層中にとどめることが技術的にできないため、立会調査を実施することとなった。

２　調査の記録

大学会館西側の排水管路の枡設置部分３ヶ所を北から１・２・３トレンチとして調査を進めることとした（写真77）。

［１トレンチ］（図45、写真78）

工事に伴う掘削深度である地表下95cmまで掘り下げたが、造成土層がつづく。２・３トレンチでは、建物から2.5～2.75mで大学会館建設工事に伴う余掘りラインを確認できている。周辺を含めて大きく撹乱されている可能性が高い。

［２トレンチ］（図45、写真79）

建物から2.5mまでは、大学会館建設工事に伴う余掘り範囲である。トレンチ西側の約70cmほどに、城北団地全域で設定しているⅢ層が残存していた。地表下35～70cmまで黄褐色砂質シルト層がみられる。マンガンが縞状に水平に沈着しており、水田層と考えられる。しかし、城北団地全域で設定している基本層序Ⅱ層と比べて、黄色みの強い土色で、土質も砂質分が強い。同様な堆積物は、大学会館周辺の調査地点や、文京遺跡15次調査（調査番号：99602）４トレンチでも知られている。また、文京遺跡18次調査（調査番号：99802）A区の中世の水田層の上層にみられる。近世以降の水田層と考え、Ⅱ′層とした。

地表下70cmで暗褐色砂質シルト層があらわれた。基本層序のⅢ層にあたる。Ⅳ層の小指先大の小塊がごく少量混じる。Ⅲ層下には、Ⅳ層にあたる砂礫混じりのオリーブ褐色砂質シルトが堆積している。Ⅲ・Ⅳ層から遺物は出土していない。

［３トレンチ］（図45、写真80）

建物から2.75mまでは、大学会館建設工事に伴う余掘り範囲である。トレンチ西側の約１mほどにⅢ層が

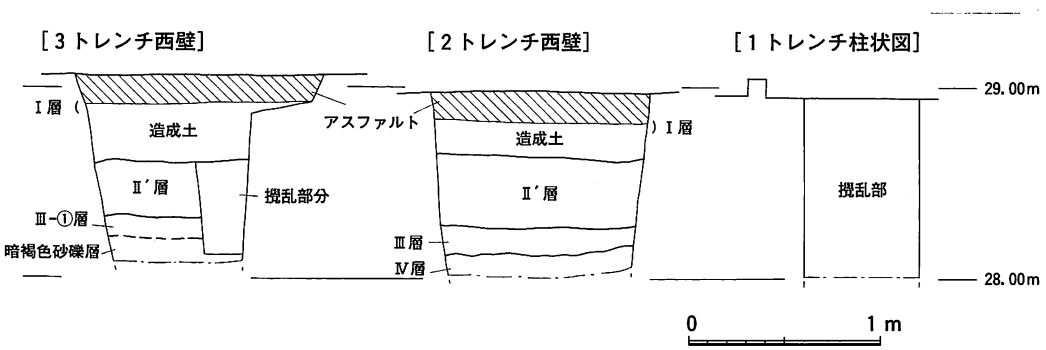


図45　00001調査１・２・３トレンチ土層断面図、土層柱状図（縮尺　1/40）

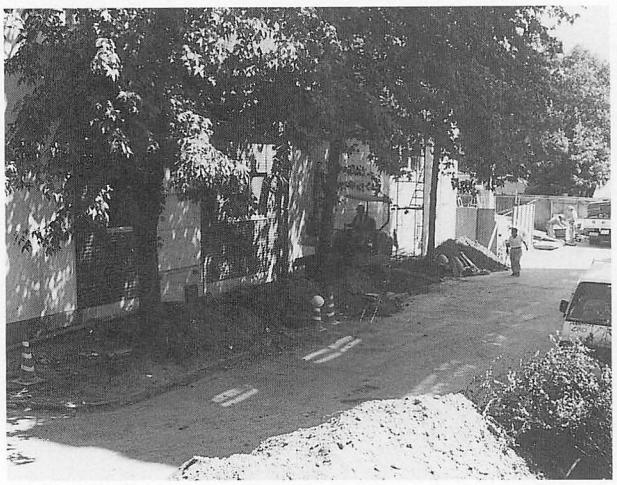


写真77　00001調査全景（北西から）

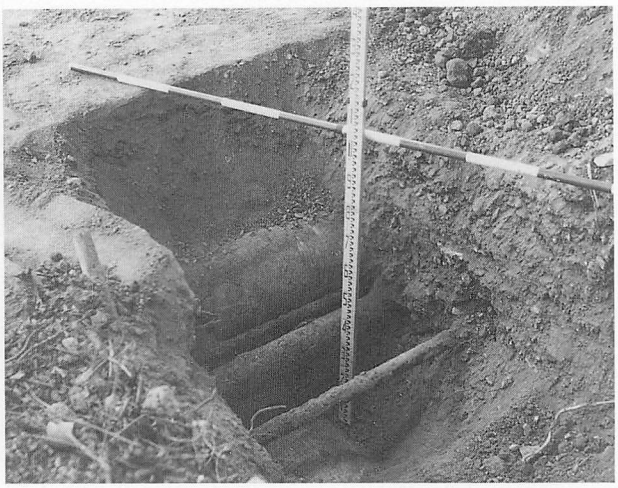


写真78　00001調査１トレンチ（南東から）

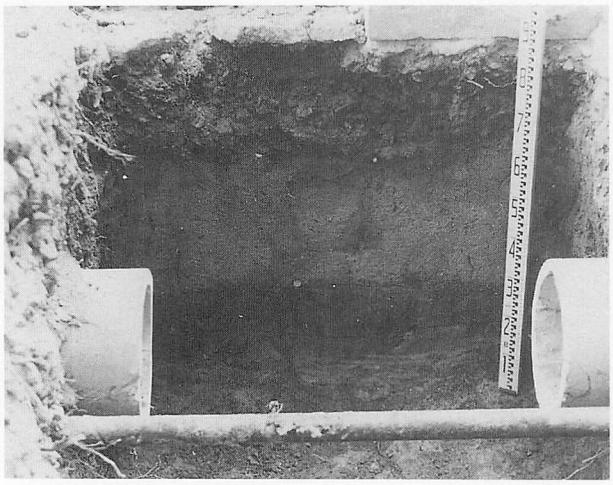


写真79　00001調査２トレンチ西壁土層断面

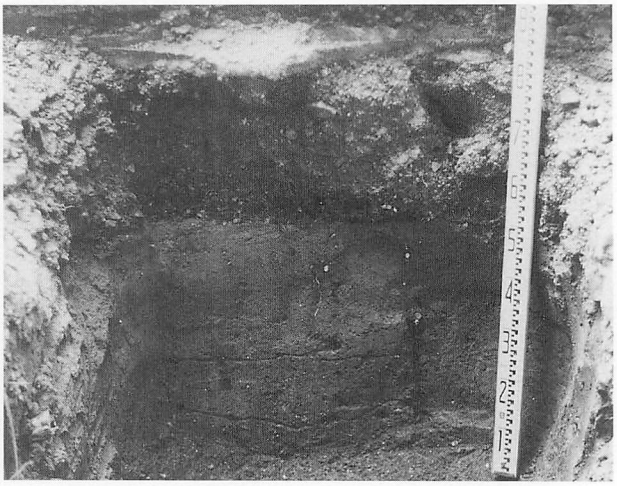


写真80　00001調査３トレンチ西壁土層断面

残存していた。地表下45cmで、２トレンチでも確認できたⅡ′層がみられ、その下層地表下75cm前後でⅢ層にあたる暗褐色砂質シルト層があらわれた。さらに下層には、小礫と細砂が混じる暗褐色砂礫層が堆積している。ただし、この地点のⅢ層は、他地点とは異なり、小礫や粗砂がとくに多く混じる。下層に堆積する暗褐色砂礫層とⅢ層との混合層である。３トレンチでは遺物は出土していない。

3　調査のまとめ

今回の調査では、これまで調査されていなかった大学会館西側の土層データを得ることができた。ここでは、既往の発掘調査データも含め、大学会館周辺の遺跡分布の状況を考えてみたい。

まず、文京遺跡15次調査（調査番号：99602）３トレンチ、今次調査１～３トレンチ、99911調査４トレンチ、そして団地北側で松山市埋蔵文化財センターが実施した道後樋又遺跡２次調査区をつなぐ南北方向の地形断面図を作成した。これに土層データを加えたのが図46である。

これをみると、団地内に設定された15次調査３トレンチから99911調査４トレンチまでは、比較的良好にⅢ層が残存するが、団地北側の道後樋又遺跡２次調査区では、自然流路が確認されているとともに、Ⅲ層は自然流路によって削られ、Ⅳ層の検出面も低い。これらは、古代（８世紀代、SR－２・３）と中世（SR－１）に埋没する自然流路である。埋没時期から考えると、文京遺跡18次調査で確認されている自然流路へとつながるものと考えられる。また、15次調査３トレンチ北端では北側へ向い、今次調査２トレンチでは南側へ、

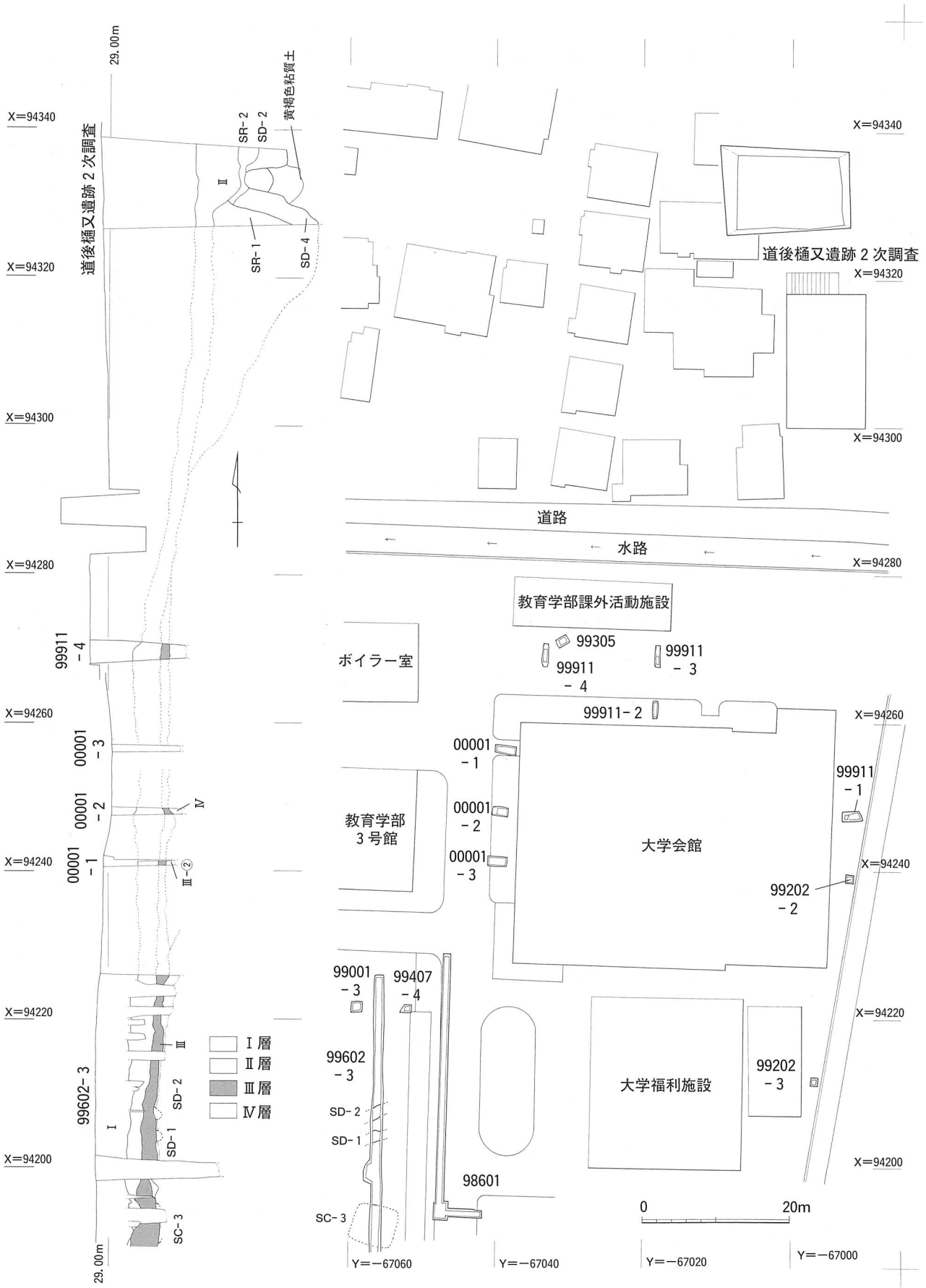


図46　城北団地大学会館周辺の調査地点、地形断面図（縮尺 1/750、1/75）

Ⅳ層が緩やかに落ち込んでいく。その間の今次調査1トレンチでは、暗褐色砂礫層がみられ、幅15～20mの自然流路を想定できる。この流路は、文京遺跡8次調査で確認されているSR-1もしくはSR-2（縄文晩期後葉に埋没する）に連なる自然流路と考えられる。

このように、大学会館の北側には、幾筋もの自然流路が流れている。さらに、道後樋又遺跡2次調査区では、自然流路下に残されていたⅣ層に相当する黄褐色粘質土から、縄文時代後期～晩期前半の土器が出土している。そのため、大学会館周辺でも、当該期の遺跡が分布している可能性が高い。今後とも、工事にあたっては、埋蔵文化財への対応を講じていく必要がある。

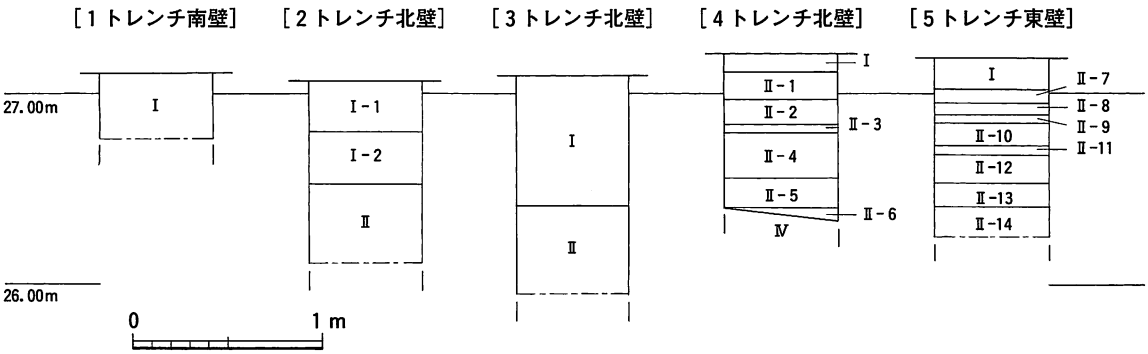
（田崎）

00002　教育学部クレイテニスコート改修工事に伴う試掘調査

調査地点　松山市文京町3番
　　城北団地（図1）
調査面積　2.2㎡
調査期間　2000年9月13日
調査の種別　試掘調査
調査担当　吉田広・三吉秀充
依頼文書　教育学部長発事務連絡
（平成12年9月5日付）

1　調査の経緯

城北キャンパス内のクレイテニスコート西側2面を全天候型テニスコートへ改修することが計画された。その改修にあたって、現状コート面から20cmの掘削が必要となった。ところが、テニスコート一帯は、その



[1トレンチ]
Ⅰ：握り拳よりやや小さめの円礫を含んだ造成土。
[2トレンチ]
Ⅰ-1：円礫を含んだ造成土。
Ⅰ-2：握り拳大の円礫からなる造成土。
Ⅱ：灰オリーブ色（5Y5/2）砂質土。直径1㎜の砂礫を多く含む。しまりなし。土師質小破片あり。
[3トレンチ]
Ⅰ：真砂土＋握り拳大の円礫。
Ⅱ：灰黄褐色（10YR5/2）砂質土主体。鉄分の沈着による明黄褐色砂質土がラミナ状に入る。径1～2㎝の砂礫が多く混じる。
[4トレンチ]
Ⅰ：真砂土。
Ⅱ-1：暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土に明黄褐色砂質土ブロックが混じり、少量の砂礫を含む。
Ⅱ-2：黄褐色（2.5Y5/3）砂質シルト。しまりあり。径1㎜前後の砂礫が混じる。
Ⅱ-3：明黄褐色（2.5Y6/6）砂質シルト。しまりあり。径1㎜前後の砂礫が混じる。
Ⅱ-4：暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質シルト。しまりあり。径1㎜～小指先大の円礫・砂礫を含む。土師質土器の破片が出土。
Ⅱ-5：暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質シルト。しまりあり。砂礫はほとんど混じらない。
Ⅱ-6：暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト主体で、浅黄色（2.5Y7/4）砂質土の不定形の塊が混じる。
Ⅳ：浅黄色（2.5Y7/4）砂質土。地山層で、上層にマンガンの沈着あり。
[5トレンチ]
Ⅰ：真砂土。
Ⅱ-7：黄褐色（2.5Y5/3）シルト。径1㎜の砂礫が混じる。
Ⅱ-8：暗緑灰色（7.5GY3/1）シルト。径1㎜の砂礫が混じる。
Ⅱ-9：灰オリーブ色（5Y5/2）砂質シルト。径1㎜の砂礫が混じる。
Ⅱ-10：灰オリーブ色（5Y5/2）砂質シルト。明黄褐色砂質土がラミナ状に混じる。
Ⅱ-11：明黄褐色（2.5Y6/6）砂質シルト。径1㎜の砂礫を含む。
Ⅱ-12：灰オリーブ色（5Y5/2）砂質シルト。径1㎜の砂礫を含む。
Ⅱ-13：灰オリーブ色（5Y5/2）砂質シルト。径1㎜の砂礫を含む。明黄褐色砂質土がラミナ状に混じる。
Ⅱ-14：暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト。砂質弱く、しまりあり。

図47　00002調査1～5トレンチ土層柱状図（縮尺 1/40）

利用状況から、これまで埋蔵文化財の状況は確認されていないままであった。したがって、掘削深度は浅いが、改修に先立って確認を行うこととした。

調査では、改修２面の四隅にトレンチを設定し、掘削にかかった。ところが、ネット支柱部分や排水枡設置部分は更なる掘削深度を必要とするとの連絡と、今後予定される残る東側４面のコートに関する情報提供の依頼が担当職員から現場であり、時間・労力などを考慮・協議した結果、６面あるテニスコートの四隅に、深度１ｍを目安に土層確認を行うこととした。

2　調査の記録

［１トレンチ］（図47）

西側から２面目の南東隅に設定したトレンチである。コート面から35cmまで人力で掘り下げたが、造成土が続く。排水用砕石の敷設も認められなかった。

［２トレンチ］（図47、写真81）

最も西側のコート南西隅に設定したトレンチである。コート面から55cmまでは造成土で、以下95cmまでⅡ層が続く。

［３トレンチ］（図47、写真82）

最も西側のコート北西隅に設定したトレンチである。コート面から70cmまでは造成土で、以下115cmまでⅡ層が続く。

［４トレンチ］（図47、写真83）

最も東側のコート北東隅に設定したトレンチである。コート面下10cmまでは真砂土層で、以下80cmまでⅡ層が続く。それ以下はⅣ層となるが、トレンチ内で東側に傾斜する落ち込みが認められ、遺構の可能性もある。なお、Ⅱ層は幾枚かの水田層に分離できるが、

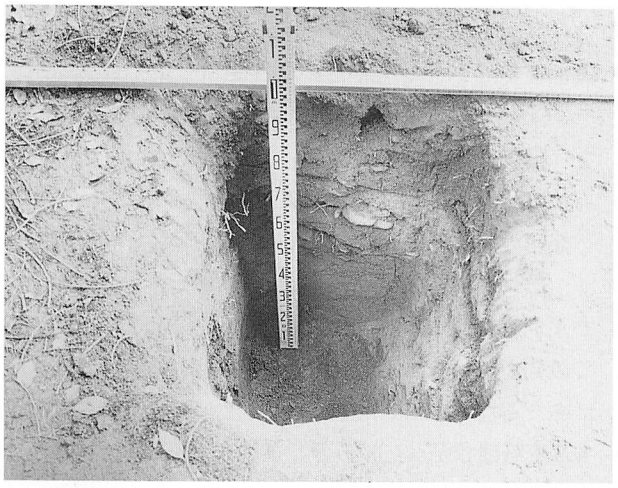


写真81　00002調査２トレンチ北壁土層断面

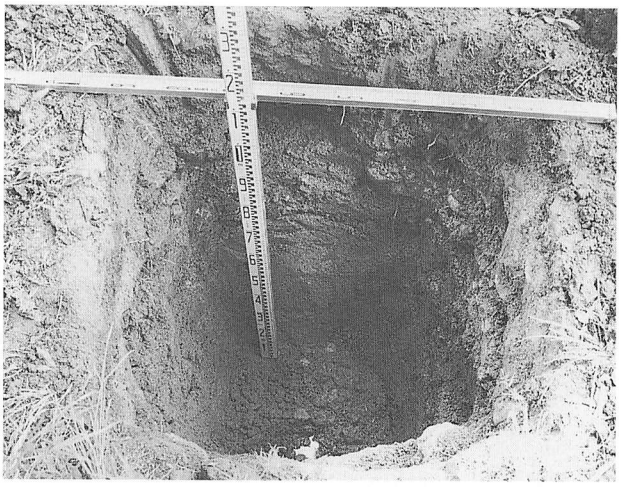


写真82　00002調査３トレンチ北壁土層断面

写真83　00002調査４トレンチ北壁土層断面

写真84　00002調査５トレンチ東壁土層断面

この地点でのⅣ層の検出と、後記する５トレンチでの所見から、Ⅱ－３層以上は近世・近代の水田層である可能性が高い。

［５トレンチ］（図47、写真84）

最も東側のコート南東隅に設定したトレンチである。コート面下15cmまでが真砂土および造成土で、以下90cmまで造成以前の水田層が続く。幾枚かの水田層に分離でき、周辺既往調査で確認されたⅡ層との比較から、Ⅱ-11層以上に関しては近世以降の水田層である可能性が高い。

3　調査後の対応

今回の調査で、とりあえず当初埋蔵文化財調査室に提示された西側コート２面の20cmの掘削は、造成土内でおさまることが推測できることとなった。ただし、55cmをこえての掘削に際しては、中世の水田層に影響がおよぶ可能性がある。したがって、新設の排水枡や支柱の設置には、立会調査が必要である。

さらに、今後予定される東側コート４面に関しては、４・５トレンチで表土層が10～20cmと浅く、砕石等の敷設もなく、直下でⅡ層に達する。ただし、周辺既往調査との対応から、４トレンチで現コート面下40cm、５トレンチでコート面下50cmまでは近世以降の水田層である可能性が高い。したがって、現コート面下40cmまでの範囲ならば、中世以前の水田層への影響はほとんどないものと推定できる。　（吉田）

00003　基礎科学総合研究棟新営工事（Ⅰ期）に伴う調査（文京遺跡21次調査）

調査地点　松山市文京町２番５号
　　城北団地（図１）
調査面積　1,644㎡
調査期間　2001年１月15日～９月９日
調査の種別　事前全面調査
調査担当　田崎博之・吉田広・三吉秀充
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　理学部事務長発事務連絡
　　（平成12年10月25日付）

1　調査にいたる経緯

2000年９月20日、施設部との連絡会議で、理学部構内で基礎科学総合研究棟の新設工事に伴う発掘調査が必要となる可能性が高くなってきたとの報告があった。その調査面積は、これまでにない2,500㎡近い大規模なもので、施設部からは単年度での調査が可能なのかの検討を要望された。その後、調査期間や体制、調査費用の問題などを施設部と協議していった。

10月23日の連絡会議で、建設が２期にわたることが報告され、まずはⅠ期分の1,870㎡の調査が必要になった。とは言っても、これまでにない大面積である。田崎・宮崎が調査にあたるが、調査最終段階の多忙期には、吉田・三吉を加えた２パーティで進めることとした。しかし、本来なら報告書刊行に向けて整理作業を行っていた吉田・三吉を動員することは、整理作業に大きな支障をきたすこととなった。

2　調査の方法

（１）　調査区割りと調査区（図48）

今回の調査範囲は、基礎科学総合研究棟本体に加えて、これに接続される管路部分を含む。城北団地全体で平面直角座標系X＝93900、Y＝－66800を基点として設定している調査区割りでは、AB～AS-57～75区にあたる。ただし、電線管･給水管･通信管などを埋設する管路部分が点在するので､以下のⅠ～Ⅳ区を設定し、城北地区調査区割りと併用して調査を進めた(図48)。

Ⅰ区：AH～AP-57～66区の建物本体部分と、東にのびるAC～AH-57・58区、西にのびるAO～AS-58区、北にのびるAH-66～68区の各管路部分。

Ⅱ区：理学部敷地の東辺に沿ってAC-58～68区の南北にのびる管路部分。

Ⅲ区：理学部敷地の東辺に沿いⅡ区の北側のAB・AC-69～75区にあたる管路部分。

Ⅳ区：理学部本館東端を取り巻くAG～AJ-69～74区の管路部分。

また、建物本体部分はできるだけ早く建設工事に入りたいとの施設部側からの要望があり、協議の上で建物本体部分にあたるⅠ区を最初に調査し、その後、管路部分であるⅡ～Ⅳ区を調査することとした。

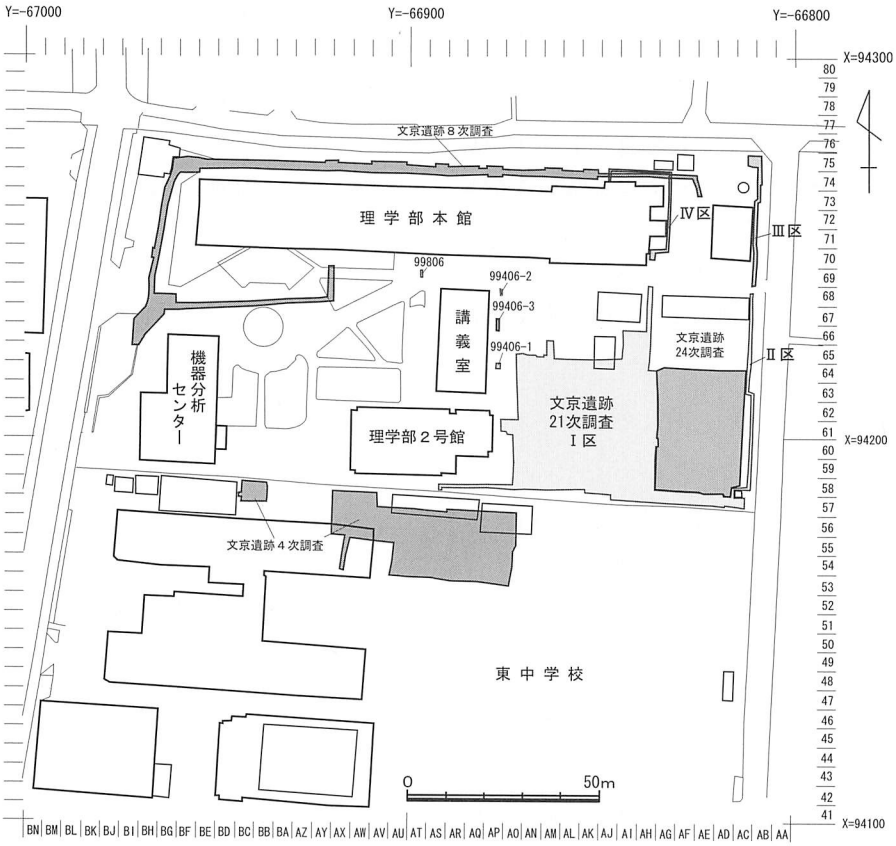


図48　00003調査（文京遺跡21次）調査区配置図（縮尺　1/2000）

（2）　遺構の表記

今次調査でもっとも広いⅠ区で出土した遺構には、検出・確認面ごとにみると、

①Ⅲ層上面およびⅢ層掘り下げ中に確認した遺構
②Ⅳ層上面で検出した遺構
③Ⅳ層上半部の遺構
④Ⅳ層下半部の遺構

がある。この中で、①Ⅲ層上面およびⅢ層掘り下げ中で確認できた遺構は、出土遺物や切り合い関係から古代末～中世のものと判断される。これに対して、②Ⅳ層上面で検出した遺構には、弥生時代前期から中世にわたる時期のものが含まれている。検出した層序面ごとに時代・時期差を把握できているわけではない。こうしたことが生じるのは、遺構埋土がⅢ層と類似するため、本来Ⅲ層上面での検出が困難で、Ⅳ層上面でやっと確認できた場合があるからである。

この点に関しては発掘調査中から気付いており、遺構番号を付与するにあたっては、Ⅲ層上面～Ⅳ層上面で検出した遺構については、検出面を問わずに、検出順に１～383の連番で遺構番号を付与していった。

加えて、Ⅰ区東北隅のSR-17下層で確認した縄文晩期終末～弥生前期初頭の土器溜りには、Ⅳ層の上層に形成された遺構として、SX-400の遺構番号を与えている。

また、③Ⅳ層上半部の遺構は縄文後期と考えられるもので、401から416まで遺構番号を与えながら調査を進めた。④Ⅳ層下半部の遺構については、Ⅳ層中の遺構ということで、③Ⅳ層上半部の遺構の最終遺構番号に続けて、417の番号を付した。

Ⅱ区では調査順に501～508、Ⅲ区では601～603の遺構番号を付した。Ⅳ区では、遺構は確認されていない。

整理すると、以下のようになる。

①Ⅲ層上面およびⅢ層掘り下げ中で確認できた遺構、②Ⅳ層上面で検出した遺構
１～383・400・501～508・601～603を付与。ただし、70・71・73・74・95・101・107・116・140・145・181・186・217・218・232・277・283・284・285・300・301・308・309・310・313・314・321・322・328・335・359・363・384～399は欠番。

③Ⅳ層上半部の遺構：401～416を付与。ただし、405・406は欠番。

④Ⅳ層下半部の遺構：417を付与。

この中で、竪穴式住居跡や掘立柱建物は複数の土壙や柱穴から構成される。これらについても個々に遺構の登録番号を与えている。そのために、1軒の竪穴式住居跡が複数の登録番号をもつ遺構から構成されていることとなっている。以上の遺構番号に遺構略号を冠して遺構の種別を表している。

3　調査の概要

(1)　基本層序

今回の調査でも、城北団地全域で設定されている基本層序のⅠ～Ⅴ層が確認されている（図50）。

Ⅰ層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土部分。

Ⅱ層：造成以前の灰色系の近世～近代の水田層。調査範囲のほぼ全域に広がっているが、Ⅰ区西半部のAL～AO-58～65区では、Ⅱ層はみられず、Ⅰ層とⅢ層の間には、マンガンが薄い縞状に何枚も沈着する黒褐色砂質シルト層が堆積している。水田層と考えられ、層序関係からは、古代～中世のSD-1～4が伴う。Ⅱ′層とした。

Ⅲ層：弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含する黒色～暗褐色系の土層である。調査区全域で確認される。SD-1～4・502・503、SD-5、SD-6・501、SD-7、SD-50の古代～中世の溝はⅢ層上面で検出できたが、他の遺構は、Ⅲ層を掘り下げた後にⅣ層上面で検出した。

Ⅳ層：黄褐色系のシルト～砂質土層である。今次調査では、攪乱部の壁面や、先行トレンチでⅣ層中にも、遺構が営まれていることが確認できた。そのため、Ⅴ層最上部まで掘り下げ、Ⅳ層の堆積状況を把握することとした。その観察結果を攪乱部の壁面土層とも対応させ、Ⅳ層が大きく7層の土層群から構成されることを把握した。

Ⅳ-1層：明黄褐色砂質シルト。Ⅲ層との層界は漸移的で、上半部にはⅢ層のしみ込みがみられる。

Ⅳ-2層：にぶい黄褐色砂質シルトで、Ⅳ-1層とは砂礫・細砂が多く混じる点が大きく異なる。

Ⅳ-3層：明黄褐色や黄灰色の細砂・粗砂・小礫からなるレンズ状ブロックで構成される土層。

Ⅳ-4層：にぶい黄褐色砂質シルトで、部分的に細砂・粗砂・小礫からなるレンズ状ブロックが含まれる。しかし、Ⅳ-3層ほど多くない。

Ⅳ-5層：にぶい黄色や浅黄色のシルト。

Ⅳ-6層：Ⅴ層直上に堆積するにぶい黄色や浅黄色の砂質シルトで、細砂が多く混じる。

Ⅳ-7層：Ⅰ区北東部に分布する細砂・粗砂のレンズ状ブロックが多くみられるにぶい黄褐色砂質シルト。

この中で、Ⅳ-1層～Ⅳ-4層は調査区のほぼ全域に分布し、Ⅳ-5・6層はⅤ層が低く窪む部分に堆積する。Ⅳ-1・2層、一部Ⅳ-3層に焼土塊や炭化物片が含まれることから、Ⅳ層上半部に掘り込まれた遺構であることを確認できた。また、Ⅳ-5層では縄文前期の遺物溜りを検出できた。

Ⅴ層：Ⅳ層下の花崗岩を主体とする砂礫ないし礫層である。

(2)　調査の概要

以下、Ⅰ区とⅡ区を一括し、Ⅲ層～Ⅳ層上面で検出した遺構（縄文晩期終末～中世の遺構と遺物）、Ⅳ層上半部の遺構（縄文後期？）、Ⅳ層下半部の遺構（縄文前期）の3時期に構成し、これにⅢ区とⅣ区をまとめて、出土した遺構と遺物の概要報告を行う。

ただし、Ⅱ～Ⅳ区は、管路部分で、調査区幅が狭く、Ⅳ層部の遺構の調査は深度が深くなるため不可能で、工事に伴う掘削深度までの調査を行ったにすぎない。

(a)　Ⅰ・Ⅱ区の概要

［Ⅲ層～Ⅳ層上面の調査（縄文晩期終末～中世）］

Ⅰ区とⅡ区では、竪穴式住居跡3棟、土壙50基、溝10条、自然河道1条、土器溜り1、立柱痕跡や杭痕跡をもつものを含む数多くの小穴が出土した（図49・51、写真85）。

Ⅲ層上面とⅣ層上面で検出した遺構があり、弥生時代前期から中世にわたる時期のものが含まれる。その中で、遺構を埋土の質や色調を類型化し、遺構の時期を判断する手がかりとした。こうした埋土の各類型を一覧として表3に整理しているので、参照されたい。

竪穴式住居跡は、SC-28・30・34の3棟を調査し

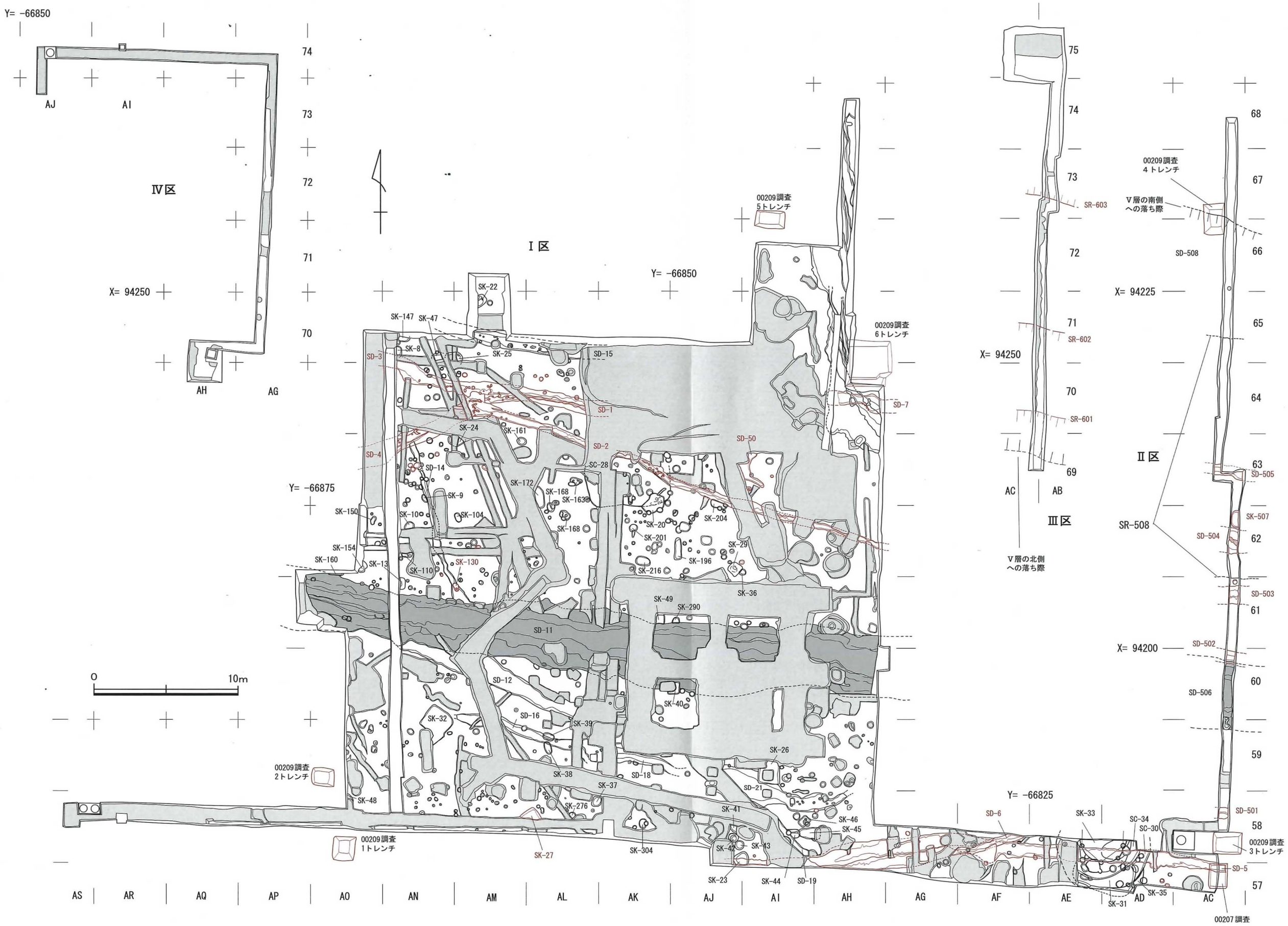


図49　00003調査（文京遺跡21次）Ⅲ層～Ⅳ層上面の弥生時代～中世遺構配置図（縮尺 1/250）

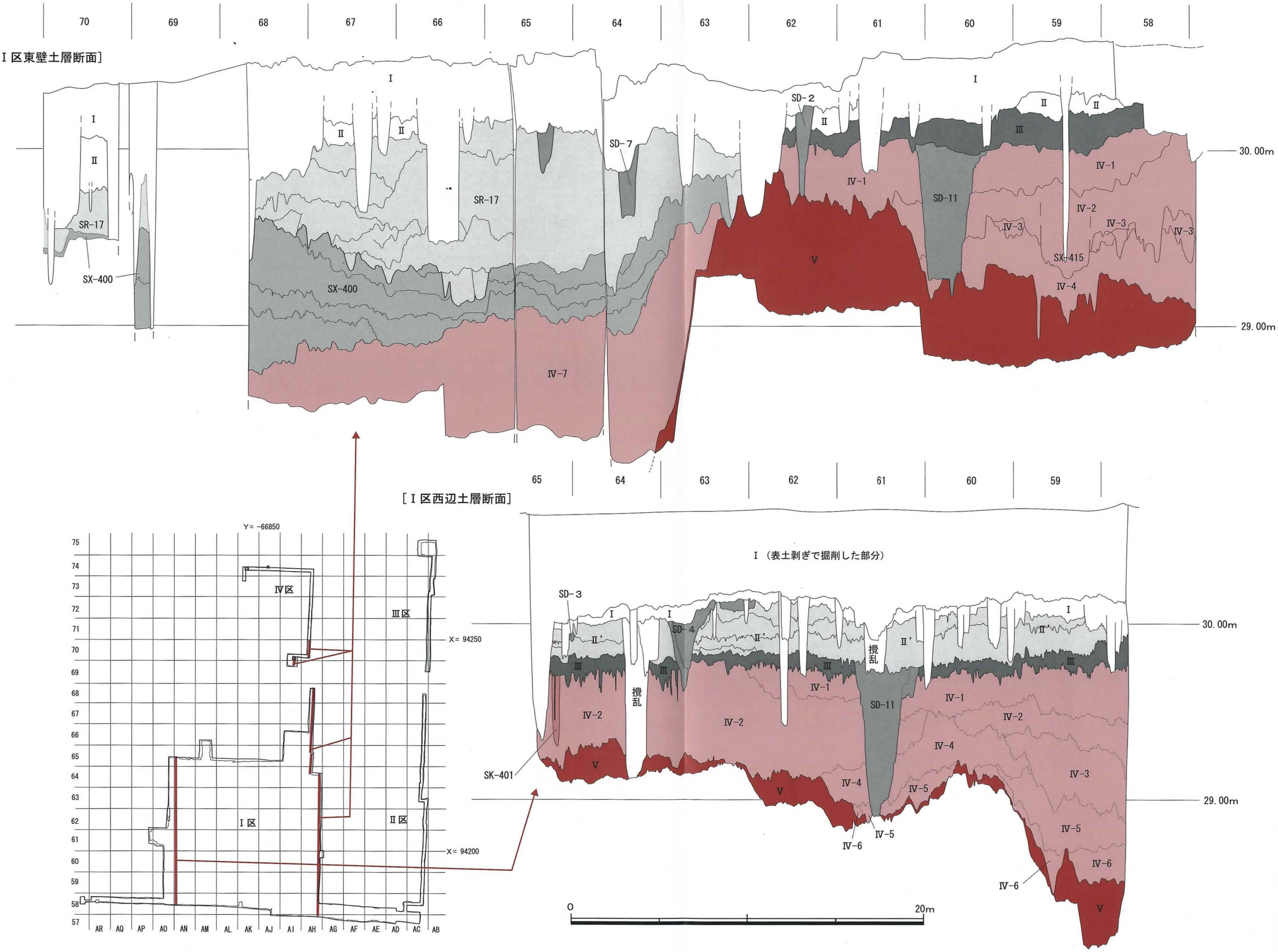


図50　00003調査（文京遺跡21次）土層断面図（縮尺 1/200、1/20）

表３　00003調査（文京遺跡21次）における埋土の類型と遺構一覧

埋土の特徴	竪穴式住居跡（SC）・土壙（SK）・溝（SD）・小穴（SP）
A：Ⅲ層上面で検出した砂礫に褐灰色シルトが混じる	SD-１～４・502・503、SD-５、SD-６・501、SD-７・SD-50、SR-17、SR-601～603
B：橙色および褐灰色のシルトが混じる埋土をもつ	SK-23・130 SP-53・54・55・59・62・76・83・84・86・108・115・126・219・221・260・311・330・345・346・349・352・356・357
C：暗褐色シルトや黒褐色シルトを主体とする	SC-28・30・34 SK-31
C-１：部分的に褐色シルトや黒褐色シルトの塊が混じる	SK-13・20・25・36・147・160・194・196・201・276 SD-12・16・18・21 SP-57・63・78・166・182・185・187・188・189・190・191・193・195・197・198・199・200・202・207・211・212・213・214・261・262・263・264・265・267・269・270・271・272・273・274・275・278・279・280・281・282・358・365
C-２：褐色シルトないしは黒褐色シルトの埋土	SK-35・48・49・304 SD-11・506、SD-15 SP-65・99・102・109・112・113・118・122・124・137・138・141・142・149・151・152・155・205・228・229・230・231・233・235・241・242・246・247・258・298・305・334・347・364・372
C-３：部分的にⅣ層の黄褐色シルト塊が混じる	SK-９・10・22・24・26・27・32・33・41～47・104・110・150 SD-19 SP-56・58・60・64・66・67・68・72・75・77・80・81・85・87・88・89・90・92・93・94・96・97・98・100・103・105・106・111・114・117・119・120・121・123・125・127・128・129・131・132・133・134・135・136・139・143・144・146・156・158・159・178・179・183・206・222・223・224・226・234・237・239・240・244・245・249・250・252・253・255・256・257・259・295・296・297・299・303・306・307・312・315・316・317・318・319・320・324・325・326・327・329・331・332・333・336・338・339・341・343・344・348・350・351・353・355・360・361・362・366・367・368・369・370・374・376・380・381・382・383
D：褐色シルトを主体とするが黄橙色シルトが混じる	SK-37 SP-51・52・61・69・82・153・157・180・210・220・225・236・238・243・254・302・323・337・340・342・354・371・378
E：にぶい黄褐色シルトの中に黒褐色シルトや褐色シルトの塊が含まれる	SK-８・29・38・39・40・154・161・163・168・171・172・204・216・290 SD-14 SP-79・162・165・167・168・169・170・173・174・176・177・184・192・203・208・209・215・248・266・268・286・287・288・289・291・292・293・294

た。いずれもⅣ層上面で検出。SC-28は不整な隅丸方形で、古墳時代の竪穴式住居跡と考えられる（写真91）。SC-30は、径6.5～6.7mの円形もしくは楕円形の平面形をもつ。SC-34は、SC-30の下層で確認できた円形の竪穴式住居跡である。SC-30・34の覆土中には、弥生前期の遺物が大量に廃棄されている。ともに、当該期の竪穴式住居跡である（写真92）。

土壙は、SK-８～10・13・20・22～27・29・31～33・35～49・104・110・130・147・150・154・160・161・163・168・171・172・194・196・201・204・216・276・290・304の計50基の土壙が出土。SK-20・26・31・33・35・45は比較的大型の土壙であるが、他は直径あるいは一辺が１m以下の小型土壙である。いずれもⅣ層上面で検出したが、SK-23・130は古代～中世の土壙、SK-31・33・35は弥生前期の貯蔵穴で、SK-８・26・47も弥生前期の土器が少量ながら出土しているので、当該期の遺構と考えられる。また、SK-20・42・46・304・339からは、弥生土器の破片が出土しているが、細片のため詳細な時期は不明である。以外の土壙は、時期を判断できる遺物は出土しておらず、埋土の特徴から弥生時代～古墳時代の時期幅で捉えるしかない。

写真85　00003調査（文京遺跡21次）Ⅰ区弥生時代～中世の遺構完掘状況（北西から）

写真86　00003調査（文京遺跡21次）SD－１～４
検出状況（西から）

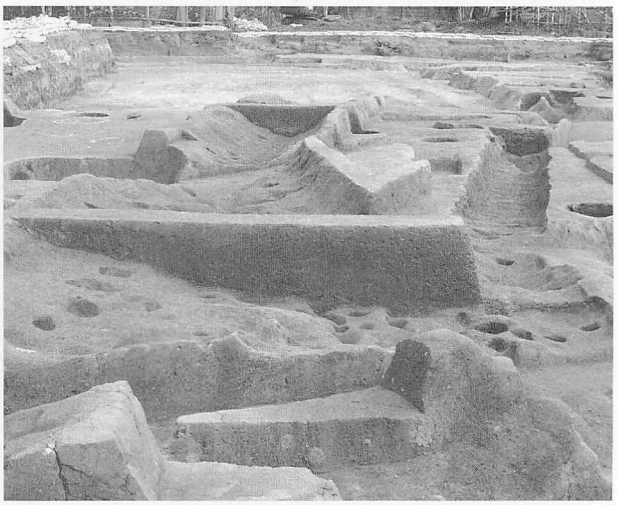


写真87　00003調査（文京遺跡21次）SD－１・２および、
合流地点土層断面（西から）

写真88　00003調査（文京遺跡21次）
SD－５・６完掘状況（西から）

写真89　00003調査（文京遺跡21次）
SD-11完掘状況（西から）

写真90　00003調査（文京遺跡21次）SD-11土層断面

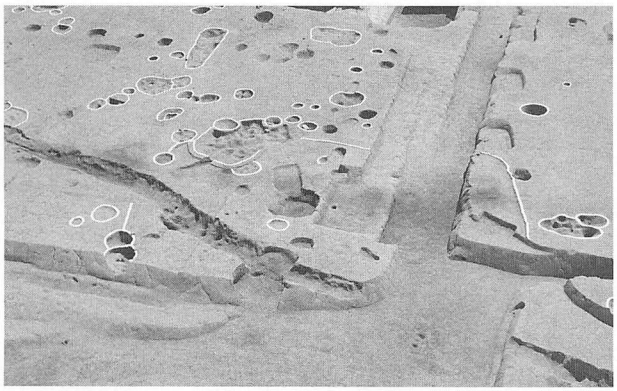


写真91　00003調査（文京遺跡21次）
SC-28完掘状況（北から）

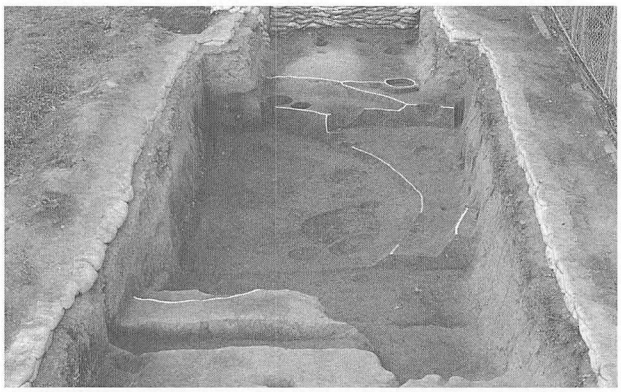


写真92　00003調査（文京遺跡21次）
SC-30・34、SK-31完掘状況（西から）

写真93　00003調査（文京遺跡21次）Ⅳ層上半部
および下半部の完掘状況（北西から）

写真95　00003調査（文京遺跡21次）
SK-401・402検出状況（西から）

写真96　00003調査（文京遺跡21次）SK-401（西から）

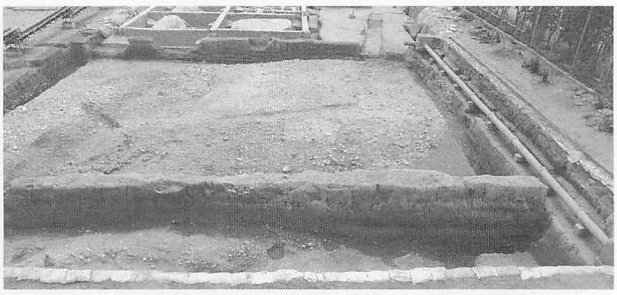


写真94　00003調査（文京遺跡21次）Ⅰ区南西部Ⅳ層
完掘状況、土層断面（西から）

写真97　00003調査（文京遺跡21次）SK-407、
SP-408・409、SX-412検出状況（南から）

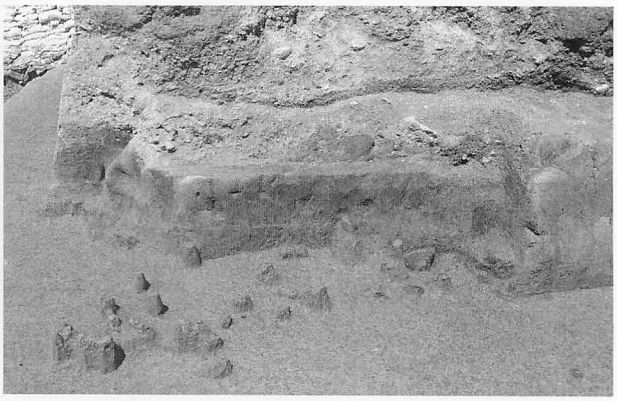


写真98　00003調査（文京遺跡21次）
SX-414検出状況（東から）

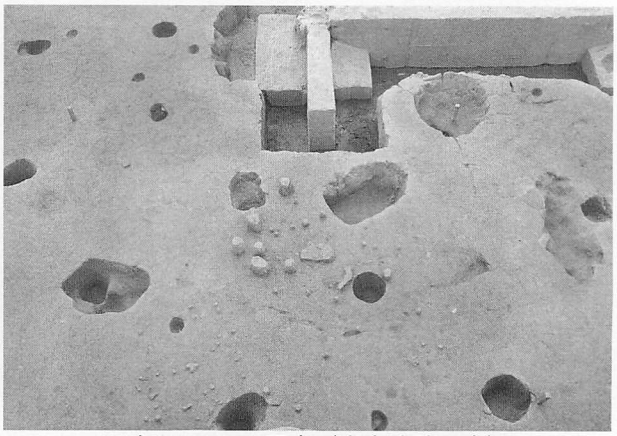


写真99　00003調査（文京遺跡21次）
SX-415検出状況（東から）

Ⅰ・Ⅱ区で検出した溝は、最近の攪乱が著しいため個々に遺構番号を与えたが、調査終了後、配置と埋土の特徴から、SD-1～4・502・503、SD-5、SD-6・501、SD-7、SD-50、SD-12・16・18・21、SD-11・506、SD-15、SD-19、SD-14の10条に整理した。この中で、SD-1～4・502・503（写真86・87）、SD-5（写真88）、SD-6・501（写真88）、SD-7、SD-50は、古代～中世の溝である。SD-15は古墳中期、SD-19は弥生時代～古墳時代の時期幅で捉えられる。

その中で、SD-11は弥生前期に比定できる（写真89・90）。Ⅰ区のAH～AN-60・61区、AO-61・62区で東西方向にほぼ直線的にのびる幅3.1～4.8mの大溝で、東側は隣接する21次調査区へものび、Ⅱ区で検出したSD-506に繋がる。21・24次調査区で65mを測る。SD-12・16・18・21、SD-14は、SD-11・506に伴う可能性がある。

Ⅰ区北東隅のAH-63・64区ではⅠ層下、AH-65・66区では攪乱部の底面、AH-67・68区ではⅡ層下で、SR-17を確認した。Ⅱ区でも、同様な砂礫層を確認でき、SR-508とした。一連の自然河道である。2001年度に実施された東側に隣接する24次調査で、SR-17とSR-508は15mほどの河道幅で北側から湾入することを確認でき、SR-17・508として一括した。出土遺物から、SR-17の埋没時期は弥生後期終末を前後する時期と考えられる。

SR-17下層では、縄文晩期終末～弥生前期初頭の遺物が包含されるSX-400を確認できた（図51）。基本層序Ⅴ層の礫層が北に向かって急激に落ち込み、その上位を砂礫混じりのⅣ層が埋める結果、緩やかな浅い谷状の窪地が形成され、そこに褐色砂質シルト層や黒褐色シルト層が堆積する過程で形成された土器溜りである。遺物は、Ⅳ層の落ち際に沿うように集中する。谷状の窪地の落ち際に生活残滓として投棄された遺物と判断した。縄文晩期終末～弥生前期初頭の土器がほとんどで、他にサヌカイト小片や炭化物片がある。土器は細片化したものもあるが、比較的大形の破片に接合・復元できるものが多い。当該期の良好な資料である。

小穴は、Ⅰ区全域で数多く検出された。その中で、SP-53・54・55・59・62・76・83・84・86・108・115・126・219・221・260・311・330・345・346・349・352・356・357は、古代～中世の埋土をもつが、掘立柱建物を構成するような配置はみあたらない。以外の小穴には、立柱痕跡や杭痕跡をもつものや、遺物が比較的良好な状況で出土している例もあるが、いずれも弥生時代～古墳時代のものである。

［Ⅳ層上半部の調査（縄文後期？）］

調査に着手した当初から、攪乱部の壁面でⅣ層上面～上半部から掘り込まれた遺構を確認できた（図51）。調査では、Ⅳ-2層上面まで掘り下げ、遺構検出に努めた。土壙としてSK-401～403・407、小穴としてSP-406・408・409があり、SX-410～416は遺構の輪郭線が判然としないもの、当初遺構として判断したものの輪郭線の外側まで焼土や炭化物片の分布が広がるものである（写真93・95～99）。

これらの遺構に確実に伴う遺物は、焼土塊・炭化物ばかりで、土器・石器・自然礫などはほとんどみられない。そのため、Ⅳ層上半部の遺構の所属時期は明らかではない。^{14}C年代測定を測定する資料を採集しているが、まだ測定結果はでていない。しかし、これまでの文京遺跡でⅣ層上半部から出土した遺物は、縄文後期のものであり、今回発見された遺構も当該期と考えておきたい。

［Ⅳ層下半部の調査（縄文前期）］

これまで、文京遺跡では、基本層序のⅣ層下部からは遺構や遺物は出土していなかった。ところが、今回の調査では、Ⅰ区南西部にあたるAK～AO-58～61区ではⅤ層上面までの調査を行い、縄文前期の遺物溜りであるSX-417を確認することができた（図52）。このSX-417は、Ⅰ区南西部で南東から北西にのびるⅤ層の高まりの南西側に形成された谷状の窪地内に堆積したⅣ-5層に包含される（写真94）。Ⅳ-5層が堆積する過程で、土器片、焼土や炭化物の小片、円礫が埋積する。出土土器は、縄文前期に比定でき、細片化したものもあるが、比較的大きな破片に接合できる。しかし、2～3個体分にすぎず、焼土や炭化物の小片や円礫も比較的まとまった出土状況であり、短時期に谷状の窪地へ投棄されている可能性が高い。

この他、Ⅰ区南西部のⅤ層の高まりの北東側も調査を行った。Ⅴ層の傾斜が緩やかで、上層には、黄褐色細砂や灰白色粗砂・小礫などのレンズ状ブロックが多く混じる砂質土主体のⅣ-3・4層が堆積する。しかし、焼土塊や炭化物片はほとんどみられず、Ⅳ-4層を中心として縄文土器と考えられる非常に小さな土器片が数点出土したにすぎなかった（図52）。

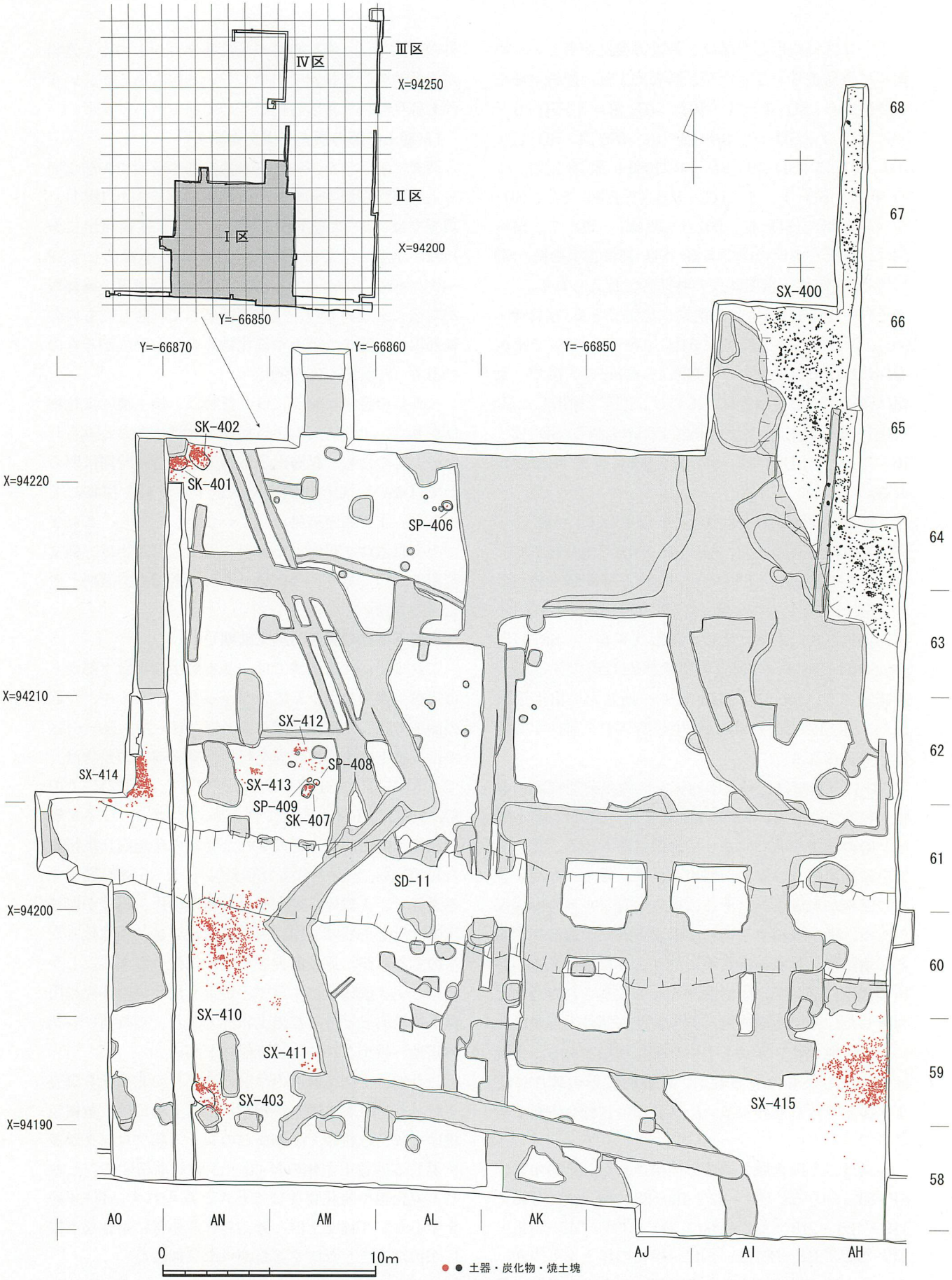


図51　00003調査（文京遺跡21次）Ⅳ層上半部（縄文時代後期？）およびSX-400（縄文時代晩期終末～弥生時代前期初頭）遺構配置図（縮尺　1/250）

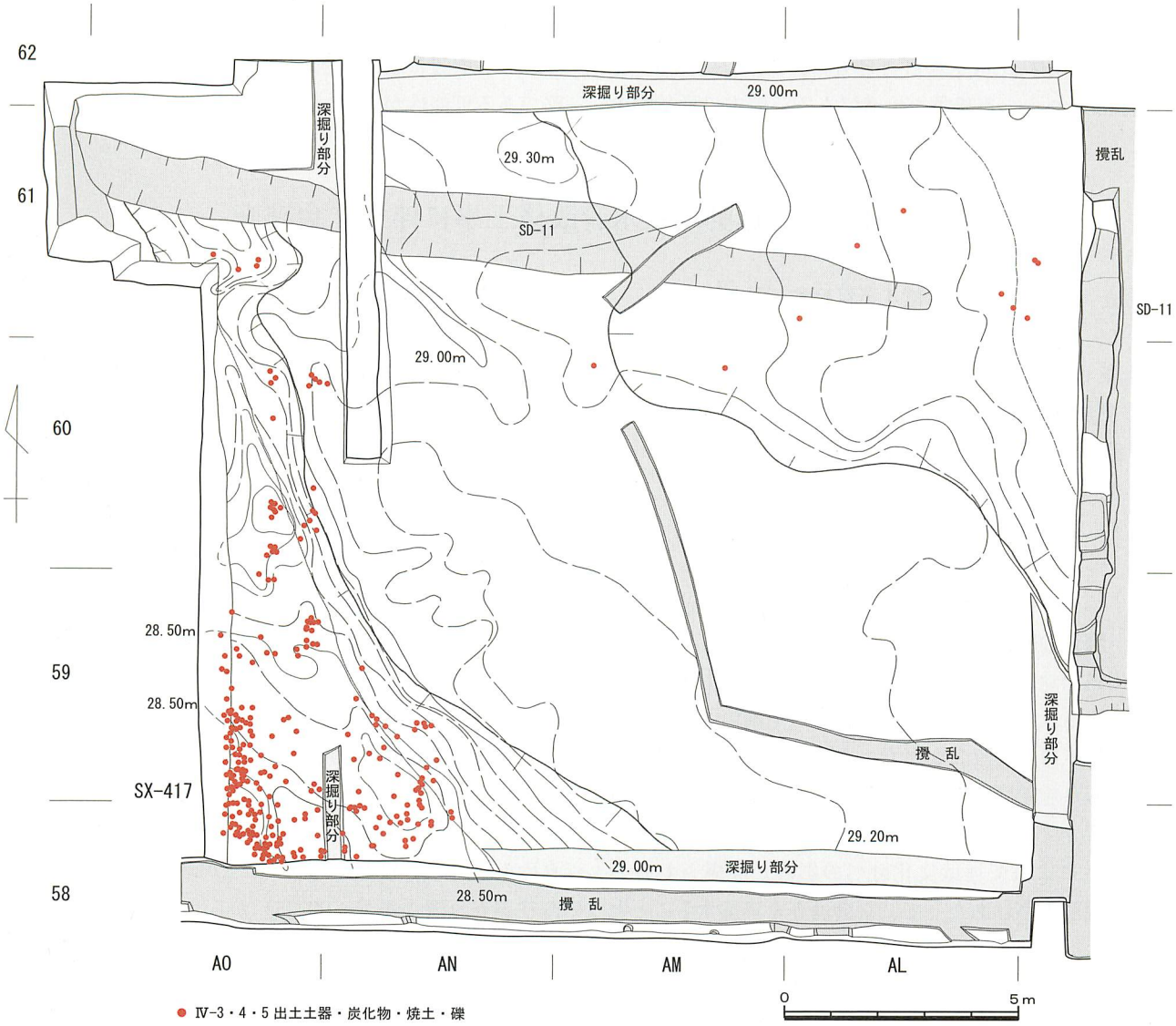


図52　00003調査（文京遺跡21次）SX-417（縄文時代前期）、Ⅴ層上面測量図（縮尺　1/150）

（b）　Ⅲ・Ⅳ区の概要

Ⅱ区北端のAC-66・67区～Ⅲ区南端のAB・AC-69区で、Ⅴ層の高まりを確認できた。Ⅲ区は、その北側にあたる。Ⅴ区の落ち際には、径２～５㎝の花崗岩円礫が混じる黒褐色砂質シルトが堆積し、弥生土器片が出土する。Ⅲ区南半のAB・AC-69～73区部分では、上層を黄灰色細砂土が覆い、これを切り込むSR-601～603の３条の自然河道を検出できた。また、SR-603の上層には基本層序Ⅱ層の旧水田層が堆積するが、Ⅲ区北端部ではⅡ層に伴う水路のSD-604と畦畔を調査区壁面の土層観察時に確認した（図49）。

Ⅳ区では、調査範囲が狭い上に、撹乱が著しく、遺構は検出できなかった。調査では、主として調査区の壁面の土層観察を行い、Ⅰ区との層序関係の整理に努めた。その結果、Ⅰ区北東隅で出土したSR-17とSX-400が包含される土層群に対応する土層を、部分的ではあるが確認できた（図50）。

4　調査のまとめ

今回の最大の調査成果は、これまで知られていなかった縄文前期の遺物溜りを確認できたことである。今後は、Ⅴ層上面までの調査が必要となってきた。また、Ⅳ層上半部で検出した遺構は、時期比定に決定的な手がかりはないものの、Ⅳ層の堆積状況から考えて縄文後期のものと考えられる。その性格については、理化学的な分析を通じて検討を加えて行きたい。

さらに、縄文晩期終末～弥生前期の土器溜り、竪穴式住居跡も、これまで文京遺跡では、調査例がほとん

どなかった時代の遺構である。とくに、SD-11・506は弥生前期に比定されるとともに、幅3.1～4.8m、総延長65m以上の直線的な大溝である。溝内の堆積物の状況から、かなりの流水が恒常的にあったことが考えられる。周辺に想定できる水田域に用水を導く大型水路である可能性が高い。（田崎）

00004　山越運動場上水管改修工事に伴う立会調査

調査地点　松山市山越４丁目11番10号
　　山越団地（図３）
調査面積　７㎡
調査期間　2001年１月15日
調査の種別　立会調査
調査担当　吉田広・三吉秀充
依頼文書　施設課長発事務連絡
　　（平成13年１月15日付）

1　調査の経緯

山越団地において、計水器の異常から、上水の遺漏が推測されるとの連絡があり、その遺漏箇所を特定して改修工事を行うこととなった。しかし、上水管敷設に関わる施工図面などはなく、敷設位置・深度はまったく特定できない状況にあった。やみくもに掘削を行うことによって埋蔵文化財への影響が憂慮されたため、掘削工事にあたって、立会調査を実施することとした。

2　調査の記録

［１トレンチ］（図53）

まず、厩舎南東側の洗い場脇で、管路の埋設深度を探るために掘り下げた。その結果、グラウンド表面から25～30cmの深度で上水管があらわれ、グラウンド表層の真砂土の深さにおさまっていることが確認された。

［２トレンチ］（図54）

合宿研修所東側で、管路の埋設深度を探るための掘り下げを行った。ここでも埋設深度は、現地表下50cmで、表土層内にとどまっていた。

3　調査のまとめと対応

１・２トレンチの所見から、上水管の敷設が、地表下50cm程度でおさまっていること、いずれも表土層・真砂土層内でとどまっていることが確認され、周辺の既往調査（調査番号：99205）からも、調査地周辺で

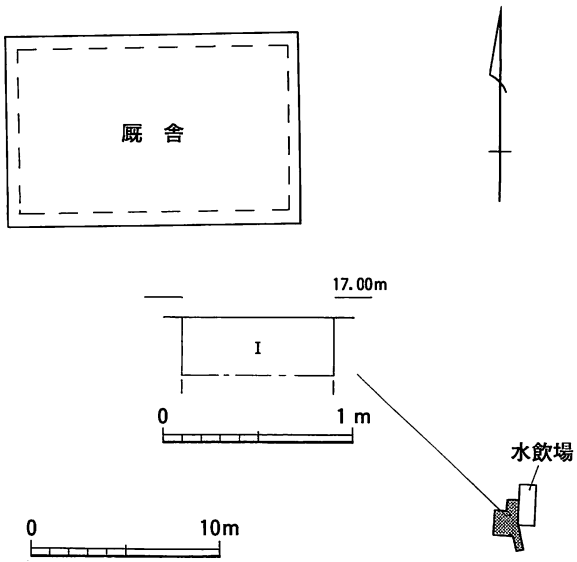


図53　00004調査１トレンチ位置図、土層柱状図
（縮尺　1/400、1/40）

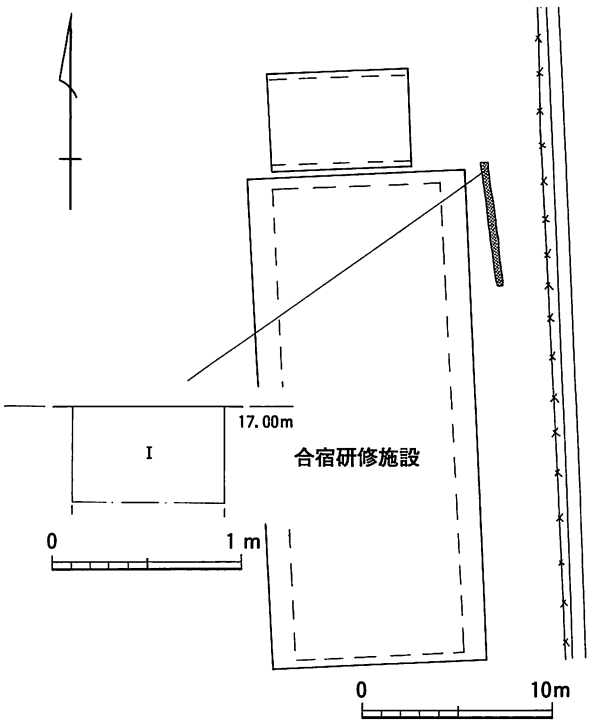


図54　00004調査２トレンチ位置図、土層柱状図
（縮尺　1/400、1/40）

は、上水管敷設深度では埋蔵文化財に関して影響がおよんでいないと判断できた。

以上の調査結果から、既存の上水管を掘り返しての改修工事にあたっては、埋蔵文化財への影響はないものと判断し、以後の慎重工事を依頼して、調査を終了した。（吉田）

00005　2000年度遺跡範囲確認調査（文京遺跡22次調査）

調査地点　松山市文京町３番
　　城北団地（図１）
調査面積　33㎡
調査期間　2001年１月23・24日
調査の種別　確認調査
調査担当　吉田広・三吉秀充

１　調査の経緯

城北キャンパス内のクレイテニスコート西側２面の改修工事が計画され、埋蔵文化財調査室は事前試掘調査を行った（調査番号：00002）。この機会に、これまで様相のまったく分かっていないテニスコート付近の状況を確認することを目的に、平成12年度の構内遺跡範囲確認調査を行うこととした。とりわけ、南側の文京遺跡18次調査（調査番号：99802）で確認された古代末から中世の水田層がどの程度広がるのか、水田層下の基本層序Ⅳ層の起伏がどのようになっているのかを把握することを主目的とした。

２　調査の記録

（１）　層位と遺構

トレンチは、改修するテニスコート内側は避け、その間に幅約３ｍ（トレンチ下端では約１ｍ）・長さ約33mの南北方向に設定した（写真100）。重機による掘削によって、中世水田層を断ち割り、Ⅳ層まで掘り下げを試みた（図55、写真101・102）。

表土層はいずれの地点でも比較的厚く、１ｍ前後を測る。表土層の下は水田層があらわれるが、水田層は近世・近代と推定される文京遺跡全域に広がるⅡ層と、文京遺跡18次調査（調査番号：99802）でみつかった中世水田層に対応する土層の２者がある。

前者に相当するのが、②～⑧層で、後者が⑨～⑮層である。ともに灰黄色から暗灰黄色を呈する。②～⑧層は、シルト質土を基本とし、やや粘性が高く、しまりは弱い。これに対して、⑨～⑮層は、やや粘性土の塊が混じる砂質土で、しまりはやや弱い。⑬層上面では耕作に伴うとみられる凹凸を確認している。

水田層の下の⑯～㊹層は、砂質土層・砂層・砂礫層・シルト層と変化に富むが、いずれも水流に伴う堆積である。ただし、そのような砂質土を中心とした変化に富む堆積物は、灰色砂礫混じりのシルト層とその下層で砂礫層を検出した文京遺跡18次調査（調査番号：99802）の古代末から中世の水田層下層とは異なる。同じ中世の水田層が形成されながらも、その水田が営まれた窪地の形成過程は若干の異同があるらしい。

これに対応して、今回の調査区で検出したⅣ層上面のレベルも南から北へと単純に傾斜するものではない。調査区南端ではⅣ層まで達しておらず、X＝94164付近の断割りでは、標高25.65mでも依然として流路内堆積が続く。ところが、X＝94170付近の断割では、北上がりの傾斜のⅣ層（㊺層）があらわれ、以北のX＝94186付近まで馬の背状に高まり、最高所で標高25.45mを測る。そして、X＝94186以北で再びⅣ層が確認できなくなり、流路内堆積へと変わる。調査区北端では標高24.15mまで掘り下げたが、流路底には達しておらず、シルト層である㉛層が認められた。なお、この落ち込みの南岸には、Ⅲ層の一種とみられる粘性の高い暗褐色シルトの㊱層がわずかながらあり、ここから縄文晩期終末の突帯文土器（図56-１）が出土している（写真103）。

（２）　出土遺物（図56）

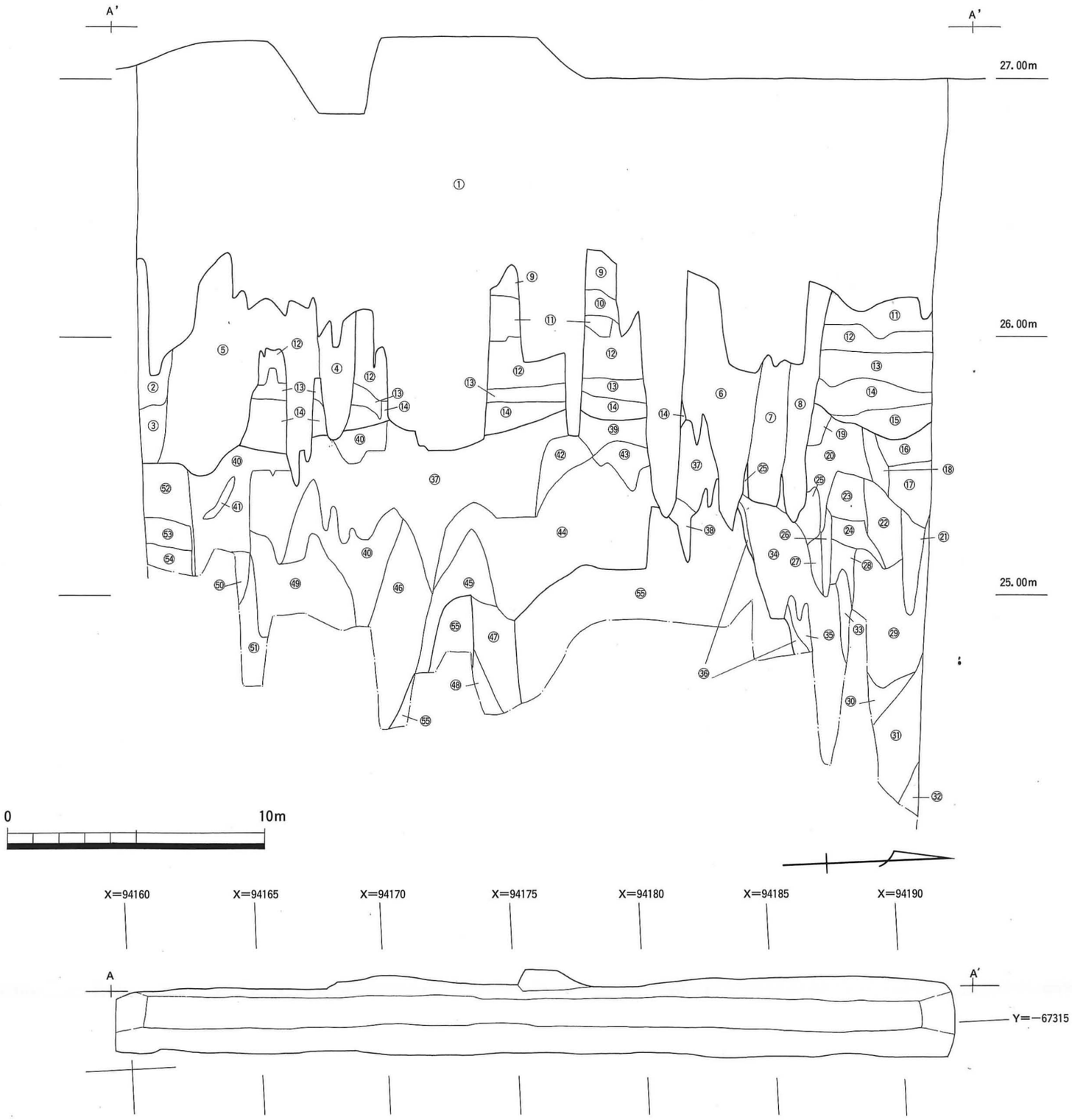
１は㊱層出土で、刻目突帯文深鉢の外反する口縁部の破片である。口縁端部を欠くが、口縁から少し下がってやや低平な突帯を貼り付け、D字形より米粒状と言える刻目を施す。道後今市遺跡10次調査や南海放送遺跡出土刻目突帯文土器に類似する。

２～４は、近世・近代の水田層である⑥層から出土した。２は、須恵器の坏底部で、本来あった貼付高台が剥落している。８世紀後半と推定される。３は、備

写真100　00005調査（文京遺跡22次）全景（南から）

写真101　00005調査（文京遺跡22次）土層断面（南から）

図55　00005調査（文京遺跡22次）平面図および土層断面図（縮尺 1/200、1/20）



①：瓦礫を伴った造成土。
②：灰黄色（2.5Y6/2）砂質シルト。径1㎜前後の砂粒が多く混じる。
③：灰黄色（2.5Y6/2）砂質シルト。浅黄色（2.5Y7/4）砂質土が混じる。鉄分・マンガンの沈着。
④：灰黄色(2.5Y7/2)砂質シルト。砂質強い。明オリーブ灰色(2.5GY7/1）シルトの塊が少量混じる。
⑤：灰黄色（2.5Y6/2）砂質シルト。明黄褐色（2.5Y7/6）砂質シルトのブロック、径1㎝未満の円礫が混じる。
⑥：灰黄色（2.5Y5/2）砂質土。径1～3㎜の砂礫を多く含む。下部から遺物が出土。
⑦：灰黄色（2.5Y6/2）砂質土。粘質土・砂質土を斑状に含む。
⑧：暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土。径1～5㎜の砂礫が多く混じる。
⑨：灰黄色（2.5Y7/2）砂質シルト。径1㎜の砂粒を多く含む。
⑩：灰黄色（2.5Y7/2）砂質シルト。明黄褐色シルトが混じる。
⑪：暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土。炭化物を点々と含む。径1㎜前後の砂粒が混じる。しまりあり。
⑫：灰黄色（2.5Y7/2）砂質シルト。径1～2㎜の砂粒が多く混じる。上部に鉄分・マンガンが沈着。
⑬：灰黄褐色（10YR6/2）シルト。砂礫を含む。上層と比べて、砂性が弱い。上部に凹凸が認められる。
⑭：灰黄色（2.5Y6/2）砂質土。明黄褐色のブロックを含む。砂性強い。下部に鉄分・マンガン沈着。
⑮：にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土。鉄分・マンガン沈着。粘性あり。径1㎜の砂粒が混じる。
⑯：灰白色（2.5Y7/1）砂質土。しまり弱い。
⑰：黄灰色（2.5Y6/1）砂質シルト。径1㎜の砂粒が少量混じる。
⑱：黄灰色（2.5Y5/1）砂質土。径2㎜の砂粒が混じる。しまりあり。
⑲：灰黄褐色（10YR6/2）砂質土。鉄分・マンガン沈着。しまりあり。
⑳：黄灰色（2.5Y6/1）砂質土。
㉑：灰黄色（2.5Y6/2）砂礫。径1㎜～3㎝の砂礫が多く混じる。
㉒：にぶい黄色（2.5Y6/3）砂質土。砂礫を少量含む。粘性あり。
㉓：灰黄褐色（10YR5/2）砂質土。径0.5㎜の砂粒を多く含む。
㉔：灰黄褐色（10YR6/2）砂質土。
㉕：灰黄褐色（10YR5/2）砂礫。径5㎜未満の砂礫が多く混じる。砂層もラミナ状に入る。
㉖：暗褐色（10YR3/3）粘質土。粘質高く、しまりあり。上層は砂礫を多く含む。Ⅲ層の再堆積層。対面の東壁土層断面にも、同じ堆積層あり。溝の可能性あり。
㉗：灰黄褐色（10YR6/2）砂質土。しまりあり。㉘：灰黄褐色（10YR6/2）砂質土。
㉙：にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質土。径1㎜の砂粒が多く混じる。やや粘性あり。
㉚：にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質土。径1㎜の砂層とシルト質土層とが互層をなす。
㉛：灰黄色（2.5Y6/2）シルト。粘性強い。北壁際はグライ化。
㉜：にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土。径0.5㎜の砂粒からなる。層状に粘質土が入る。
㉝：にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土。径1㎜前後の砂粒を含む。
㉞：直径1㎝大の砂礫層。
㉟：にぶい黄色（2.5Y6/3）砂質土。粘性強い。
㊱：暗褐色（10YR3/3）シルト。粘性強い。Ⅲ層の再堆積層。
㊲：暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質シルト。径5㎜未満の砂礫が多い。
㊳：径5㎜の砂礫層。
㊴：灰黄色（2.5Y6/2）砂質土。
㊵：灰黄色（2.5Y7/2）砂質土。
㊶：黄灰色（2.5Y5/1）砂礫。径2～3㎜の砂礫からなる。
㊷：暗灰色砂質土。
㊸：灰黄色（2.5Y6/2）砂質土。
㊹：浅黄色（2.5Y7/4）砂質土～浅黄色（2.5Y7/3）砂質土。
㊺：親指先大の円礫層。
㊻：灰白～暗灰色砂質土。親指先大の円礫を少量含む。
㊼：暗灰色砂質土。径1㎜未満の砂粒。
㊽：灰色砂礫。小指先以下の円礫・砂からなる。
㊾：灰白色砂礫。親指先大の円礫が主体。
㊿：灰白色砂礫。親指先大以下の円礫が主体。
(51)：灰黄色（2.5Y6/2）砂礫。径1～2㎜の砂粒を含む。
(52)：灰黄色（2.5Y6/2）砂質シルト。浅黄色（2.5Y7/4）砂質土が混じる。鉄分・マンガン沈着。
(53)：浅黄色（2.5Y7/3）砂質土。
(54)：灰白色砂礫。親指先大以下の円礫主体。
(55)：浅黄色（2.5Y7/4）シルト。粘性強い。

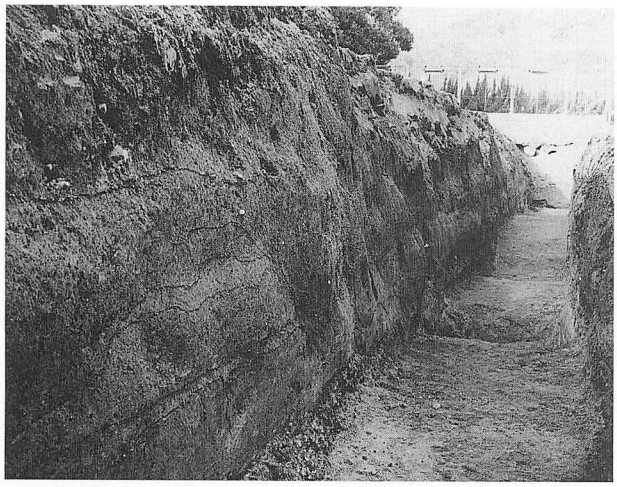


写真102　00005調査（文京遺跡22次）西壁土層断面（南から）

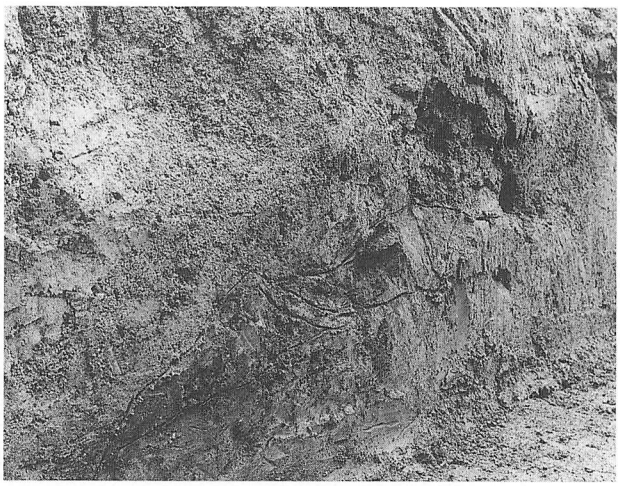


写真103　00005調査（文京遺跡22次）東壁遺物出土状況（北西から）

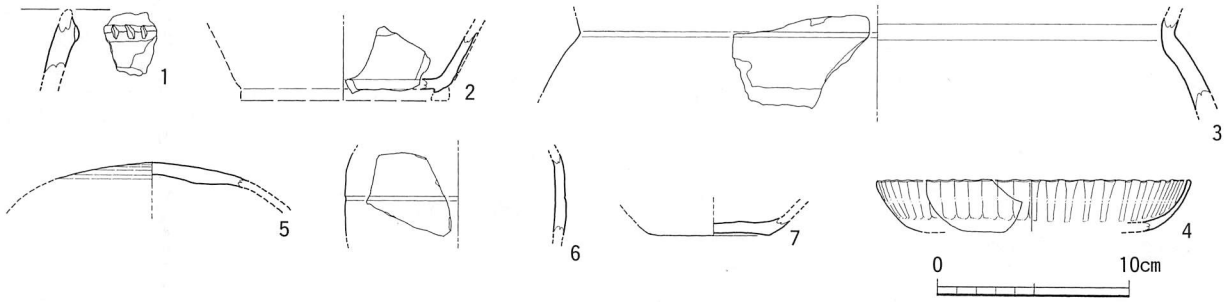


図56　00005調査（文京遺跡22次）出土遺物実測図（縮尺　1／4）

前焼の大甕の屈曲部で、内面の屈曲はやや弱い。口縁部は直立気味に立ち上がり、胴部は大きく張るものと考えられる。13世紀中頃～14世紀初頭のものである。4は、白磁の菊皿である。内外面に蓮弁文が施される。16世紀後半のものと思われる。

5～7は表土層の出土遺物である。5は、須恵器の蓋である。天井部外面に回転ヘラケズリが施される。6世紀後半のものと思われる。6は、須恵器の壺の胴部である。胴中位に1条の浅い沈線文が施される。7世紀前半のものと思われる。7は、土師器の坏もしくは皿の底部である。底面には板状工具による板目の痕跡が残る。

3　調査のまとめ

今回の調査では、テニスコート付近の旧地形の復元と、それに対応した中世水田層の広がりを確認することが主目的であった。中世水田層については、⑨～⑮層として、近世・近代水田層に切られながらも、ほぼ調査区全域で認めることができた。一方、その水田が形成されるための旧流路の埋没については、周辺の文京遺跡17次調査（調査番号：99602）や文京遺跡18次調査（調査番号：99802）と比較しても同一とは言えず、わずかな微細地形の相違とそれに伴う埋没過程の異同が想定されることになった。

すなわち、本調査地点では、18次調査地点から単純にそのまま北下がりに傾斜するのではなく、一旦低位の微高地とでもいえる高まりを形成して再び北側に深く落ち込んでいる。この微高地に関しては、文京遺跡17次調査（調査番号：99602）トレンチ北端でのⅣ層の高まりに対応するものとみられる。一方、流路内堆積物も、18次調査地点とは様相が大きく異なり、同一の埋没環境であったとは考え難い。このように、古代末から中世の水田層が営まれる東西方向の窪地・自然流路は、その微細地形の起伏や流路の単位が複雑に形成されており、その埋没過程も一様でなかったことが考えられる。

したがって、弥生時代中期後葉から後期中葉の文京遺跡集落の盛期を支えた生産基盤と目される一帯では

あるが、現時点で、その当時に進んでいた自然流路の埋没状況と水田層自身の存在はいまだ確認されていない。あるいは、この一帯に弥生時代水田層を想定することに無理があるのかも知れない。いずれにせよ、より詳細な窪地・自然流路の埋没過程が明らかにされた上で、詳細を検討すべき課題であろう。なお、本調査の低位微高地落ち際で出土した縄文時代晩期終末の突帯文土器の存在は、その埋没時期を特定するのに有効な指標となろう。また、北西方向の南海放送遺跡や、道後今市遺跡まで含めて、当時の生活域を考える上で重要な資料である。（吉田）

00006　教育学部クレイテニスコート改修工事に伴う立会調査

調査地点　松山市文京町３番
　　城北団地（図１）
調査面積　１㎡
調査期間　2001年１月23・24日
調査の種別　立会調査
調査担当　吉田広・三吉秀充
依頼文書　施設課長発事務連絡
　　（平成12年12月27日付）

1　調査にいたる経緯

城北キャンパス内のクレイテニスコート西側２面の改修工事が計画された。埋蔵文化財調査室では事前試掘調査（調査番号：00002）を行い、テニスコート表面の掘削深度では埋蔵文化財への影響はないことが確認されている。ただし、ネット用ポールの埋設にあたっては、既設のポールを撤去し、新たにコート面から90㎝を掘削するため、埋蔵文化財への影響が考慮された。この地点に関してのみ、立会調査を実施することとした。

2　調査の記録

調査地点は、テニスコート２面分のネット用ポール

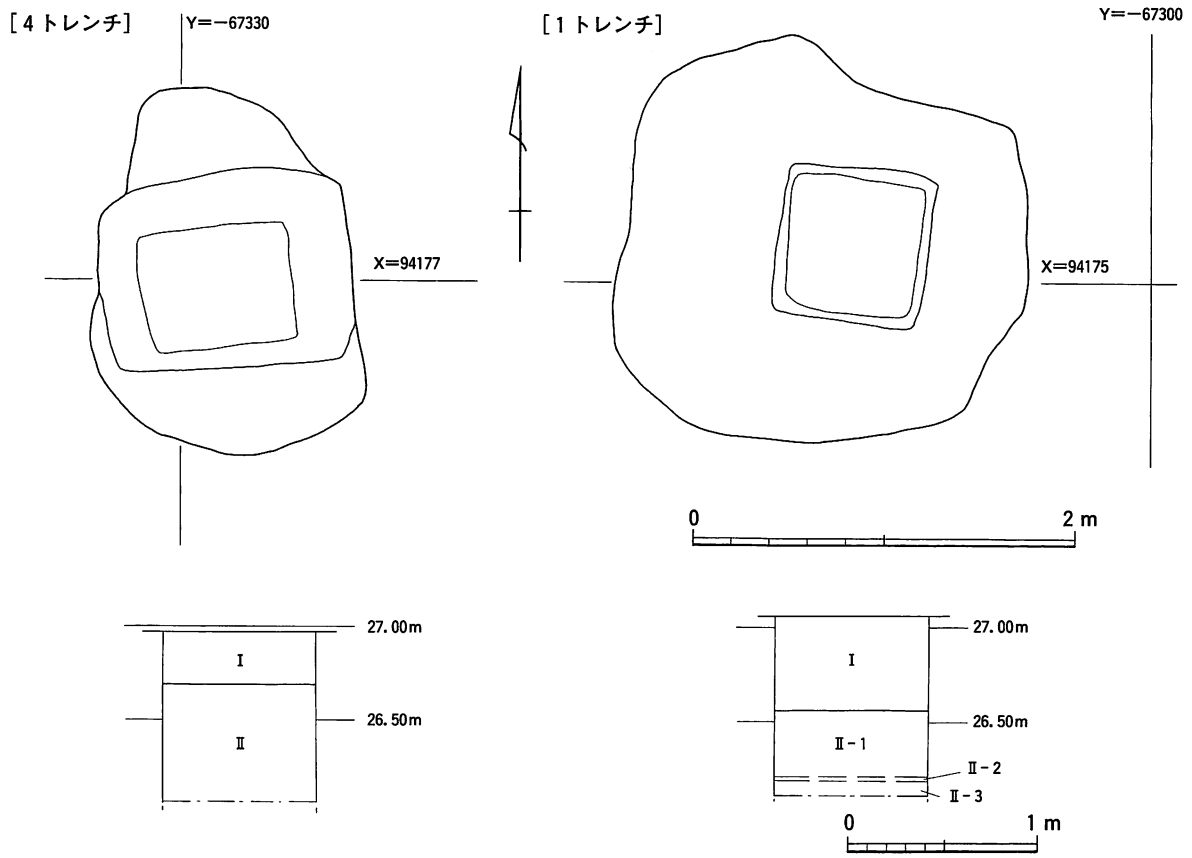


図57　00006調査１・４トレンチ平面図、土層柱状図（縮尺　1/40）

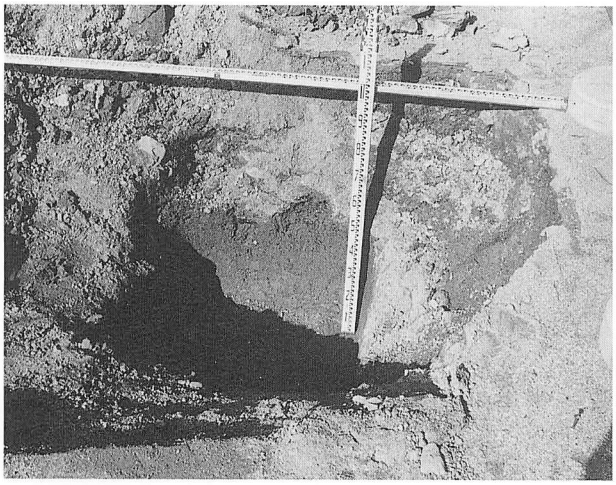


写真104　00006調査１トレンチ（南から）

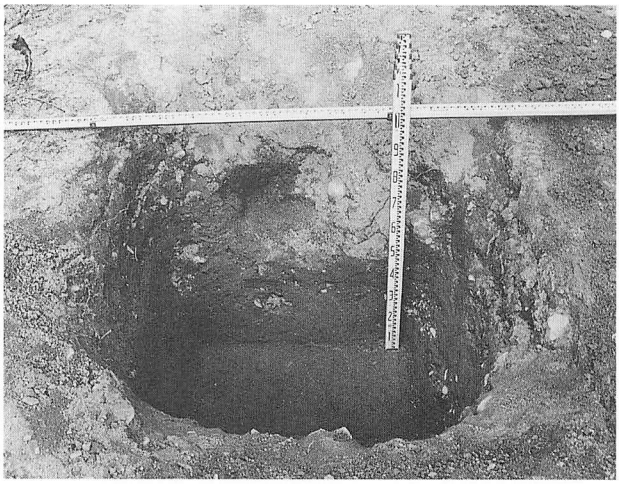


写真105　00006調査４トレンチ（南から）

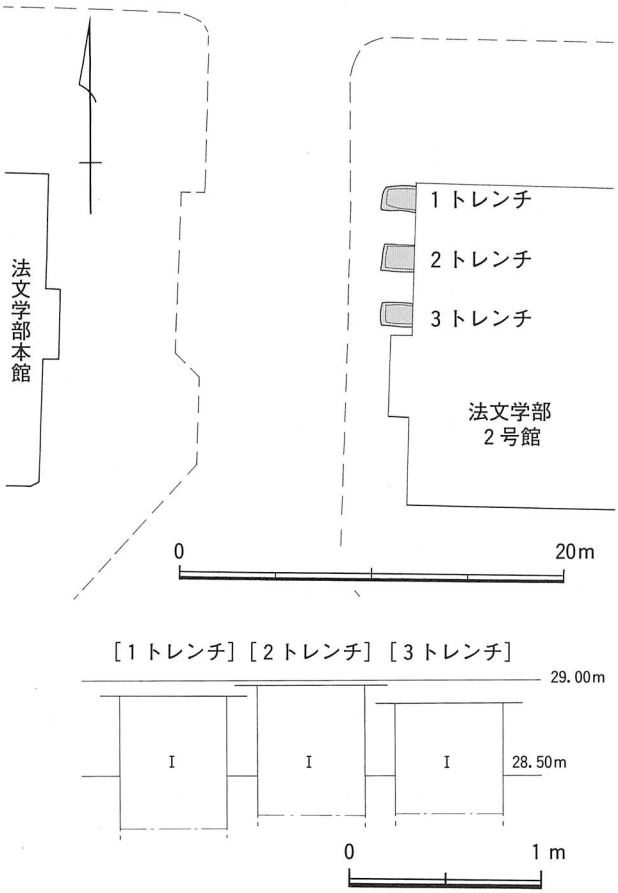


図58　00007調査１～３トレンチ位置図、土層柱状図
（縮尺　1/400、1/40）

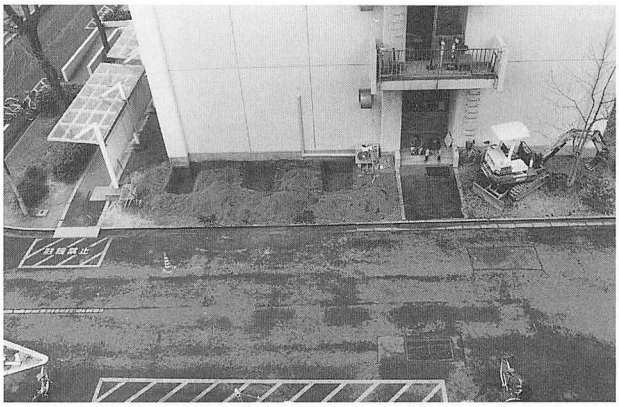


写真106　00007調査区全景（西から）

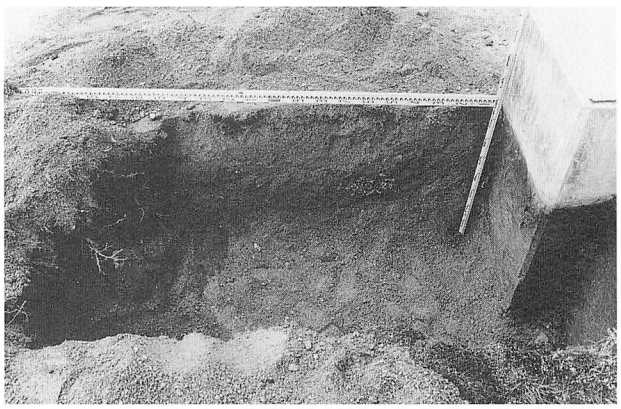


写真107　00007調査１トレンチ（南から）

４基の地点である。東側から１～４トレンチとした。ただし、２・３トレンチは、同時平行で行った2000年度構内遺跡範囲確認調査（調査番号：00005）と隣接し、掘削深度で埋蔵文化財に影響のないことが推測されたので、これらの立会調査は行わなかった。

［１トレンチ］（図57、写真104）

地表下約50cmまでは、テニスコート真砂土および表土層が続き、それ以下はⅡ層である。さらに、上層から、にぶい黄色砂質シルトで径１～２㎜の砂粒が多く混じるⅡ－１層、鉄分やマンガンが沈着する明黄褐砂質シルトのⅡ－２層、にぶい黄色砂質シルトで径１～２㎜の砂礫が多く混じるⅡ－３層に分層できる。

［４トレンチ］（図57、写真105）

地表下約30cmまでは、テニスコート真砂土および表土層で、以下はⅡ層が続く。この地点のⅡ層は、径１～２㎜の白色砂粒が多く混じるにぶい黄色砂質シルトで、小指先大の明黄褐砂質土塊を斑状に多数含む。水田層の可能性が高い。

３　調査後の対応

以後の慎重工事を依頼して調査を終えた。（吉田）

00007　法文学部掲示板設置工事に伴う立会調査

調査地点　松山市文京町３番
　　城北団地（図１）
調査面積　５㎡
調査期間　2001年３月15日
調査の種別　立会調査
調査担当　吉田広・三吉秀充
依頼文書　法文学部長発事務連絡
　　（平成13年２月８日付）

１　調査にいたる経緯

法文学部が２号館西側に掲示板を新設する計画を立案した。埋蔵文化財への影響を考慮して、建物本体に近接した場所が選ばれたが、明確な余掘り幅に関するデータがないため、立会調査を実施することとした。

２　調査の記録

掲示板設置に伴う掘削地点は、その基礎部分３ヶ所であり、建物北西隅に接する１トレンチから南へ２・３トレンチとした（図58、写真106）。いずれのトレンチでも、建物壁から約1.8mの範囲で、地表下約60～70cmまで掘削したが、埋め戻しの真砂土が続く（写真107）。この範囲は、建物建設時の余掘り内と推定できる。

３　調査後の対応

以後の慎重工事を依頼して調査を終えた。（吉田）

00008　御幸寮外灯設備改修その他工事に伴う立会調査

調査地点　松山市御幸町２丁目３番15号
　　御幸団地（図４）
調査面積　３㎡
調査期間　2001年３月16日
調査の種別　立会調査
調査担当　吉田広・三吉秀充
依頼文書　施設課長発事務連絡
　　（平成13年３月５日付）

１　調査にいたる経緯

御幸寮の外灯設備が改修されることとなった。御幸寮のある御幸団地については、これまで調査は行われておらず、団地内の埋蔵文化財の状況については把握できていなかった。そこで、改修工事に併せて、立会調査を実施し、御幸団地における埋蔵文化財状況の把握を試みることとした。

２　調査の記録

新たに設置される外灯は４基で、その基礎部分の調査を行った。南側の御幸団地入り口から１～４トレンチとした。

［１トレンチ］（図59・60、写真108）

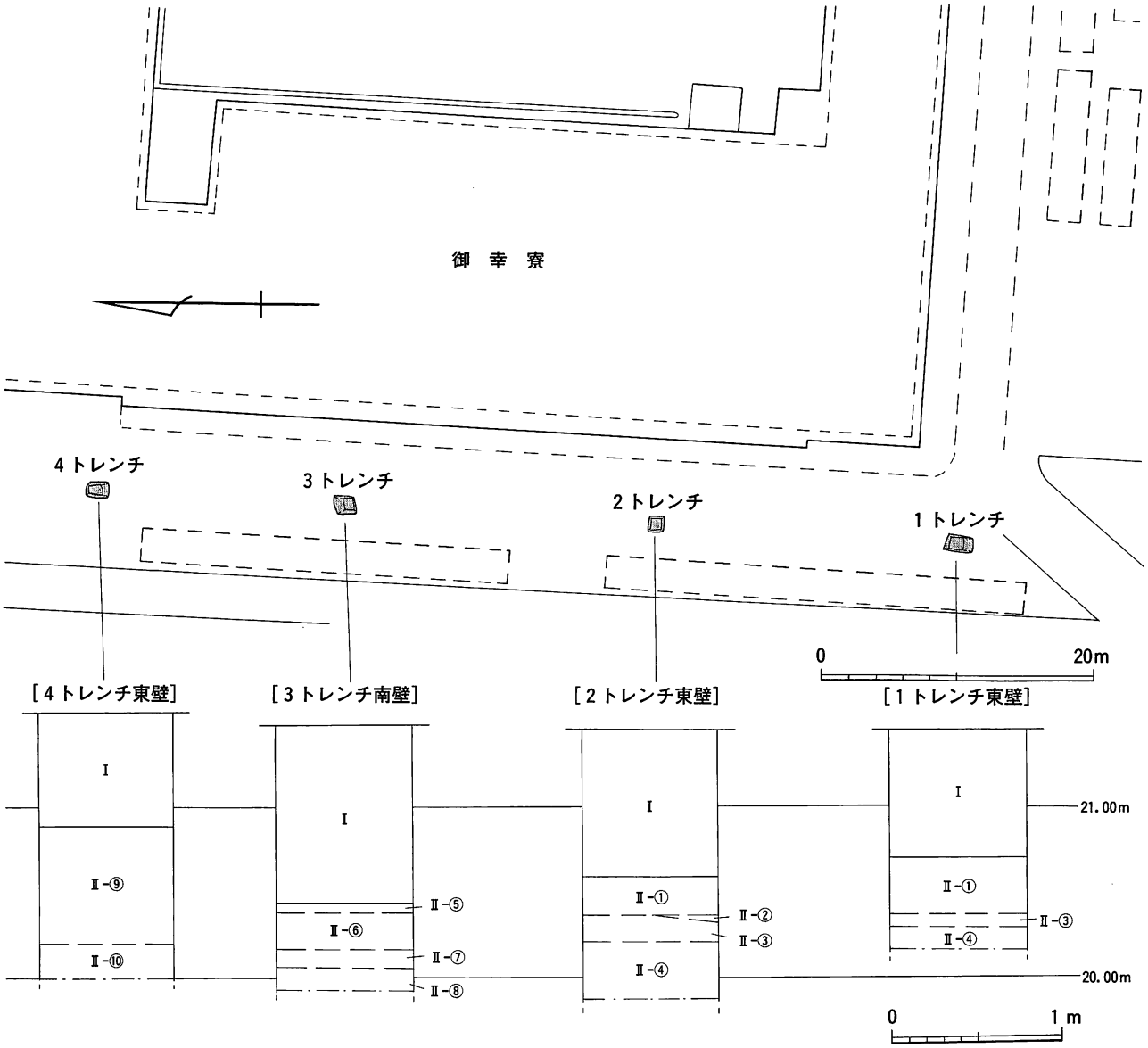


図59　00008調査１～４トレンチ位置図、土層柱状図（縮尺　1/500、1/40）

現地表下75cmまで造成土が続く（Ⅰ層）。以下には、1.3mまで灰黄色系土であるⅡ層が堆積する。

Ⅱ層は、１トレンチで３層に分層できる。Ⅱ-①層は、砂礫が多く混じる黄灰色砂質シルトで、近・現代の陶磁器が出土。当該期の水田層と考えられる。Ⅱ-③層は明黄褐色粘質土である。上下の層に比して粘性が強く、鉄分・マンガンが沈着する。Ⅱ-④層は、砂礫が多く混じる暗灰黄色シルトで、水田層の可能性が高い。同層から、土師器の三足付き羽釜の脚片が出土（図60-１）。13～14世紀のものと思われる。

［２トレンチ］（図59、写真109）

現地表下85cmまで造成土のⅠ層が続く。Ⅱ層は４層に分層できる。Ⅱ-①層は、土質などは１トレンチのⅡ-①層と同じであるが、炭化物が少量出土。Ⅱ-②層は、灰黄色砂質土で、径１～３cmの礫を主体とする。Ⅱ-③層は、明黄褐色シルトと黄灰色シルトの塊が混合し、灰白色砂礫が混じる。Ⅱ-④層は、灰黄褐色シルトの塊と灰黄色砂質土からなる。上部に、丸い明黄褐色シルト塊が混じる。遺物は出土していない。

［３トレンチ］（図59・60、写真110）

現地表下105cmまで瓦礫を伴った造成土であるⅠ層が続く。Ⅱ層は４層に分層が可能である。Ⅱ-⑤層は、暗灰黄色砂質シルトで、径１～２mmの砂粒が混じる。Ⅱ-⑥層は、Ⅱ-⑤層と土質は同じだが、やや粘性が強く、径２～３mmの礫が多く含まれる。上部は明黄褐色を呈する。Ⅱ-⑦層は、明黄褐色シルト。Ⅱ-⑧層

写真108　00008調査１トレンチ（西から）

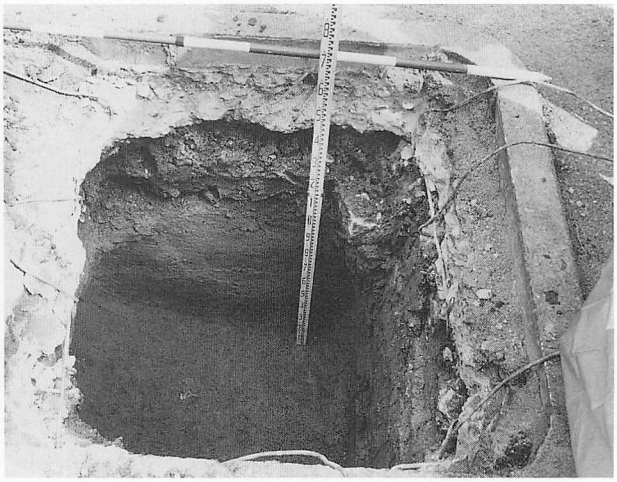


写真109　00008調査２トレンチ（西から）

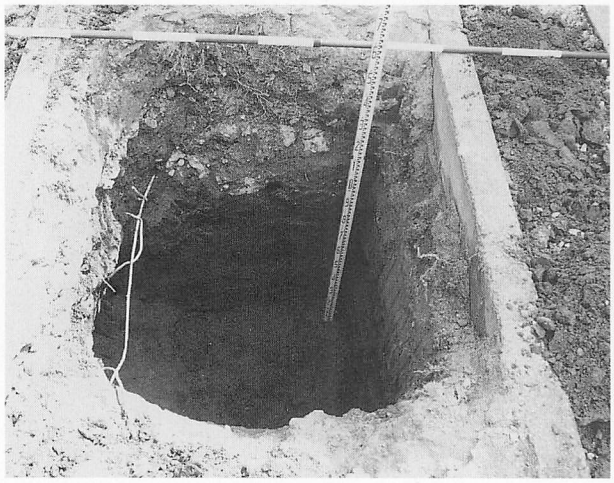


写真110　00008調査３トレンチ（北から）

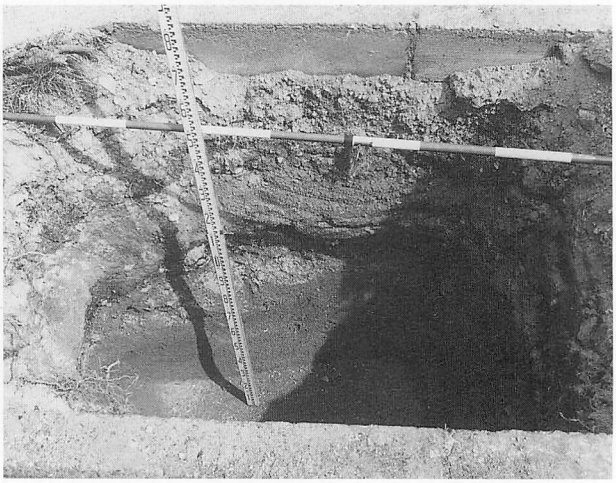


写真111　00008調査４トレンチ（西から）

は、灰黄色シルトを主体として、丸い灰黄褐色シルト塊が混じる。砂礫はあまりみられない。同層中から、龍泉窯系青磁碗の口縁部が出土した（図60-２）。幅広の蓮弁文が描かれ、13世紀代のものと考えられる。

［４トレンチ］（図59、写真111）

現地表下65cmまで瓦礫を伴った造成土のⅠ層が続く。Ⅱ層は２分できる。Ⅱ-⑨層は、黄灰色砂質シルトで、径１～２㎜の砂粒が多く混じる。Ⅱ-⑩層は、暗灰黄色砂質シルトで、丸い灰黄褐色シルト塊を含む。径１～３㎜の砂礫が多く混じる。調査区内の壁面に立ち上がりはみられないものの、砂礫の多寡などから、溝の埋土である可能性が高い。上部は鉄分・マンガンが沈着して明黄褐色を呈する。

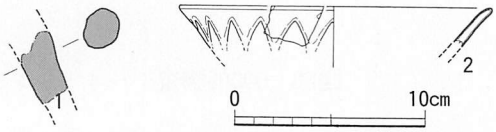


図60　00008調査出土遺物実測図（縮尺　1／4）

3　調査のまとめ

今回の調査では、各所で水田層と考えられる堆積物を確認でき、水田に伴う水路の可能性が高い溝を４トレンチで検出した。出土遺物は少ないが、１トレンチⅡ-④層で13～14世紀の羽釜、３トレンチⅡ-⑧層でも13世紀に位置付けられる龍泉窯系青磁碗が出土している。これらより新しく遺物はみられないので、現段階では13～14世紀代の水田層と考えておく。

今回の調査によって、御幸寮周辺に13～14世紀代前後の水田が広がっている可能性が高くなった。今後、御幸団地内において造成土であるⅠ層以下の層に掘削がおよぶ際には、事前に調査が必要である。

（三吉・上山）

表４　愛媛大学構内における調査一覧（2003年３月現在まで）

調査番号	遺跡名 次数	団地	工事名	調査種別	調査担当	面積（m²）	調査期間	文献
EU-97501	文京遺跡１次	城北	工学部海洋工学科校舎新営工事	全面	長井数秋(註1)	750	19750801～19750824	1
EU-98001	文京遺跡２次	城北	工学部資源化学科校舎新営工事	全面	西尾幸則(註1)	600	19800708～19800930	5
EU-98101	文京遺跡３次	城北	法文学部校舎新営工事	全面	西尾	800	19820110～19820325	5
EU-98301	文京遺跡	城北	雨水管・汚水管・ガス管埋設工事	立会	西尾	1,374		
98302	文京遺跡	城北	教育学部校舎建設工事	立会	西尾	－		
EU-98401	文京遺跡５次	城北	工学部危険物貯蔵庫新営工事	全面	西尾	18	19841026～19841028	5
EU-98601	文京遺跡６次	城北	城北地区基幹整備事業	全面	下條信行(註2)	99	19861000	
98602	文京遺跡７次	城北	法文学部校舎増築工事	全面	下條	142	19860800～19860900	
98603	文京遺跡８次	城北	城北団地基幹整備事業	全面	下條	854	19861125～19870218	3
98604	樽味遺跡	樽味	連合農学研究科校舎新営工事	試掘	下條	5	19870109	
98605	鷹子遺跡	鷹子	国際交流会館新営工事	試掘	下條	47	19870116	
EU-98701	鷹子遺跡１次	鷹子	国際交流会館新営工事	全面	宮本一夫	962	19870720～19870920	2
98702	樽味遺跡	樽味	連合農学研究科校舎新営工事	試掘	下條信行	18	19870820～19870821	7
98703	樽味遺跡	樽味	附属高等学校課外活動施設新営工事	試掘	下條	6	19870820	7
EU-98704	樽味遺跡１次	樽味	連合農学研究科校舎新営工事	全面	宮本	684	19871028～19871217	2
98705	文京遺跡	城北	城北地区プール廻り浄化装置増設工事	試掘	宮本	2	19871113	7
98706	文京遺跡９次	城北	城北地区プール廻り浄化装置増設工事	全面	宮本	62	19880111～19880129	3
EU-98801	文京遺跡10次	城北	工学部情報工学科校舎新営工事	全面	宮本	1,075	19880919～19890303	4
98802	文京遺跡	城北	城北地区基準点等設置工事	試掘	宮本	5	19881013	7
98803	文京遺跡	城北	工学部講義棟高圧ケーブル埋設工事(その１)	試掘	宮本	2	19881208	7
98804	文京遺跡	城北	工学部講義棟高圧ケーブル埋設工事(その２)	試掘	宮本	1	19881212	7
98805	文京遺跡	城北	工学部情報工学科校舎排水施設取設工事	立会	宮本	6	19890207	7
98806	文京遺跡	城北	工学部情報工学科校舎給水施設取設工事	立会	宮本	3	19890209～19890210	7
EU-98901	文京遺跡11次	城北	法文学部講義棟身障者用昇高機取設工事	全面	宮本	85	19890801～19890829	3
98902	文京遺跡	城北	城北団地電波障害用の外線工事	立会	宮本	2	19900303	7
EU-99001	文京遺跡	城北	城北団地囲障・教育学部自転車置場新設工事	試掘	宮本	3	19900808	7
EU-99101	樽味遺跡２次	樽味	農学部研究実験棟新営工事	全面	田崎博之	506	19920107～19920228	6
99102		津田山	教育学部附属養護学校日常生活訓練施設建設	試掘	下條	13	19910608	7
99103	文京遺跡	城北	城北団地囲障(Ⅱ期)改修及び外灯改修工事	試掘	下條	36	19910821	7
EU-99201	樽味遺跡	樽味	農学部屋外ガス本管改修工事	立会	田崎	6	19920526	7
99202	文京遺跡	城北	城北地区東側囲障改修工事	試掘	田崎	3	19920730	7
99203	樽味遺跡	樽味	附属図書館農学部分館新営工事	試掘	田崎	1	19920826	7
99204		重信	医学部附属病院病歴室新営工事（その１）	試掘	田崎	3	19920826	7
99205		山越	1992年度構内遺跡確認調査（その１）	確認	田崎	57	19920828	7
99206	樽味遺跡	樽味	農学部拓翠寮他自転車置場新設工事(その１)	立会	田崎	3	19920921	7
99207	樽味遺跡	樽味	農学部拓翠寮他自転車置場新設工事(その２)	立会	田崎	2	19920921	7
99208	文京遺跡	城北	城北団地外灯設備改修工事	立会	田崎	2	19930126	7
99209		持田	教育学部附属小学校給水設備工事	立会	田崎	11	19931026	7
99210		重信	医学部附属病院駐車場取設工事	試掘	田崎	40	19921027	7
99211		重信	1992年度構内遺跡確認調査（その２）	確認	田崎	54.6	19930120～19930121	7
99212	文京遺跡	城北	城北団地情報通信設備工事	立会	田崎	11.8	19930308～19930309	7
99213		重信	医学部附属病院病歴室新営工事（その２）	試掘	田崎	6.8	19930322	7

調査番号	遺跡名 次数	団地	工事名	調査種別	調査担当	面積(㎡)	調査期間	文献
EU-99214	樽味遺跡	樽味	樽味団地自転車置場取設その他工事	立会	田崎	33.3	19930323	7
99215	文京遺跡	城北	城北団地交通規制遮断機取設工事	立会	田崎	2	19930324	7
EU-99301		重信	医学部看護学科校舎新営工事	試掘	田崎	20	19930524	7
99302	樽味遺跡	樽味	附属図書館農学部分館新営工事（樹木移植）	立会	田崎	14	19930624～19930625	7
99303	樽味遺跡	樽味	農学部自転車置場取設工事	試掘	田崎	80.8	19930827	7
99304	樽味遺跡３次	樽味	附属図書館農学部分館新営工事	全面	田崎	258.5	19930823～19931006	8
99305	文京遺跡	城北	城北団地大学会館廻り道路整備（樹木移植）工事	立会	田崎	2	19931109	7
99306	樽味遺跡	樽味	附属図書館農学部分館新営（外灯設備管路）工事	試掘	田崎	3	19931124	7
99307	樽味遺跡	樽味	城北団地他情報通信電気設備工事	立会	田崎	7	19931124	7
EU-99308	文京遺跡	城北	城北団地他情報通信電気設備工事(2)	立会	田崎	7.9	19931125	7
99309		持田	1993年度構内遺跡確認調査（その１）	確認	田崎	39	19931224～19931225	7
99310	文京遺跡	城北	城北団地情報機器更新電源容量増設工事	立会	田崎	3.7	19940118	7
99311	樽味遺跡	樽味	農学部附属図書館新営（排水管埋設）工事	立会	田崎	19.8	19940208・19940215	7
99312	樽味遺跡	樽味	農学部附属図書館新営(自転車置場)工事(2)	立会	田崎	29.7	19940208	7
99313	文京遺跡	城北	城北団地基幹整備（屋外環境）工事	試掘	田崎	14.8	19940209～19940216	7
99314	文京遺跡	城北	1993年度構内遺跡確認調査（その２）	試掘	田崎	37.9	19940329	7
EU-99401	桑原西稲葉遺跡３次	北吉井	東長戸他環境整備工事（その１）	立会	田崎	54.5	19940510～19940518	12
99402		東長戸	東長戸他環境整備工事（その２）	立会	田崎	9	19940517	7
99403	樽味遺跡	樽味	環境整備(附属高等学校他自転車置場)工事	試掘	田崎	7.8	19940524	7
99404	文京遺跡	城北	城北団地他環境整備（単車置場整備）工事	立会	田崎	1.4	19940607	7
99405	文京遺跡	城北	城北団地他環境整備(自転車置場設置)工事	試掘	田崎	81.3	19940608	7
99406	文京遺跡	城北	城北団地他環境整備(自転車置場･排水管設置)工事	立会	田崎	5.3	19940610	7
99407	文京遺跡	城北	城北団地他環境整備(排水枡及び管路取設)工事	試掘	田崎	5.9	19940801	7
99408	文京遺跡	城北	城北団地他環境整備(電気配管路取設)工事	試掘	田崎	3.2	19940801	7
99409	文京遺跡	城北	工学部岩盤切削試験機設置工事	立会	田崎	1.1	19940927	7
99410	文京遺跡12次	城北	工学部校舎新営［Ⅰ期］工事	全面	田崎	1,183	19941110～19950726	7
99411		津田山	教育学部附属養護学校野外施設（東屋）設置工事	試掘	田崎	33	19950127	7
EU-99501	文京遺跡	城北	教育学部運動場内鉄棒移設工事	立会	田崎	48	19950411～19950412	10
99502	文京遺跡	城北	教養部テニスコート(事務局北側)改修工事	試掘	田崎	9	19950801	10
99503	文京遺跡	城北	工学部南側囲障工事	立会	田崎	3	19950801	10
99504	文京遺跡	城北	理学部構内井戸工事	試掘	田崎	4	19950802	10
99505		山越	山越団地防球ネット取設工事	試掘	田崎	7	19950802	10
99506	文京遺跡13次	城北	地域共同研究センター新営工事	全面	田崎	890	19951017～19960412	10
99507	樽味遺跡	樽味	公共下水道枡設置工事	試掘	田崎	2	19951114	10
99508	桑原西稲葉遺跡	北吉井	北吉井宿舎公共下水道枡設置工事	試掘	田崎	2	19951115	10
99509	文京遺跡	城北	城北団地北西通用門改修工事	立会	田崎	3	19951116	10
99510	文京遺跡	城北	埋蔵文化財調査室改修工事	立会	田崎	1	19960131	10
99511	文京遺跡	城北	城北団地基幹整備（電線管等）工事	試掘	田崎	34	19960213～19960220	10
99512	文京遺跡	城北	城北団地事務局ガス管改修工事	立会	田崎	2	19960311	10
EU-99601	文京遺跡14次	城北	工学部校舎新営［Ⅱ期］工事	全面	吉田　広・三吉秀充	1,349	19960520～19970331	10
99602	文京遺跡15次	城北	1996年度構内遺跡確認調査	確認	田崎	225	19961113～19961209	10
99603	樽味遺跡	樽味	附属農業高等学校校舎新営工事	試掘	田崎	21.7	19961128～19961211	10
99604	樽味遺跡	樽味	附属農業高等学校温室新営工事	試掘	田崎	5	19961129	10
99605	樽味遺跡	樽味	農学部構内光ケーブル敷設工事	試掘	田崎	1	19961129	10
99606		持田	教育学部附属中学校プール改修その他工事	立会	田崎	3.6	19970204	10
EU-99701	文京遺跡16A次	城北	工学部校舎新営（Ⅲ期）工事	全面	田崎	1,384	19970428～19971222	11
99702	文京遺跡16B次	城北	工学部校舎新営（Ⅲ期）工事	全面	吉田・三吉	627	19970409～19970729	11
99703	樽味遺跡	樽味	ATMネットワーク工事	立会	田崎	131	19970414～19970417	11
99704	文京遺跡	城北	事務局案内板取設工事	立会	吉田・三吉	3	19970804	11

調査番号	遺跡名 次数	団地	工事名	調査種別	調査担当	面積(m²)	調査期間	文献
EU-99705		持田	持田団地構内光ケーブル布設工事	立会	吉田・三吉	5	19970804	11
99706		持田	持田団地北側囲障改修その他工事	試掘	吉田・三吉	6	19970805～19970806	11
99707	樽味遺跡	樽味	農学部附属農業高等学校校舎新営工事	試掘	吉田・三吉	12	19970806～19970807	11
99708	樽味遺跡	樽味	樽味団地(拓翠寮)の公共下水道枡設置工事	立会	吉田・三吉	2	19970807	11
99709	文京遺跡	城北	工学部校舎新営電気設備工事（その２）	立会	吉田・三吉	12	19970818～19970821	11
99710	桑原西稲葉遺跡４次	北吉井	北吉井宿舎屋外排水管改修工事	全面	吉田・三吉	100	19971008～19971031	12
99711	桑原遺跡５次	北吉井	北吉井宿舎屋外配水管改修工事	立会	吉田・三吉	32	19971112～19971118	12
99712	樽味遺跡４次	樽味	農学部附属農業高等学校校舎新営工事	全面	吉田・三吉	1,168	19971125～19980204	12
99713	樽味遺跡	樽味	附属農業高等学校運動場東側防護ネット及び第３棟東側フェンス増設工事	試掘	吉田・三吉	6	19971218	11
99714	樽味遺跡	樽味	附属農業高等学校校舎埋蔵文化財調査に伴う支障建物整備工事（農機舎及び車庫）	立会	吉田・三吉	187	19980204～19980206	11
99715	文京遺跡	城北	1997年度構内遺跡確認調査	確認	田崎・吉田・三吉	154	19980302～19980310	11
99716	樽味遺跡	樽味	附属農業高等学校運動場東側防護ネット及び第３棟東側フェンス増設工事	立会	吉田・三吉	21	19970311～19970312	11
99717	文京遺跡	城北	工学部校舎新営に伴う外表施設整備工事	立会	吉田・三吉		19980217	11
EU-99801	文京遺跡	城北	「大正天皇お手植えの松」移植工事	立会	田崎・吉田	1	19981104	11
99802	文京遺跡18次	城北	総合情報処理センター新営工事	本格	田崎	1,192	19981214～19990802	11
99803	文京遺跡	城北	工学部本館等事務室改修機械設備工事	立会	吉田	1	19981214	11
99804	樽味遺跡	樽味	遺伝子実験施設新営その他工事	試掘	吉田	22	19990128～19990129	11
99805	文京遺跡	城北	教育学部２号館南消火用水漏れ改修工事	立会	田崎・吉田	3	19990311	11
99806	文京遺跡	城北	理学部本館南消火栓管路改修工事	立会	田崎		19990316	11
99807	樽味遺跡５次	樽味	遺伝子実験施設新営その他工事	本格	吉田		19990316～19990721	12
99808		重信	医学部附属病院病棟建設工事	試掘	田崎・三吉	979	19990331～19990401	11
99809	文京遺跡	城北	学生会館ガス管改修工事	立会	吉田		19980631	11
EU-99901	文京遺跡19次Ⅰ区	城北	理工学等総合研究実験棟新営電気設備工事	全面	吉田	31	19990907～19990913	本書
99902	文京遺跡19次Ⅱ区	城北	理工学等総合研究実験棟新営電気設備工事	全面	田崎・三吉	94	19991201～19991217	本書
99903	樽味遺跡	樽味	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事（１期）	立会	吉田	1	19991006	本書
99904	樽味遺跡	樽味	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事（２期）	立会	吉田	25	19991025～19991029	本書
99905	樽味遺跡	樽味	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事（３期）	立会	吉田	31	19991124～19991128	本書
99906	樽味遺跡	樽味	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事（４期）	立会	吉田	3	20000128	本書
99907	文京遺跡	城北	「大正天皇お手植えの松」移植工事に伴う調査	立会	田崎	20	20000125	本書
99908	文京遺跡	城北	理工学等総合実験棟新営電気設備工事（その２）	立会	田崎	8	20000201	本書
99909	文京遺跡	城北	総合情報処理センター新営電気設備工事	立会	田崎・吉田	8	20000208	本書
99910	文京遺跡20次	城北	サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー新営工事	全面	吉田・三吉	588	20000214～20000620	本書
99911	文京遺跡	城北	大学会館改修工事	試掘	田崎	9	20000216	本書
99912	文京遺跡	城北	電灯移設工事	立会	田崎	1	20000216	本書
99913	樽味遺跡	樽味	農学部冬期間における水田の貯水状態での生態観察実験のための仮説水田の設置	立会	田崎	1	20000310	本書
99914	文京遺跡	城北	埋蔵文化財調査室情報通信設備工事	立会	田崎	19	20000313	本書
99915	文京遺跡	城北	法文学部講義棟空調電源工事	立会	田崎	1	20000313	本書
99916	樽味遺跡	樽味	農学部附属農業高等学校校舎新営工事	立会	吉田	－	19990507	本書
EU-00001	文京遺跡	城北	大学会館改修機械設備工事	立会	田崎	9	20000829～20000830	本書
00002	文京遺跡21次	城北	教育学部クレイテニスコート改修工事	試掘	吉田・三吉	2	20000913	本書
00003	文京遺跡	城北	基礎科学総合研究棟新営工事（工期）	全面	田崎・吉田・三吉	1,870	20010115～20000909	本書
00004		山越	山越運動場上水管改修工事	立会	吉田・三吉	7	20010115	本書

調査番号	遺跡名 次数	団地	工事名	調査種別	調査担当	面積(㎡)	調査期間	文献
EU-00005	文京遺跡22次	城北	2000年度構内遺跡確認調査	確認	吉田・三吉	33	20010123～20010124	本書
00006	文京遺跡	城北	教育学部クレイテニスコート改修工事	立会	吉田・三吉	1	20010123～20010124	本書
00007	文京遺跡	城北	法文学部掲示板設置工事	立会	吉田・三吉	5	20010315	本書
00008		御幸	御幸寮外灯設備改修その他工事	立会	吉田・三吉	3	20010316	本書
EU-00101	文京遺跡	城北	同窓会連合会による五葉松移植に伴う掘削工事	―	吉田	3	20010509	
00102	樽味遺跡	樽味	農学部寄附建物新営予定	試掘	吉田	16	20010607	
00103	文京遺跡23次	城北	四国電力による城北団地構内高圧線敷設工事	本格	吉田	7	20010626～20010709	
00104	文京遺跡	城北	工学部屋外給水管布設替工事	立会	吉田	1	20010801	
00105	文京遺跡24次	城北	基礎科学総合研究棟新営工事（Ⅱ期）	本格	吉田	640	20011001～20020326	
00106	樽味遺跡６次	樽味	環境産業研究施設新営工事	本格	田崎	1,205	20011115～20020206	
00107	文京遺跡	城北	事務局構内外灯設備移設工事	立会	吉田	6	20011121～20011127	
00108	文京遺跡	城北	教育学部４号館便所改修電気設備工事	立会	田崎	1.5	20020326	
EU-00201	樽味遺跡７次	樽味	農学部２号館改修工事	本格	田崎	170	20020403～20020523	
00202	文京遺跡25次	城北	情報教育棟新営工事	本格	吉田	1,022	20020601～20021218	
00203	文京遺跡	城北	情報教育棟用地埋蔵文化財調査に伴う土木工事	立会	吉田	―	20020515～20020517	
00204	文京遺跡26次	城北	総合研究棟（旧工学部本館）等改修工事	本格	田崎	70	20020719～20020809	
00205	文京遺跡	城北	総合研究棟等改修電気設備工事	立会	田崎	3	20021021	
00206	文京遺跡	城北	城北団地情報教育棟・放送大学愛媛学習センター新営その他工事（その２）	試掘	田崎	0.5	20021127	
00207	文京遺跡	城北	総合研究棟新営電気設備工事	立会	田崎	1.5	20021129	
00208		山越	山越ラグビー場防球ネット取設工事	確認	田崎	65	20021225～20021226	
00209	文京遺跡	城北	総合研究棟（理学部構内）新営電気設備・機械設備工事	立会	田崎	22.6	20030123～20030129	
00210	文京遺跡	城北	情報教育棟・放送大学愛媛学習センター新営電気設備工事	立会	吉田	1.3	20030115	
00211	文京遺跡	城北	総合研究棟改修電気設備工事	立会	田崎	1.9	20030303～20030304	

註１　1975～1984年までに行われたEU-97501～EU-98401の調査は、松山市教育委員会が担当。
註２　1986年に行われたEU-98601～EU-98605の調査は、法文学部人類考古学研究室による。

［文献］

1．森　光晴・大山正風ほか 1976：文京遺跡．松山市文化財報告書，11
2．宮本一夫編 1989：鷹子・樽味遺跡．愛媛大学埋蔵文化財調査報告，Ⅰ
3．宮本一夫編 1990：文京遺跡第８・９・11次調査．愛媛大学埋蔵文化財調査報告，Ⅱ
4．宮本一夫編 1991：文京遺跡第10次調査．愛媛大学埋蔵文化財調査報告，Ⅲ
5．栗田茂敏編 1992：文京遺跡－第２・３・５次調査．松山市文化財報告，28
6．田崎博之編 1993：樽味遺跡Ⅱ．愛媛大学埋蔵文化財調査報，Ⅳ
7．田崎博之編 1996：愛媛大学構内遺跡調査集報Ⅰ．愛媛大学埋蔵文化財調査報告，Ⅴ
8．田崎博之編 1996：樽味遺跡Ⅲ．愛媛大学埋蔵文化財調査報告，Ⅵ
9．愛媛大学埋蔵文化財調査室編 1998：文京遺跡シンポジウム－弥生大集落の解明－
10．吉田　広編 2001：愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－1995・1996年度－．愛媛大学埋蔵文化財調査報告，Ⅶ
11．田崎博之編 2002：愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－1997・1998年度－．愛媛大学埋蔵文化財調査報告，Ⅷ
12．吉田　広編 2003：樽味遺跡Ⅳ．愛媛大学埋蔵文化財調査報告，Ⅸ

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

―1999・2000年度―

愛媛大学埋蔵文化財調査報告　X

2003年3月30日

発　行　愛媛大学埋蔵文化財調査室
〒790-8577　松山市道後樋又10－13
TEL 089-927-9127

印　刷　セ　キ　株　式　会　社
〒790-8686　松山市湊町7－7－1
TEL 089-945-0112

R100 本文には古紙配合率100%の再生紙を使用しています。